

# 長良小田中遺跡

(岡山総社IC流通センター敷地造成  
事業にともなう発掘調査報告書)

2011年3月

岡山県総社市教育委員会



1 遺跡遠景（調査前・南東上空から）



2 遺跡遠景（調査後・南上空から）

卷頭図版2



1 B地区（左）・C地区（右）（上空から）

# 序

岡山県の南西部に位置する総社市は、平成17年3月22日、総社市・山手村・清音村が合併して新たに誕生しました。

新市は、「地域・文化・自然が支える心豊かな生活交流都市」を将来の都市像として、市内を四つの地域に分け、それぞれの特性を活かしたまちづくりを進めようとしています。

東部地域は、「歴史文化を守り新しい吉備文化を発信する交流のまち」と位置付けています。地域内には、古代山城鬼ノ城、国分寺などを中心とする風土記の丘があります。吉備の歴史を今に伝えてきた地域です。この伝統を残しながらも、新たな歩みが始まっています。平成3年、総社市の新たな玄関口として岡山自動車道岡山総社インターチェンジが完成しました。また、平成4年にはテクノパーク総社が操業を開始しました。

このような状況の中で、インターチェンジに隣接する長良地区に流通センターが計画されたのも、これら諸条件の整備が進んだ結果であります。

しかし、これらの開発にともなって、それぞれの用地内に存在した文化財のいくつかが消え去っていったことも事実です。すべての文化財を残すことは困難であり、やむなく記録保存として発掘調査を実施し、わたくしたちの祖先が残した足跡を記録しています。

本書はその足跡の記録を後世に伝えていくために発行したものです。この地域の歴史を理解する上で、御活用いただければ幸いです。

最後に、この調査に御協力いただきました地元関係者、および関係諸機関の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成23年3月

総社市教育委員会

教育長 萩 田 交 三

## 例　言

1. 本書は、両備ホールディングス株式会社が総社市長良地区で計画をしている流通センターの造成工事にともなって発掘調査を実施した、「長良小田中遺跡」の発掘調査報告書である。
2. 調査は、両備ホールディングスからの委託を受け、総社市教育委員会が岡山県教育委員会の指導・助言のもとに実施した。
3. 発掘調査は、平成20年6月9日から平成21年1月23日の期間で実施した。調査面積は1,858m<sup>2</sup>である。

整理作業は、平成21・22年度、報告書作成作業は、平成22年度に実施した。

4. 長良小田中遺跡の概要是、総社市教育委員会刊行の『総社市埋蔵文化財調査年報』18で報告をしている。その内容において本書と相違がある場合は、本書の記述の方が優先する。
5. 発掘調査は、総社市教育委員会文化課主査前角和夫が担当して行った。調査作業員は以下のとおりである。

大月潤一、角田一二、角田縁、中山暉、難波正治

6. 整理作業は、文化課主査前角和夫が担当して行い、整理作業員は以下のとおりである。  
犬飼真弓、田中富子

7. 本書の執筆・編集は、文化課主査前角和夫が担当して行い、文化課で校閲・校正した。

8. 発掘調査で出土した遺物、発掘調査および整理作業において作成した遺構・遺物の実測図や写真等の記録類は、総社市埋蔵文化財学習の館（総社市南溝手）にて保管している。

## 凡　例

1. 長良小田中遺跡の遺跡略号は「ナガラ」とし、調査区番号、遺構名等による台帳を作成しているが、調査時点の名称を用いたものと、整理段階で新たに名称変更したものとがある。そこで遺物には遺物番号（R001～R633）を注記して、その変更等の確認が台帳ができるようにしている。
2. 挿図の複製・一部加筆は、第2図の総社市発行の都市計画地図25,000分の1の地形図と、第3図・第4図の岡山県教育委員会発行の『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告214』の挿図である。このほか挿図の複製についてはそれぞれの箇所で明示している。
3. 遺構の類別については以下のような略記号で表記し、遺構番号は重複しない連番を付したが、報告に際して番号を変更したものもある。この対応も台帳で確認できるようにしている。

SH：竪穴住居 SB：掘立柱建物 SK：土坑 SD：溝 SE：井戸

4. 遺構図や遺物実測図は、CADを用いた挿図作成を今回はじめて採用したため、遺構番号など文字の大きさの統一がとれていない。また、遺物実測図における断面はすべて黒塗りとし、土器の種類による黒塗り・白抜きの区別は行っていない。
5. 本書の標高値は海拔高であり、遺構実測図の方位は世界測地系による座標北である。

# 目 次

序  
例言  
凡例  
目次

第1章 調査の経緯と経過 .....	1
第1節 調査にいたる経緯 .....	1
第2節 調査の体制 .....	2
第3節 調査の経過 .....	2
1) 試掘調査 .....	2
2) 発掘調査 .....	7
第2章 遺跡の位置と環境 .....	10
第1節 遺跡の位置 .....	10
第2節 遺跡の地理的環境 .....	10
第3節 遺跡の歴史的環境 .....	12
第4節 長良地区の遺跡 .....	18
第3章 発掘調査の概要 .....	22
第1節 A地区の調査記録 .....	24
1) A地区上層 .....	24
1 掘立柱建物 .....	25
2 溝 .....	29
3 水田畦畔 .....	33
4 土坑・落ち込み .....	35
5 ピット .....	43
6 その他 .....	46
2) A地区下層 .....	47
1 竪穴住居 .....	48
2 掘立柱建物 .....	49
3 溝 .....	50
4 井戸 .....	52
5 土坑 .....	60
6 鎌冶炉 .....	65
7 ピット .....	66
3) A地区的まとめ .....	69
第2節 B地区的調査記録 .....	70
1) B地区上層 .....	70
1 溝 .....	72
2 土坑 .....	75
3 ピット .....	75

2) B 地区下層	76
1 壓穴住居	77
2 掘立柱建物	83
3 井戸	88
4 溝	89
5 土坑	91
6 ピット	91
3) B 地区のまとめ	94
第3節 C 地区の調査記録	95
1) C 地区上層	95
1 溝	96
2 土坑	99
3 ピット	102
2) C 地区下層	104
1 壓穴住居	105
2 掘立柱建物	109
3 溝	110
4 土坑	113
5 井戸	117
6 ピット	118
3) C 地区のまとめ	119
第4章 まとめ	121

#### 図・図版目次

卷頭図版1	1 遺跡遠景（調査前・南東上空から）	第17図	高松田中遺跡 東部の遺構配置図と土層柱状模式図（『岡山県埋蔵文化財調査報告』162,p59）… 20
卷頭図版1	2 遺跡遠景（調査後・南上空から）		
卷頭図版2	1 B地区（左）・C地区（右）（上空から）	第18図	イキ山遺跡 遺構配置図（『総社市埋蔵文化財調査年報』9, p133）… 21
第1図	トレチ配置図および新規発見遺跡位置図	… 3	調査位置図 …… 22
第2図	トレチ 平面図・断面図	… 4	昭和49年度撮影の空中写真（『国土画像情報（カラー空中写真） 国土交通省』）… 23
第3図	T-18 平面図・断面図	… 5	A地区 上層の遺構全景（西から）… 24
第4図	T-18 土層断面	… 5	A地区 上層の遺構全体図 …… 24
第5図版	土層断面 T-15（左）・T-7（中）・T-10（右）	… 5	掘立柱建物の検出状況（左奥がSB01,
第6図	長良小田中遺跡 北側のサブトレチ 断面図	6	左手前がSB02, 右がSB0と流路）… 25
第7図	長良八ノ坪遺跡 溝 断面図	… 6	SB01 平面図・断面図 …… 25
第8図	長良平才遺跡 畦畔 平面図・断面図	… 6	P018の遺物出土状況（左・中）、P55の土層断面
第9図版	畦畔検出状況 排水路5（左）、排水路6（右）	7	（右）… 25
第10図	調査区配置図	… 8	P018の遺物出土状況（左・中）、P55の土層断面
第11図	総社市位置図	… 10	（右）… 25
第12図	長良小田中遺跡の位置（S=1/110,000）	… 11	掘立柱建物群とピット群の配置図 …… 26
第13図	カシミール3Dによる総社平野		P018（SB01）の出土遺物 …… 27
	（岡山県教育委員会作成）		SB02 平面図・断面図 …… 27
第14図	周辺遺跡分布図（岡山県教育委員会作成）	… 13	断ち割り断面 P094（左）・P095（右）… 27
第15図	総社市長良の周知遺跡	… 18	P078・095（SB02）の出土遺物 …… 28
第16図	長良山遺跡出土の土器棺と出土遺物		SB03 平面図・断面図 …… 28
	（『総社市史』考古資料編, p14）		P061（SB03）の出土遺物 …… 29
			SB03の検出状況（東から）。P063の断ち割り

断面	29	第86図版	SE336 土層堆積状況	52
溝の検出状況（左手前が SD002、左奥が SD006・007、右が SD040・041・049）	29	第87図	SE336 平面図・断面図	52
溝（東部）平面図・断面図	30	第88図	SE336の出土遺物	52
SD002 土層断面（南から）	30	第89図版	SE340 土層断面と遺物出土状況	53
SD006 挖り上がり（南から）	30	第90図	SE340 平面図・断面図	53
溝（西部）平面図・断面図	31	第91図	SE340の出土遺物1	53
土層断面 SD041（上）、SD049（下）	32	第92図	SE340の出土遺物2	54
SD049 土層断面図	32	第93図	SE340の出土遺物3	55
SD049の出土遺物	32	第94図版	SE341 土層断面と遺物出土状況	55
水田畦畔 検出状況（左）・掘り上がり（右）	33	第95図	SE341 平面図・断面図	55
水田畦畔の平面図・断面図と調査区中央部の南北土層断面	34	第96図	SE341の出土遺物	56
水田畠の出土遺物	35	第97図版	SE342 遺物出土状況	56
SK010・011・013 平面図・断面図	35	第98図	SE342 平面図・断面図	56
土坑群 配置図	36	第99図	SE342の出土遺物1	56
土層断面 SK010（左）・SK013（右）	37	第100図	SE342の出土遺物2	57
SK031・033 平面図・断面図	37	第101図	SE345 平面図・断面図	57
土層断面 SK013（左）・SK033（右）	37	第102図版	SE345 土層断面	57
SK033の出土遺物	37	第103図	上層で検出した SE345周辺の出土遺物	58
SK068 平面図・断面図	38	第104図	SE345の出土遺物1	58
SK068・069 平面図・断面図	38	第105図	SE345の出土遺物2	59
SK068の出土遺物	38	第106図	SK300・304 平面図・断面図	60
SK068の出土遺物	38	第107図	SK339・343・344 平面図・断面図	60
SK068の出土遺物	38	第108図版	土層断面 SK339（左）、SK343（右）	61
土層断面 SK068（左）・SK069（右）	38	第109図	SK339の出土遺物	61
SK075・076 土層断面図	38	第110図	SK343の出土遺物	62
SK075の出土遺物	39	第111図	SK270・3316・330 平面図・断面図	62
SX008 土層断面図と出土遺物	39	第112図版	土層断面 SK3316（左）、SK330（右）	62
SX005 土層断面図	40	第113図	SK3316の出土遺物	63
SX005の出土遺物	40	第114図	SK323 平面図・断面図	63
SX096 平面図・断面図・遺物出土状況図	40	第115図版	SK233 土層断面	63
SX096 遺物出土状況（北から）	41	第116図	SK323の出土遺物	63
SX096の出土遺物1	41	第117図	SK294・3312 平面図・断面図	64
SX096の出土遺物2	42	第118図版	SK3312 土層断面	64
P071・072 断面半裁（上）と斬ち割り（下）	43	第119図	SK3312の出土遺物	64
P021 平面図・断面図	43	第120図	SK313・3303 平面図・断面図	65
P021 遺物出土状況	43	第121図版	土層断面 SK313（上）、SK3303（下）	65
P021の出土遺物	43	第122図版	#309 検出状況	65
ピット群 平面図・断面図	44	第123図	#309 平面図・断面図	65
P035 平面図・断面図	45	第124図	ピットの出土遺物	66
P035 遺物出土状況	45	第125図	ピット群 配置図	67
P035の出土遺物	45	第126図	ピット 平面図・断面図	68
P034の出土遺物	45	第127図版	B地区 全景（北から）	70
遺構にともなわない遺物	46	第128図版	大溝・大畦・溝群	70
A地区 下層の遺構全体図	47	第129図	B地区 上層の遺構全体図	71
SH01 平面図・断面図	48	第130図版	大溝 全景（南から）	72
SH01 検出状況	49	第131図	大溝 平面図	72
SB01 平面図・断面図	49	第132図版	大溝 土層断面	73
SB01 挖り上がり（西から）	50	第133図	大溝 土層断面図	73
P3321 土層断面	50	第134図	周回溝 土層断面図	73
SD217・312 平面図・断面図	50	第135図	細溝群 土層断面図	74
SD311 断面図	50	第136図	木田層の出土遺物	75
SD311 土層断面	50	第137図	SK01・P02 平面図・断面図	75
溝・戸井・土坑・炉 配置図	51	第138図版	遺構の検出状況 大畦の水口（左）、細溝の土層断面（右）	75
SD311の出土遺物	52	第139図	B地区 下層の遺構全体図	76
SD335 断面図	52			

第140図版	SH01掘り上がり（東から）	77	第194図版	大溝内の溝D（南から）	99
第141図版	SH01 カマド	77	第195図版	土層断面（左 SK4とSK3, 右 SK6）	99
第142図	SH01 平面図・断面図	77	第196図	土坑1～4 平面図・断面図	100
第143図	SH01カマド 平面図・断面図	78	第197図	土坑5・7・8 平面図・断面図	100
第144図	SH01の出土遺物	78	第198図	土坑群 配置図	101
第145図版	SH02 掘り上がり（東から）	78	第199図	土坑9 平面図・断面図	101
第146図	SH02 平面図・断面図	79	第200図	土坑10 平面図・断面図	101
第147図版	SH02 中央#1（南から）	79	第201図	SK11・20 平面図・断面図	102
第148図	SH02 中央#1 実測図	79	第202図	ピット群 配置図	102
第149図	SH02の出土遺物	79	第203図版	ピット群 全景（南から）	103
第150図	SH03 平面図・断面図	80	第204図	ピット群 平面図・断面図	103
第151図	SH03 カマド実測図	80	第205図	P25の出土遺物	103
第152図版	SH03 掘り上がり（上）・カマドの検出状況 (下)	80	第206図	C地区下層 造構配置図	104
第153図	SH03の出土遺物	81	第207図版	SH01 掘り上がり（東から）	105
第154図	SH04 平面図・断面図	81	第208図	SH01 平面図・断面図	105
第155図版	SH04 掘り上がり（南から）	81	第209図	SH01の出土遺物	106
第156図	SH05 平面図・断面図	82	第210図版	SH02 掘り上がり（南から）	106
第157図版	SH05 掘り上がり（南から）	82	第211図	SH02 平面図・断面図	106
第158図版	SH05 土層断面	82	第212図版	SH02 土器出土状況（南から）	107
第159図版	遺物(145) 出土状況	83	第213図	SH02の出土遺物	107
第160図	SH05の出土遺物	83	第214図版	SH03 掘り上がり（南から）	107
第161図	SB01 平面図・断面図	83	第215図	SH03 平面図・断面図	107
第162図版	SB01 掘り上がり（東から）	84	第216図版	SH04 掘り上がり（南から）	108
第163図	SB02 平面図・断面図	84	第217図	SH04 平面図・断面図	108
第164図版	SB02 掘り上がり（東から）	84	第218図	SB01 平面図・断面図	109
第165図	SB03 平面図・断面図	85	第219図版	左・SB01 (P270) 右・SB01掘り上がり (西から)	109
第166図版	SB03 掘り上がり（南から）	85	第220図	SB02 平面図・断面図	110
第167図版	P254の断ち割り断面	85	第221図	SD210・246・248 断面図	110
第168図版	SB04 掘り上がり（南から）	86	第222図版	SD248 遺物出土状況	110
第169図	SB04 平面図・断面図	86	第223図	SD210・248の出土遺物	111
第170図	SB05 平面図・断面図	87	第224図	SD218・220・282 土層断面図	111
第171図版	SB05 掘り上がり（南から）	87	第225図版	SD218 遺物の出土状況	111
第172図	SE01平面図・断面図	88	第226図	SD209 土層断面図	111
第173図	SE01 遺物出土状況（南から）	88	第227図版	SD209 上層断面	111
第174図	SE01の出土遺物	88	第228図	SD209の出土遺物	112
第175図	SD301 掘り上がり（南から）	89	第229図	SD274 土層断面図	113
第176図	SD301 平面図・断面図	89	第230図	溝・土坑・井戸 配置図	113
第177図	SD301の出土遺物	89	第231図版	SK203 土器出土状況	113
第178図	SD304 平面図・断面図	89	第232図	SK203 平面図・断面図	114
第179図	B地区下層 井戸・溝・土坑の配置図	90	第233図	SK203 土器取り上げ図	114
第180図	SK305 平面図・断面図	91	第234図	SK203の出土遺物1	115
第181図	SK222 平面図・断面図	91	第235図	SK203の出土遺物2	116
第182図	ピット群 配置図	92	第236図	SK227・310 土層断面図	117
第183図	ピット群 平面図・断面図	93	第237図	SK287の出土遺物	117
第184図	ピットの重複（P202と SH02P2）	94	第238図版	SE222 検出状況	117
第185図版	C地区上層造構 全景（南から）	95	第239図	SE222 平面図・断面図	117
第186図	C地区上層 造構全体配置図	95	第240図	SE222の出土遺物	118
第187図	大溝 平面図	96	第241図	ピット群 平面図	118
第188図版	大溝 全景（南から）	96	第242図	ピット群 土層断面図	119
第189図	大溝 断面図	97	第243図	深掘りトレンチ 土層断面図	120
第190図版	大溝 断面C	97	第244図版	A地区 出土遺物1	124
第191図版	東西溝・溝A（東から）	97	第245図版	A地区 出土遺物2	125
第192図	溝群 配置図・断面図	98	第246図版	A地区 出土遺物3	126
第193図	細溝Aの出土遺物	99	第247図版	B・C地区 出土遺物	127

## 第1章 調査の経緯と経過

### 第1節 調査にいたる経緯

長良小田中遺跡は、総社市長良に所在している。

岡山総社IC流通センターの敷地は、岡山自動車道岡山総社インターチェンジの西に隣接しており、物流を中心とした企業立地用地として誘致が進められていたものである。

事業者である両備ホールディングス株式会社（以下事業者）により、岡山総社IC流通センター設置の計画が進められ、平成19年3月には総社市開発連絡調整会議への協議がなされることとなった。会議では、平成19年5月に開発申請を行い、翌20年1月から工事着工の予定であった。

平成19年7月になり、事業者と教育委員会との間で埋蔵文化財の取り扱いについての本格的な協議がはじめられた。計画地内には周知の遺跡は確認されていない。しかし、周辺の状況から判断して、遺跡の存在する可能性もあり、事前の試掘調査が必要であるとの回答を行った。

調査はできるだけ早い段階に行う必要があったが、事業地内では稲の作付けを行っていたため、その刈取り後に試掘調査を実施する方向で協議が進められた。平成19年11月5日より試掘調査を開始した。

試掘調査では、手掘りによるトレンチを24ヵ所、バックホーによるトレンチを7本設定した。その結果、事業地の南東側で一段周囲より高くなっている地形の範囲内で新たな遺跡が発見された。ほかにも予定地の西側端と中ほどから東よりの2ヵ所においても遺跡の可能性のある地形の高まりを確認することができた。

この結果を受け、平成20年2月27日に事業者と教育委員会は文化財保護の覚書を締結した。

覚書は、事業の実施にあたって文化財の破壊を防止するために最善の努力を講じることとし、原則として文化財は現状で保護保存するものであった。しかし、先の試掘調査により新たな遺跡となった範囲が事業地内の広範囲に及んでいることから、さらに詳細に遺跡範囲を確定させ、開発可能な区域を見極める必要があった。そこで追加の調査を平成20年3月12日から実施した。

この追加調査の結果をもとに、開発と文化財の保存についての調整協議を重ねた。

協議を進める中で、事業の開始にあたって事業地を周回する工事用道路を兼ねた農道の設置や現況水路の付け替えにともなう迂回水路の設置、さらに防災工事としての仮設沈砂池の掘削も必要となつた。これらの設置位置についてもできるかぎり遺跡範囲から除外をするため、三度目の、遺跡範囲確定のための調査を行つた。

これにより遺跡の範囲は限定できたものの、すべての工事をその範囲内から除外することは不可能であった。いずれもその位置の大きな変更は難しく、敷地北端の新設用水路は計画通りに、仮設水路は高低差を加味しつつできるかぎり遺跡範囲の端を通過するように配慮し、仮設沈砂池は遺跡範囲部分を除外していただいた。それぞれの工事に対しては立会調査・確認調査を行つてゐる。

そして、平成20年6月6日、発掘調査に関する覚書を締結した。

調査地は、長良小田中遺跡の範囲内で実施される、防災調整池と流通業務施設用地3のうちの建物が配置される範囲である（第10図）。

また、長良ハノ坪遺跡と長良平才遺跡については造成後に建物の建築される段階で、それぞれ立会調査等の対応をすることとした。

## 第2節 調査の体制

発掘調査は、事業者からの委託を受け、総社市教育委員会が岡山県教育委員会の指導・助言のもとに実施することとなった。

発掘調査作業は平成20年6月9日から平成21年1月23日まで行い、整理作業は、平成21年度と平成22年度に行なった。

調査にあたり、事業者には経費の全額負担をはじめとして多くの便宜をはかっていただいた。発掘調査費用は総額で7,060,232円である。また、設計を担当した備南測量設計株式会社においては基礎測量図面や国土座標データの提供、造成工事を担当した戸田建設株式会社広島支店においては工事日程と文化財調査との調整をはじめ、バックホーによる表土除去や実測ポイントの測量など多くの労を煩わした。記して厚くお礼申し上げます。

### 調査組織（平成19・20年度）

教　育　長	栗田　交三
教育次長	加藤　信二
文化課長	浅沼　節夫（～平成20年3月） 荒木　泰行（平成20年4月～）
主　幹	日野浦弘幸（～平成20年3月） 谷山　雅彦（平成20年4月～）
課長補佐	谷山　雅彦（～平成20年3月　調整担当） 平井　典子（平成20年4月～　調整担当）
主　査	前角　和夫（平成19年4月～　調査担当）
主　任	篠田　健一（庶務担当）
主　事	佐野　功（庶務担当）

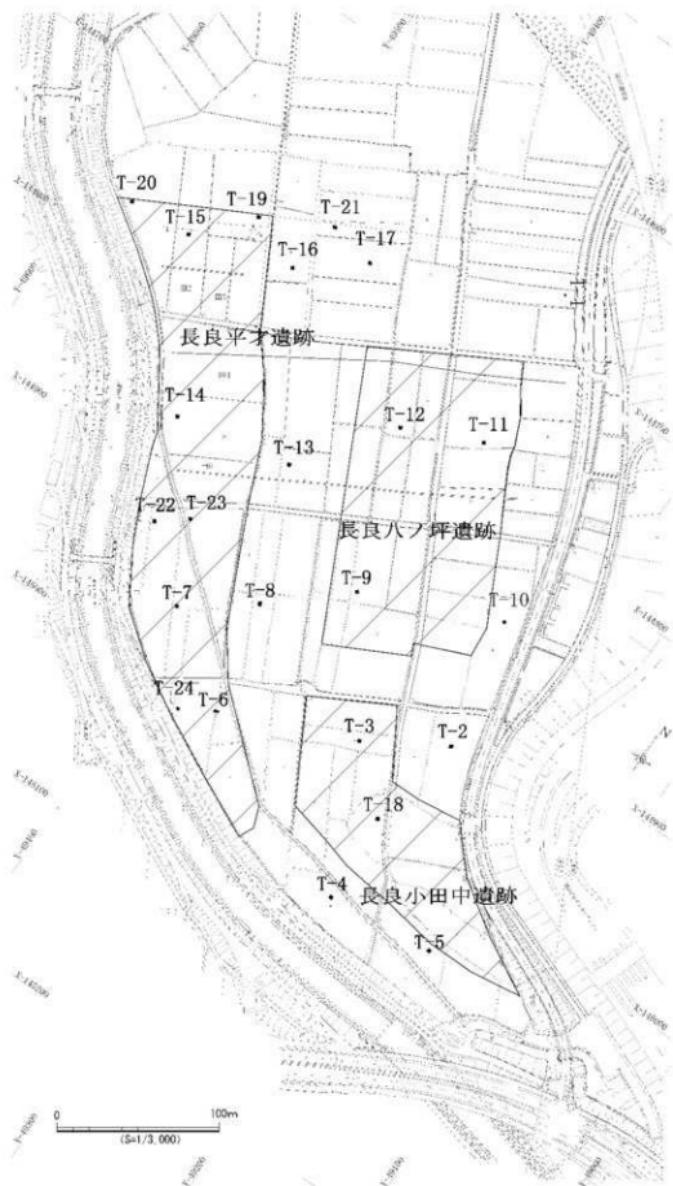
## 第3節 調査の経過

### 1) 試掘調査

試掘調査は、まず、開発予定地内に遺跡が存在しているかどうかについて、全体的な確認を行うため、1m角のトレンチを18ヶ所と幅0.8mの細長いトレンチを2ヶ所に設定して行った。概ね100m四方に2ヶ所相当の調査である。これにより全体的な土層の堆積状況について確認することとした。

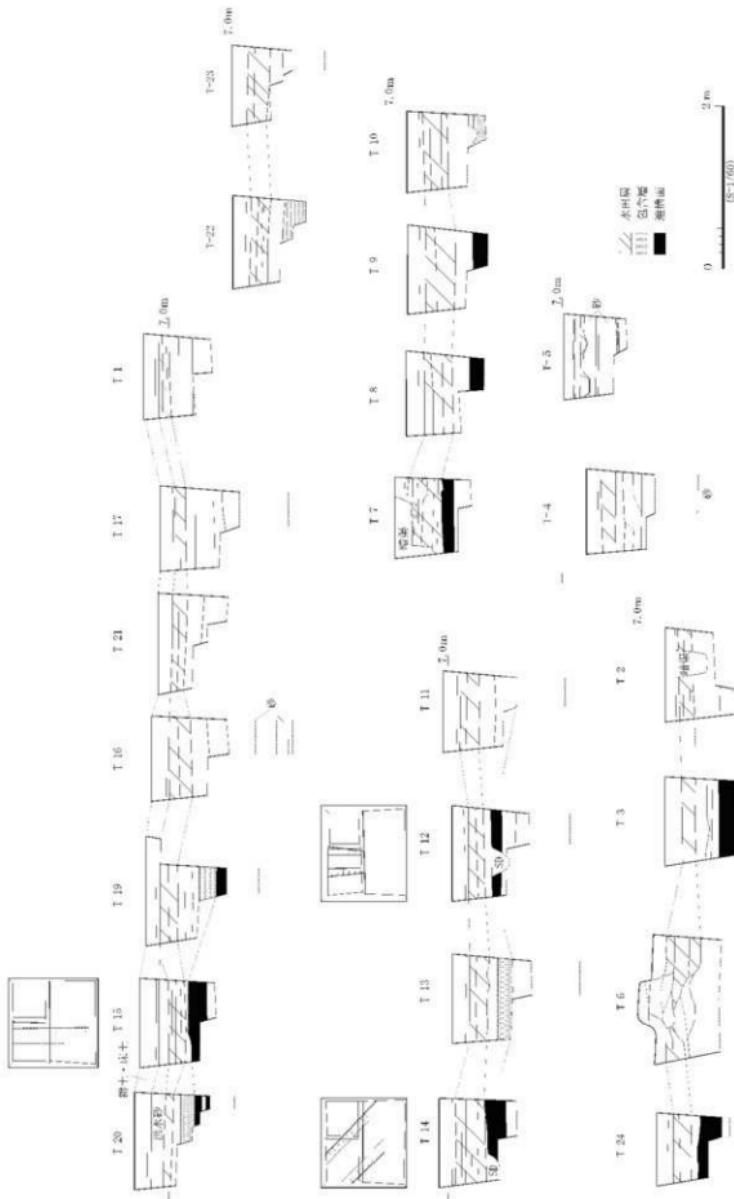
調査は、平成19年11月5日から11月29日の間で実施した。他の遺跡の発掘調査も兼ねていたため、調整を行いながらの試掘調査となり多くの期日を要した。

その後、開発との調整協議を進める中で、遺跡範囲をさらに限定させる必要が生じたことから、追



第1図 トレンチ配置図および新規発見遺跡位置図

第2図 トレニチ 平面図・断面図



加の調査を行っている。

平成19年12月4日・5にはトレンチを6ヵ所、平成20年1月16日～18日にはサブトレンチを5ヵ所に設定して実施した。

これらの試掘調査の結果、遺構を検出できたのはトレンチ12・14・15・18である。また、遺構が存在しそうな土層面を確認できたのはトレンチ3・7・9・19・20・22・23である。

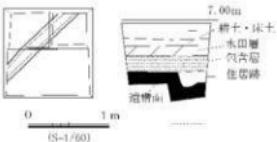
トレンチ18（第3図）では、その断面に竪穴住居の壁帶溝と考えられる溝状遺構が検出された。このトレンチの周囲では20cmほど高くなっている地形が明瞭に残されていた。また、その周囲に設定した3ヵ所のサブトレンチからは、その高まりを削って水田化とした状況が判明し、残された部分がこの高まりとなっていることも確認できた。

トレンチ12では幅36cm、深さ20cmの小溝が1条、トレンチ14では幅48cm、深さ15cmの小溝が1条、トレンチ15でも小溝と思われる深さ7cmの遺構を検出した。

また、トレンチ3では黄褐色～茶褐色粘質土、トレンチ7・9では茶褐色粘質土、トレンチ19・20では淡茶褐色～黒褐色粘質土と、いずれも硬くしまった土層であった。遺構は検出されなかったものの、遺構が検出されたトレンチに近接していることから、これらの土層が遺構面になるものと判断している。

さらに、遺物包含層、もしくは斜面堆積による包含層とおもわれる土層をトレンチ10・11・13・15・19・20・22で確認している。

このほかのトレンチでは、沼地になるような粘質の土層や青灰色粘土、洪水に起因する砂層が認められ、河道や谷地形などの低位部にあたるものと判断した。



第3図 T-18 平面図・断面図



第4図版 T-18 土層断面



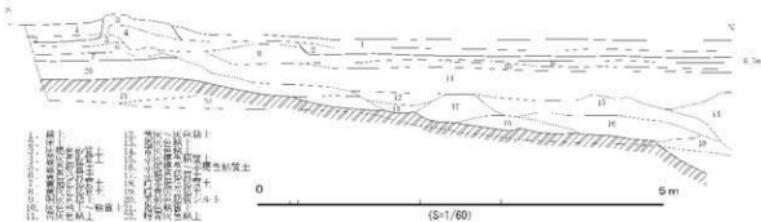
第5図版 土層断面 T-15(左)・T-7(中)・T-10(右)

遺物が出土したトレンチは、遺構または遺構面の存在を確認したトレンチが主であり、弥生土器、土師器、須恵器、土師質土器、陶器、磁器のほか、鉄滓などもあった。確実に遺構にともなうものは、トレンチ18の竪穴住居から出土した土師器のみで、あととは包含層や水田層の土層、あるいは排土中の出土である。全体量でみると、それほど多くなく、そのほとんどは小破片にすぎなかった。

このトレンチ調査の結果、事業地内では3ヵ所に新らたな遺跡の存在を確認することができた。

長良小田中遺跡は、予定地の南東端に位置するトレンチ18を中心に分布しており、北西から南西にのびる微高地に位置する。トレンチ18で竪穴住居と思われる遺構が検出されていることから、集落域に該当するものと判断される。

遺跡の北側へ設定したサブトレンチ（第6図）から、土層20とした包含層と、土層21・22とした基盤層がともに北へ向かって下降していること判明した。土層14・19は青灰色系の粘土であり、また土層9～11も粘土層の堆積土である。遺跡の北側は、低位部になると判断できた。対して、南側は、トレンチ5の状況から洪水砂と青灰色粘土となり、この洪水砂も南に向かって下降していることから、河道の肩に近い状況を示しているものと考えている。



第6図 長良小田中遺跡 北側のサブトレンチ 断面図

長良八ノ坪遺跡は、予定地中ほどから東よりに位置するトレンチ9を中心と分布している。南の長良小田中遺跡との間には砂川の支流と考えられる谷状地形が確認できる。追加の試掘調査では、溝が検出されたのみで、その遺構密度は稀薄と推定された。

溝は、2条である。トレンチの断面で確認されたことから、南に調査範囲を拡張し、平面的な検出を行った。

SD 1 は幅1.2m、深さ

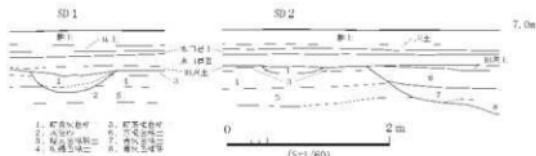
26cmを測る。直線の溝で、

その方向はN-31.1°-Wである。

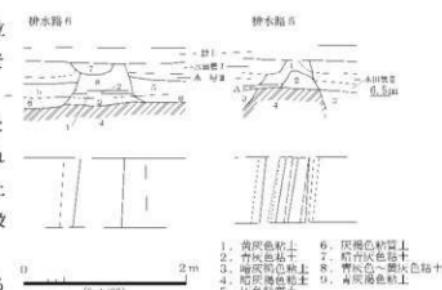
SD 2 は幅0.75m、深さ9cmを測る。断面位置と、平面の検出からやや湾曲しており、その方向はN-38.8°-Wである。

SD 2 の東側には60cmほど下降した河道となるような窪地がSD 2 の埋没後に形成されており、東へ34mほど続いている。その埋土は粘土や砂であり、洪水砂や澗水粘土で埋没したものと考えられる。

長良平才遺跡は、予定地の西端に位置するトレンチ14を中心として、砂川に沿って細長



第7図 長良八ノ坪遺跡 溝 断面図



第8図 長良平才遺跡 畦畔 平面図・断面図

く分布している。追加の調査では幅30cm前後、深さ3cmの溝を検出したほかに、遺跡西側の現用水路の付け替え工事にともなった排水路位置での調査では古い畦畔が等間隔に存在していることが確認できた。

トレント14と同じ水田地内に排水路5の調査区を設定した。そこでは上下に重複した畦畔が検出された。畦畔の方向は平均でN-59.7°-Eである。

上位の畦畔は、対応する水田層が2枚認められることから、作り替えが行われている。水田層Ⅱとした黄灰色粘質土にともなう下面幅67.5cm、高さ29.7cmの畦畔から、水田層Ⅰとした灰色砂質シルトにともなう下面幅40.9cm、高さ14.6cmへと規模を小さくしている。

下位の畦畔は、水田層Ⅲにともなう下面幅47.9cm、高さ23.3cmとなる。さらにその下層にも畦畔状の高まりが認められ、土層3を水田層として考えることが可能である。しかし、上位にあった畦畔や水田層の影響も考えられることから、断定はしていない。

排水路5の南側の水田地内に排水路6の調査区を設定した。水田層Ⅰ～Ⅳにともなう畦畔が検出された。畦畔の方向はN-59.6°-E前後である。この畦畔には作り替えが認められず、長期にわたって同じ位置で利用されていたものであった。その規模は下面幅が100cmと広く、高さも50cmと高い。

このほかに排水路4・7の調査区でも畦畔が検出されており、排水路4・5・6の畦畔の間隔は4～5間が28.82m、5～6間が31.02mを測る。等間隔とは断言できないまでも、畦畔の方向はほぼ同じになることから一体の水田經營がなされていたものと思われる。ちなみに畦畔の方向は現在の畦畔の方向とほぼ同じである。



第9図版 畦畔検出状況 排水路5(左)、排水路6(右)

## 2) 発掘調査

発掘調査は、平成20年6月9日から開始した。

発掘調査の範囲は、長良小田中遺跡にあたる防災調整池と流通業務施設用地内の建物予定地範囲である。

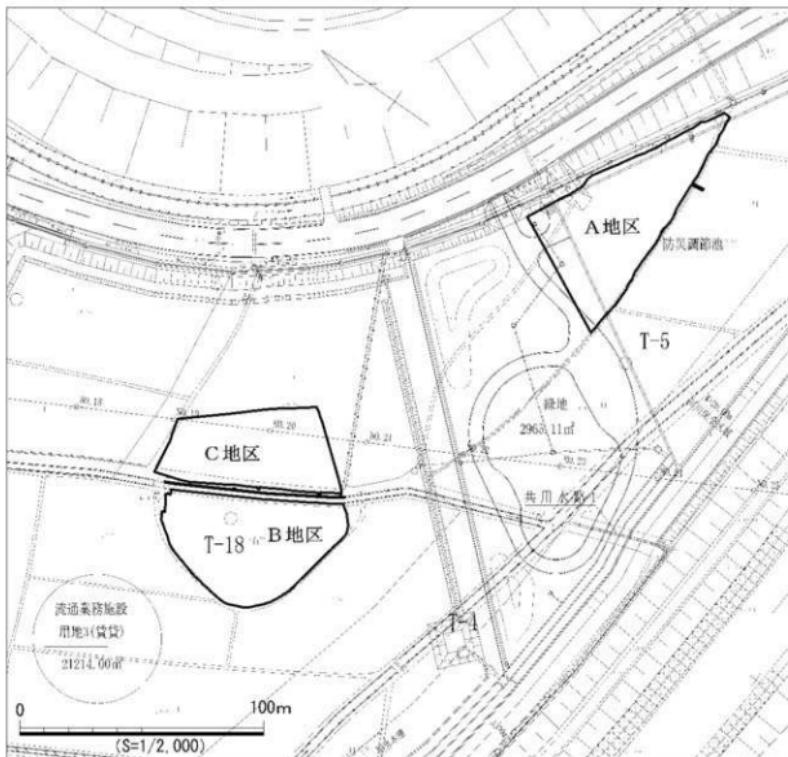
防災調整池をA地区、建物予定地範囲をB地区とし、当初この2地点で実施する調査計画にもとづき開始した。

A地区では、平成20年6月9日から8月22日の調査期間で開始した。基本的に2面の遺構を検出したが、バックホーの都合で下面の遺構検出を2度に分けたことから、現地調査では3回の遺構検出・調査を行なっている。このため、調査終了が9月14日にずれ込むこととなった。

A地区の終了を受け、B地区の調査を、平成20年9月16日から12月26日の調査期間で開始した。し

かし、工事工程の変更にともなって調査区を2つに分けることとなり、新たにC地区を設定している。現況水路の西側をB地区とし、東側をC地区とした。B地区の上面の調査終了後、C地区の上面、B地区の下面、C地区の下面という順で交互に調査を実施し、B地区の明け渡しを先に行えるよう、工事工程の作業に合わせた調査計画へと変更した。けれども、B地区とC地区の明け渡しにあまり差が出てなかったことから、最終的には両者の終了後に明け渡すこととなった。

平成21年1月23日、すべての発掘調査を終了した。



第10図 調査区配置図

整理作業は、調査の終了と同時に別の発掘調査に入ったことから、遺構図面の修正、写真整理および基礎データの整理等もほとんどことができなかつた。平成22年8月22日に岡山県古代吉備文化財センターと岡山県立博物館が主催する「大地からの頼り2009」の発掘調査報告会で調査概要報告と遺物展示を行うため、遺物の一部を先行して整理したのが最初である。

本格的に土器洗いを開始したのは、平成21年11月18日からである。と同時に、土器の接合・復元作業を並行し、さらに遺物台帳の作成と図化が必要な土器等の選別も行った。けれども、この作業に専念して進められる状況になかったことから、いずれの作業も予想以上の時間を要した。当初、報告書

作成作業も、平成21年度内に完了する予定であったが、その前段階の作業の進行状況から、次年度に送らざるを得なかった。平成22年度では、遺物の実測や遺構図のデジタルトレースを開始した。そしてそれぞれの図版作成から報告書刊行にいたるまでを行い、刊行に至った。

#### 調査抄録

平成20年6月9日	A地区の調査を開始する
平成20年7月8日	A地区1面の全景写真撮影を行う
平成20年8月8日	A地区2面の全景写真撮影を行う
平成20年9月12日	A地区3面の全景写真撮影を行う
平成20年9月14日	A地区的図面作成が終了する
平成20年9月16日	B地区の調査を開始する
平成20年10月18日	B地区1面の全景写真撮影を行う
平成20年10月20日	C地区の調査を開始する
平成20年11月13日	C地区1面の全景写真撮影を行う
平成20年12月28日	B・C地区2面の全景写真撮影と、ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を行う
平成21年1月23日	すべての調査を終了する
平成21年11月18日	整理調査（土器の洗浄）を開始する
平成22年度	報告書刊行への作業を開始する

#### 発掘調査方法

発掘調査は、長良小田中遺跡を記録保存による調査とし、防災調整池により遺跡が消滅する範囲となるA地区を全面調査とした。B地区・C地区とした流通業務施設用地の遺跡範囲内については、造成後の建物配置や規模等が現段階では不明であり、立会調査の対応にすることや建築時に発掘調査を実施することが調査条件や経費の点から、現時点で調査を実施した場合より差が大きくなるものと判断したことから、建物予定範囲内についても全面調査とした。

現地調査では、表土の掘削作業にバックホーを使用したほか、下層の遺構面までの掘削についても適時用いた。

実測図は、遺構平面・断面各図を任意基準点から1/20の縮尺で計測測量。その任意基準点を国土座標に変換するため、随時光波距離計を用いて測量を行った。

調査に関わる記録写真是35mmカメラと中型カメラ（6×4.5cm判）を使用して適時撮影を行い、さらにデジタルカメラも併用した。また、空中写真ではラジコンヘリを用いた俯瞰撮影を行った。

空中写真撮影以外の写真撮影および遺構測量図の作成は調査担当者がすべて行い、基準点測量については事業者によるものである。

#### 文化財保護法に基づく文書

遺跡発見の通知（第97条）	平成20年6月5日
埋蔵文化財試掘調査の報告（第99条）	平成20年6月6日
埋蔵文化財発掘の届出（第93条）	平成20年6月6日
埋蔵文化財発掘調査の報告	平成21年1月16日
埋蔵文化財発見届および保管証の提出	平成21年2月5日

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 遺跡の位置

総社市は、岡山県の南西部に位置している。

昭和29年3月31日、総社町と周辺6村の合併により市制が施行される。昭和47年には北部の昭和町を編入する。そして全国で平成の大合併が実施されていたさなか、総社市と都窪郡山手村・清音村の1市2村の合併が平成17年3月22日に実現され、新総社市が誕生した。

新市域は、東で岡山市、南で倉敷市、北で吉備中央町・高梁市、西で矢掛町・井原市と接し、面積は212.00平方kmとなった。合併当時の人口は67,707人でスタートし、平成22年12月末現在では67,474人である。

長良小田中遺跡は、総社市の東部地域に位置する大字長良に所在し、総社市役所からは東へ約5kmの地点である。長良地区は、東側が岡山市に接し、西側が独立する長良丘陵地、南側が前川、北側が吉備線と岡山自動車道によって区切られている。この丘陵地の東斜面を中心に集落がまとまって展開している。そしてそのほかの部分は水田の広がった農業地帯である。

岡山市との境には、岡山自動車道岡山総社インターチェンジが平成3年に供用を開始している。このインターチェンジに事業地が隣接していることからも、物流の拠点施設とした企業立地に適していた。この立地の好条件から、今回の開発がもたらされたものである。

### 第2節 遺跡の地理的環境

長良小田中遺跡は、総社平野の東端に所在している。

総社平野は、北に吉備高原の南端となる丘陵地帯が、南に福山をはじめとする山塊があり、その間にはさまれた南北約2.5km、東西約7.5kmの細長い平野である。

総社平野の西端にある高梁川、現在は総社市域の中央を南へと流れ、倉敷市を通り、瀬戸内海へと注がれている。しかし、かつてはその流れを東に向け、総社平野内に流れ込む支流が存在していた。その支流が蛇行しながら肥沃な平野を形成しつつ、足守川へと合流する。その間にも北側の丘陵地からは、砂川、久米田川、桜川、血吸川などが平野内に流れ込み、ともに足守川から筮ヶ瀬川へ、そして最終的に児島湾に注いでいた。

この高梁川の支流のひとつが前川である。



第11図 総社市位置図

またひとつが平野内を蛇行して流れている十二箇郷用水である。

この前川も用水も、その出口は長良地区を通過している。総社平野内に降り注いだ大雨はいずれもこの地域に集中する。このことから長良地区はこれまでいくたびもの洪水被害に見舞われた地点であったといえる。



第12図 長良小田中遺跡の位置 (S=1/110,000)

長良小田中遺跡は、長良地区の中央を南北に流れる砂川の左岸側に位置する。遺跡の南側は前川が、東側は血吸川が流れている。遺跡の三方が中小の河川に囲まれるという、特異な沖積低地に立地している。総社平野の東端部にあたり、もっとも低い位置にあたる。標高は7m前後を測る。

総社平野内を蛇行しながら形成された多くの自然堤防や後背湿地は、集落や水稻栽培の適地となつた。その反面、大雨の度に洪水に見舞われるという危険性もはらんでいる。前川の堤防である千間土手が現在よりも低かった、あるいは築造されるまでの江戸期以前においては、度重なる洪水の危険性から一時期、丘陵地斜面へ居住地を移転し、そのまま現在にいたっている集落もある。また、明治26年の洪水によって前川に接していた貝野村が壊滅するという被害もあった。この状況は、さらにさかのぼってみると、弥生時代の集落構成の中で、丘陵地に集落が営まれたひとつの要因であったのかもしれない。



第13図 カシミール3Dによる総社平野（岡山県教育委員会作成）

### 第3節 遺跡の歴史的環境

総社市内で最も古い時期の遺跡は、総社平野の北辺に位置する丘陵地からナイフ形石器などが採集された浅尾遺跡(12)、宝福寺裏山遺跡が知られている。この遺跡の存在により市内における祖先の足跡が約2~3万年前の先土器時代までさかのぼることがわかった。

しかし、これらの遺跡はわずかな石器の出土地として知られているにすぎない。長良地区の南にあたる前川の沖積地に立地した窪木薬師遺跡(24)からもナイフ形石器などが出土しており、平野部を含めて遺跡数は増えつつあるものの、石器以外の生活痕跡となる遺構の存在を示す資料は検出されていない。このことから、調査数が少ないという条件内であるが、定住という段階の遺跡形成ではなく、キャンプサイトとして丘陵地から丘陵地へ移動するその途中で一時的な遺跡として形成されたものではないかと考えられる。



- |                |                 |             |             |
|----------------|-----------------|-------------|-------------|
| 1. 南溝手遺跡       | 17. 般部遺跡        | 33. 千足古墳    | 49. 緑山古墳群   |
| 2. 離木遺跡        | 18. 深町遺跡        | 34. 作山古墳    | 50. 江崎古墳    |
| 3. 總社遺跡        | 19. 長良山遺跡・長良山城跡 | 35. 角力取山古墳  | 51. こうもり塚古墳 |
| 4. 金井戸遺跡       | 20. 奎木宮後遺跡      | 36. 三須庵寺    | 52. 鶴中國分寺跡  |
| 5. 北溝手遺跡       | 21. 梢寺魔寺        | 37. 金井戸天神遺跡 | 53. 鶴中國分尼寺跡 |
| 6. 萩田古墳群       | 22. 伝編中國南跡      | 38. 金井戸新田遺跡 | 54. 宿山古墳    |
| 7. 金黒池東遺跡      | 23. 御所遺跡        | 39. 金井戸西崎遺跡 | 55. 鍋原遺跡    |
| 8. 宝福寺裏山遺跡     | 24. 奎木榮師遺跡      | 40. 井手村後遺跡  | 56. 前山遺跡    |
| 9. 奥ヶ谷窓跡       | 25. 高松田中遺跡      | 41. 美濃田遺跡   | 57. 山門田遺跡   |
| 10. 中山古墳群      | 26. 千引かなくる谷遺跡   | 42. 天満遺跡    | 58. 末の奥窓跡   |
| 11. 西山遺跡・西山古墳群 | 27. 隨庵古墳        | 43. 真聖遺跡    | 59. 鑄物師谷遺跡  |
| 12. 浅尾遺跡       | 28. 生石神社発生埴丘墓   | 44. 井手天神遺跡  | 60. 岩屋遺跡    |
| 13. 鬼ノ城        | 29. 高塚遺跡        | 45. 井手兒延遺跡  | 61. 滝山塚墓群   |
| 14. 新山魔寺       | 30. 小造山古墳       | 46. 三須田遺跡   | 62. 宮山天望古墳  |
| 15. 経山城跡       | 31. 造山古墳        | 47. 三須河原遺跡  | 63. 三笠山古墳   |
| 16. 久米大池1号墳    | 32. 柳山古墳        | 48. 三須中所遺跡  | 64. 三輪庵寺    |

第14図 周辺遺跡分布図（岡山県教育委員会作成）

つづく、縄文時代には、早期の段階にはいると平野の中央部に位置する真壁遺跡（43）や、長良地区の西に独立した丘陵地の西斜面などからわずかな遺物の出土が認められている。また遺構も確認できることから、平野内における居住地としての利用がこの時期にはじめられたものと考えられる。この状況は中期においても変化なく、断片的な資料が得られているにすぎない。しかし、後期になると、南溝手遺跡（1）、窪木遺跡（2）、真壁遺跡などから多くの遺構・遺物が確認されるようになり、その傾向は晩期においても同様である。検出された遺構には、土坑や土器だまり、火所などがあり、遺物も縄文土器のほかに、石器類が多く出土している。

### 弥生時代

高梁川の東流が蛇行することで形成された自然堤防上に、本格的な人々の生活が営まれるようになるのは、その後背湿地を基盤として、平野内に進出する必要のあった農業生産活動を主体とする段階である。

それは本格的な稲作社会となる弥生時代である。その痕跡は、真壁遺跡をはじめとした弥生時代前期段階から平野内のあちこちで確認されており、この時期より平野内の開拓が進められていったことがわかる。

弥生時代前期の遺跡は、縄文時代後期・晩期の遺跡数と比較してかなり増加したこともうかがえるが、同時に縄文時代後期・晩期の遺構・遺物も頻繁に検出されている。このことは、縄文時代後期・晩期の社会が狩猟採集経済の営みによる活動にとどまるものでないものとして評価されている。

事実、南溝手遺跡からは打製石鏡が多く出土し、また縄文土器の胎土中からイネのプラント・オバークルが検出され、稻穀の残された土器も出土している。弥生時代にはじまる本格的な稲作が、突如として平野内の各所に誕生したものではなく、それ以前の段階、導入期にかかる栽培の可能性を示唆しているものと推測される。

弥生時代の後期には、集団墓地の中に通常とは異なる墓が築かれはじめている。それが弥生墳丘墓の巨大化へと通ずる。総社平野においても、真壁遺跡の南に位置する丘陵地上に、宮山墳丘墓を中心とした弥生時代の共同墓地（61）がある。そして古墳時代に入るころ、墓地の中心であった墳丘墓が独立して個別に築かれ、前方後円墳などの古墳へと発展した。

### 古墳時代

古墳時代に入ると、宮山墳丘墓の立地する丘陵地では、さらに高い頂部に古墳が築かれた。全長約55mの宮山天望古墳（62）や全長約70mの三笠山古墳（63）などである。弥生時代末の墳丘墓と比べて、規模も大きくなつた前期古墳は、より広い範囲から視野に入ることとなり、また広い範囲を見下すこととなつた。このほかにも平野北側の丘陵地頂部に井山古墳が、高梁川の右岸の丘陵地頂部に秦大塹古墳などが築かれている。

中期には、全長約286mの作山古墳（34）や全長約114mの宿寺山古墳（54）などの巨大化した前方後円墳も築かれるようになる。造山古墳や作山古墳に象徴されるように、この巨大な前方後円墳に葬られた主体者は、吉備の大首長として君臨していたのであろう。また、小造山古墳（30）などの首長クラスの前方後円墳も築かれている。

そして後期になっても、大型の横穴式石室をもつたこうもり塚古墳（51）や江崎古墳（50）などが築かれる。この古墳に葬られた被葬者は、浪形石と呼ばれる井原市で産出する石灰岩を用いた家形石棺が用いられている。

古墳時代は、各地で大陸からのすぐれた技術を吸収し、定着させようとした時代でもある。

鍛冶道具が出土した隨庵古墳（27）をはじめとして、鉄が日常的に使われると同時に、鉄を生産する技術を手に入れている。6世紀後半から7世紀前半の製鉄遺跡である千引かなくろ谷遺跡（26）からは製鉄炉が数基みつかっている。また製鉄関連遺構である製炭窯もこの製鉄遺跡の周辺で数多く発見されているほか、平野部の北側丘陵地においても点在していることが確認されている。

さらに、製鉄遺跡で作られた鉄素材から製品へと加工する、鍛冶遺構も窪木薬師遺跡などでみつかっており、原料から製品にいたるまでのすべての技術を一貫して手中に収めていたことがわかる。

また、古墳時代以前より朝鮮半島で焼成された陶質土器が運び込まれている。この生産技術も古墳時代に導入された。窯を用いて焼いた須恵器である。この初期段階の須恵器を焼いた窯が総社平野の北側丘陵地でみつかっている。奥ヶ谷窯跡（9）である。

さらに、近年において前方後円墳などの所在や規模などについて再確認がなされている。このことは従来の首長系譜について、新たな資料を提示するものであり、今後の再考も必要となってきた。

ひとつは、総社平野の中央部北側の丘陵地頂部にある久米大池1号墳（16）である。

この古墳の存在は、平成14年4月に久米大池奥の山林火災によって付近一帯が焼けその全貌が明らかとなった以前より知られていた古墳である。平成7年度前後に分布調査を行い、全長約58mと推定した経緯がある。火災後にも分布調査を実施し、赤坂山古墳群、久米大池古墳群で新たな横穴式石室をもつ円墳などを多数発見することができた。

久米大池1号墳は、標高160mの非常に高い丘陵の頂部に築かれた前方後円墳である。南に前方部を向いている。その規模は、全長約55m、後円部の径約39m・同高さ約9m、前方部の長さ約26m、同幅約27m・同高さ約7mとなることが測量調査により判明している。出土した埴輪からは5世紀末の古墳と推測されている。この高梁川分流以北の地域には、全長約57mの井山古墳が知られていたほかに、隨庵古墳（約40mの帆立貝）や久米10号墳（約33mの前方後方墳）などがある。この1号墳の存在により、首長権の移動あるいは二つの小地域での首長墳になるものと考えられる。

もうひとつは、高梁川の右岸にある丘陵の頂部に位置している山根古墳である。

この古墳の存在も、昭和50年度版『岡山県遺跡地図（第三分冊）』、平成15年度版『改訂 岡山県遺跡地図（第5分冊）』に「山根古墳・前方後円墳といわれる」と記されているが、地図の古墳を示す記号は前方後円墳から円墳形に変わった。古墳の詳細が明らかでなかったためであり、総社市教育委員会でも古墳の存在を確認していたものの、その墳形にまで言及できる調査は実施しておらず、また、その観察ができるような自然環境でもなかったことによる。しかし、同じ丘陵上に所在する金子古墳群の立会調査時に、古墳の所在する頂部を中心に樹木伐採が行われていたため、分布調査を実施した。これにより、丘陵の尾根線で山根古墳のほかにも古墳が確認できた。この調査で山根古墳を1号墳とし、従来知られていた地点からは約500m南にある丘陵の頂部に立地していることも確認できた。古墳の位置的なものはともかくとして、悪条件の中で古墳の存在や墳形をとらえた先学の認識力に敬意を表したい。

山根1号墳は、標高189.3mの非常に高い丘陵の頂部に築かれた前方後円（方）墳と考えられる。丘陵の東裾に広がる秦の地はもとより、東は高梁川の左岸に位置する井尻野の地、南は久代・神在の地にまでその眺望はひらけている。規模等については測量調査を実施する予定であり、それにより明らかにされるであろうが、これまで新本川下流域における全長約60mの秦大塙古墳、全長約38mの秦茶

白山古墳を含めた首長系譜の再考が必要となった。

## 古代

古代の総社は、備中国の中心地として、いまだその所在地を確定することはできていないものの、国府が置かれていたことは間違いない。『和名抄』には「国府在賀夜郡」とあり、総社市金井戸付近に比定されている。この付近には、北国府、国府、御所などの地名が残されている。

しかも、御所遺跡（23）の調査では、方形の溝に囲まれた居館が発見され、平安時代末期の国衙に相当するとの見方もある。

延喜式によると備中国は上国である。古代末期の国衙領がその支配権をそのまま維持できていたかは不明であるが、その反面として莊園領主や在地武士団の台頭もあった。また、律令制度では国司が赴任した国内すべての神社に参拝をした。しかし、平安末期には、国府の近辺に国内の神社の祭神を合祀した神社である「総社」が設置されている。備中国の総社は、総社市総社にある総社宮で、御所遺跡からは西に2kmと距離がある。

総社平野ではこのほかにも、その南辺に位置する丘陵地に備中国分僧寺（52）・国分尼寺（53）が建立されている。その面前には古代の官道である山陽道が東西に通じていた。

さらに、平野の北部には、鬼ノ城（13）が築かれている。

## 中世

平安時代末期、豪族妹尾太郎兼康が「字六本柳」の井堰から現在地の「湛井」へ井堰を移転改修し、水路を開削整備したと伝えられている。これが現在の湛井十二箇郷用水である。総延長約18km、灌漑面積約5,000haにおよぶ。総社平野を流れる用水は地形に沿っている箇所が多い。おそらく高梁川分流の流路を大いに利用した結果であろう。

この水路の整備によって米・大豆・麦・胡麻・苧麻などをはじめとした農産物は、その生産量を飛躍的にのばしたものと推測される。おそらく生産地域内での消費にとどまらず、商品として流通し、他の地域へも運ばれたものであろう。生産地内には、高梁川の右岸に位置する上原郷に市庭があったように、備中国の総社が律令制の衰退と歩みを同じくせず門前町を形成したのも商業的な発展がその背景にあり、その繁栄を支える信仰的基盤としての役割を担っていたと考えられる。市庭などでは銭が用いられ、さらには割符による商品取引とされるように、高梁川の舟運や瀬戸内海運の発達にともなって商品の交易も広範囲にわたっていった。

また、中世は、武家政権による支配の時代でもある。戦いのために、城が築かれ、彼らの居住空間も堀で囲まれた防護施設と変化するなど、戦乱の世的一面をもっている。総社平野においても、南部の山頂には福山城跡が、北部の山頂には経山城跡（15）、東部の山頂には長良山城跡（19）などが築かれ、平野内には中世居館が築かれた。居館全体が発掘調査された例はないものの、方形に囲む溝が検出されている遺跡は多い。

真壁遺跡では幅約2mの溝で区画された東西85m、南北150mの中に掘立柱建物や井戸が、下軽部遺跡では幅2m、深さ1mの溝で区画された一辺約100mに復元される敷地内に土坑や鍛冶炉が見つかっている。

## 近世

幕藩体制にあった近世の総社は、岡山藩をはじめ、松山、浅尾、岡田などの各藩や旗本の所領、宝福寺領が入り組んだ複雑な統治環境にあった。

近世山陽道が古代山陽道とそれほど距離をたがえずに通じていたほかに、山陽道板倉宿から分岐して備中松山に至る松山往来と、その途中の美袋宿から南下して玉島へ至る玉島往来が主要な陸路となっている。

とくに松山往来は門前町となった総社宮を通過し、人々が集まると同時に、周辺地域の政治・経済・文化の中心地として展開していった。

高梁川は水路としての役割を果たし、高瀬舟が行き来して人や物を運んだ。陸路とちがい、大量の物資が運べ、高梁川の河口となる玉島や連島から弁才船によって大阪などへも輸送することができた。農産物のほかにも、五大壳葉の一つであった備中壳葉が生産され、西日本を中心に広がっていった。また、かつての製鉄の技術が受け継がれ、阿曾の鋳物として数々の製品が生産された。

#### 近・現代

江戸期、足守藩の領地であった長良村は、明治8年9月25日に東側の岡山市分となる村々と合併して生石村となった。しかし、明治14年9月2日に分村して長良村に戻る。

明治21年4月に公布された「市制町村制」による、明治の大合併では、西側に接する近隣の村々（窪木村・南溝手村・北溝手村・金井戸村）と合併し、服部村となった。明治22年6月1日のことである。

この服部村も昭和26年4月1日、神在村とともに総社町へ合併した。

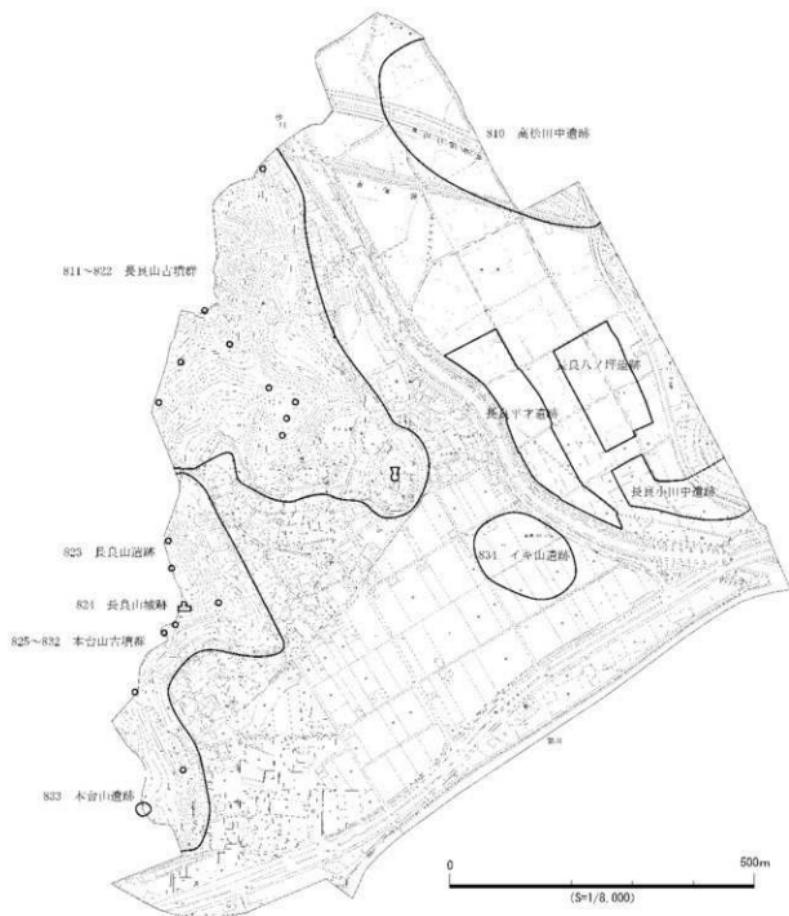
そして昭和の大合併により、昭和29年3月31日、総社市となり、さらに平成17年3月22日、新総社市が誕生した。

#### 主要参考文献

- 『総社市史』考古資料編 総社市 1987年
- 『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書』 86・100・107・120・124・156・162・198・203・209・214
- 岡山県教育委員会 1993・1995～1998・2001・2002・2006～2008年
- 『総社市埋蔵文化財調査報告』1～21 総社市教育委員会 1984～2010年
- 『総社市埋蔵文化財調査年報』1～19 総社市教育委員会 1991～2010年
- 『図説 岡山県の歴史』河出書房新社 1990年
- 『岡山県の考古学』吉川弘文館 1987年

#### 第4節 長良地区の遺跡

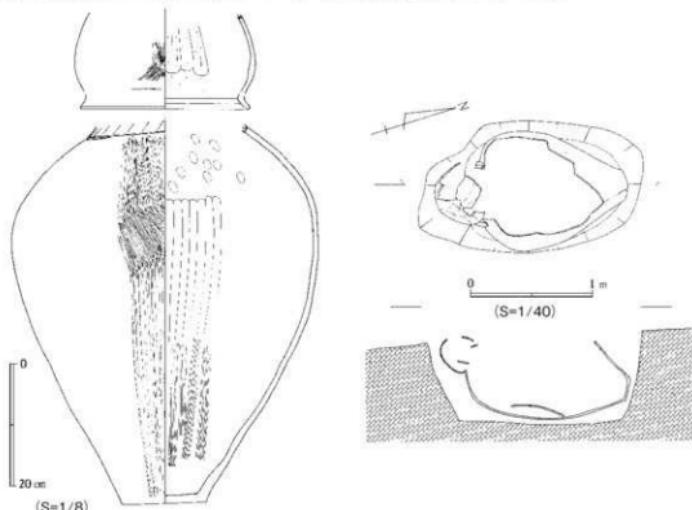
長良地区に分布している遺跡は、西にある長良丘陵上に、墳墓と散布地、古墳群、山城が所在している。平地部では、集落が2ヶ所で確認されている。



第15図 総社市長良の周知遺跡

### 長良山遺跡

北と南にそれぞれ頂をもつ長良丘陵地のうちの南側に位置し、北端の斜面から縄文土器・弥生土器などが採集されている。縄文土器は、押型文を器表面と内面の口縁部に施している深鉢で、縄文時代早期の土器である。弥生土器は、壺棺墓が1基検出されて、そこに口頭部を打ち欠いた壺形土器を身に、鉢形土器を蓋とした状態で出土している。弥生時代後期前半の土器である。



第16図 長良山遺跡出土の土器棺と出土遺物  
(『総社市史』考古資料編, p14)

### 本台山遺跡

須恵器・瓦が採集されているのみで、平安時代の散布地とされている。

### 本台山古墳群

8基の所在が確認されている。直径6m~12mの円墳と、一辺10m~18mの方墳と推定される。しかし、北側の尾根頂部に位置している7号墳は、帆立貝式となる可能性があり、東側に周溝がめぐり、墳丘上には竪穴式石室の一部が露出している。この石室の位置は西に片寄っていることから中心主体は別に存在するものともされている。

### 長良山古墳群

12基の所在が確認されている。長良山12号墳が独立した丘陵頂部に位置し、前方後円墳と考えられている。このほかは、直径8m~20mの円墳で、箱式石棺が露出しているものもある。

### 長良山城跡

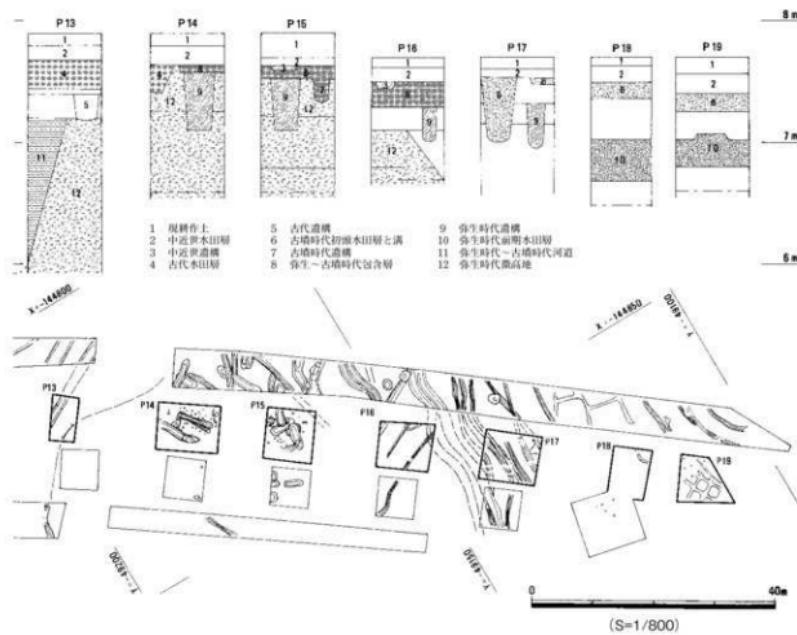
南側の丘陵地の最高所に所在している。山城は、八幡山古城とも呼ばれ、建武3年(1336年)に世瀬川左衛門入道祐隣が築いたと伝えられている。

しかし、その走行方位は社殿の軸線と合わないことから、城郭にともなうものと考えられている。石列の規模は、西辺で長さ13.5m、高さ3.5mとなる。社殿のある北の郭と南の郭とで城が構成されて

いると推測されるが、明治の陸軍大演習により観闘場所となつたため、大規模な整地が行われ、繩張りの状況は不明である。

#### 高松田中遺跡

砂川の左岸側に位置し、また遺跡の東は血吸川となる。遺跡の東西が川にはさまれた沖積低地といふ、長良小田中遺跡と同じような立地となっている。岡山自動車道の建設とともに、岡山県教育委員会による発掘調査が実施されている。その調査結果によると、弥生時代前期後葉～中期前葉の微高地が確認され、舟形土坑群を検出し、集落の縁辺部にあたることが判明した。また、微高地の西側には自然河道などの低位部が広がり、古代以降になってその埋没とともに耕作化を行つていった。弥生時代から古墳時代、古代、中世、近世とそれぞれの水田層が確認されている。



第17図 高松田中遺跡 東部の遺構配置図と土層柱状模式図  
（『岡山県埋蔵文化財調査報告』162,p59）

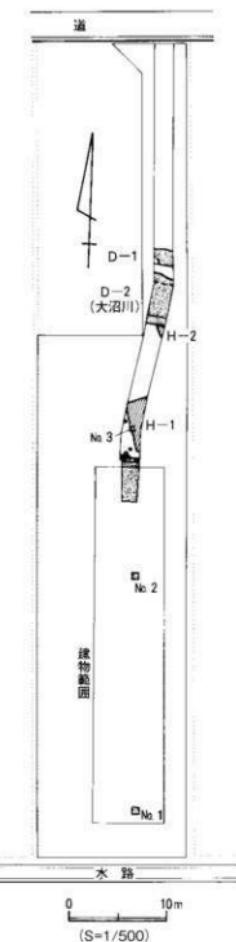
### イキ山遺跡

砂川の右岸側に位置し、南側の前川にはさまれた沖積低地に所在している。平成11年に、農業集落排水事業による事前調査で遺跡の所在が新たに判明し、引き続き発掘調査が実施された。

調査では、竪穴住居が2軒、溝2本が検出された。弥生時代の住居が1軒で円形である。古墳時代後期の住居が1軒で北辺にカマドをもつ。この調査によって、長良地区の平地部、それも低地部において、集落等が存在するという事実が判明した。今回の事業の事前審査にあたって、遺跡の存在を推定するための根拠となったものもある。

以上のような遺跡群が長良地区には所在しており、高松田中遺跡とイキ山遺跡では発掘調査も実施されている。このほかにも、長良山の東側裾部で弥生時代中期～後期の遺物包含層が市道改良工事中に発見され、大量の遺物が出土した。また、岡山インターの西を南北に通る市道高松田中西阿曽線の吉備線アンダーにともなって試掘調査も実施されている。その調査では、中世の遺物を含む灰色砂質土が床土の下で確認されたほかにはその下層においても遺跡の存在を示す状況ではなかった。

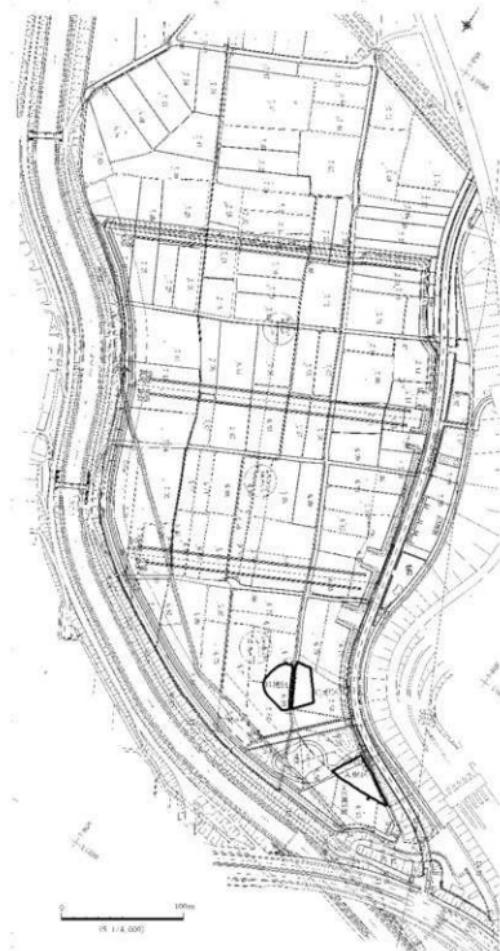
長良地区的平地部は、現在にみるような平坦な水田地帯ではなく、凹凸のある地形があり、丘陵地に築かれた古墳群などを築いた集落が小規模ながらも存在していることがわかった。



第18図 イキ山遺跡 遺構配置図  
〔総社市埋蔵文化財調査年報〕9, p133)

### 第3章 発掘調査の概要

長良小田中遺跡は、予定地の南東端に位置し、試掘調査の結果から周囲より20cmほど高くなっている範囲を中心に分布していることが判明した。



第19図 調査地位置図

この高台となっている範囲は、東西にのびた微高地であり、現況で幅80m～140m、長さは市境までが300m～350mとなっている。市境より東側は岡山総社インターチェンジであり、現在では旧の地形を知る由もないが、微高地は続いていたものと思われる。昭和49年度撮影の空中写真（第20図版）によれば、微高地の長さは約500mになる。

第10図の調査区配置図にみるように、微高地の南側は、地形に沿った用水路で区切られている。しかし、試掘調査トレーナー・T-5の状況から、A地区の南側にあたる微高地は洪水砂による新しい時期の堆積層によるもので、元々は低くなっていた地形である。この堆積層の状況から考えて、この用水路は砂川のかつての河道であったものと推測できる。この範囲の微高地を除く防災調整池の範囲がA地区に相当する。

また、微高地の西端においては施設用地として建物が設置される設計となっていた。この範囲を対象とした調査区がB地区である。しかし、工事工程の変更などから2つの地区に分け、B区・C区として調査を実施している。

このA地区とB・C区の間にある遺跡範囲については、緑地公園として保存が図られている。



第20図版 昭和49年度撮影の空中写真（「国土画像情報（カラー空中写真）国土交通省」）

## 第1節 A地区の調査記録

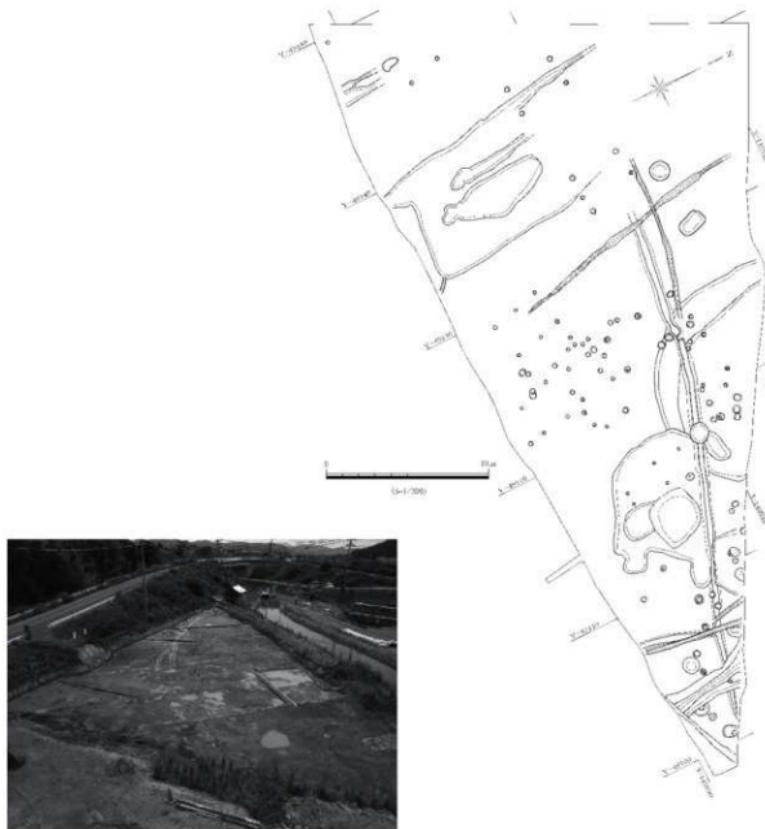
A地区は、防災調整池の置かれる範囲で、用地の南東端部にあたる。調査範囲は、遺跡の分布する範囲に該当する調整池の北側部分である。およそ調整池全体の1/3となる。

調査は、調整池がコンクリート壁によるものであることから、その工事ヤード部分を含めた範囲内の調査を行った。

調査面積は、718m<sup>2</sup>である。

### 1) A地区上層

上層で検出した遺構は、掘立柱建物、溝、水田畦畔、土坑、ピットである。



第21図版 A地区 上層の遺構全景（西から）

第22図 A地区 上層の遺構全体図

## 1 挖立柱建物（第26図）

調査区の中央部から西部にかけて、3基が確認された。



第23図版 挖立柱建物の検出状況(左奥がSB01,左手前がSB02,右がSB0と流路)

### SB01（第24・26・27図、第23・25図版）

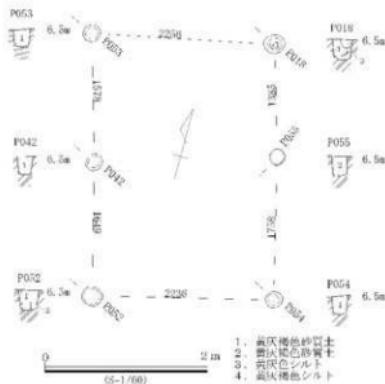
調査区の中央部南端に位置している。1間×2間の側柱建物である。南北に長く、東西向きの建物となる。主軸はN-15.1°-Wである。また、SB01との距離は3.2mを測る。

規模は、桁行で3.14m～3.23mの平均3.18m、梁行で2.24m～2.26mの平均2.25mを測る。床面積は7.16m<sup>2</sup>である。

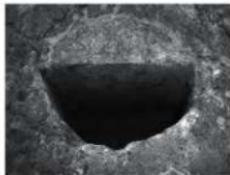
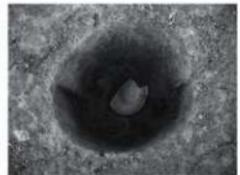
柱穴6本は、直径18cm～24cmの正円形で、深さ21cm～24cmの掘り込みと、ほぼ揃っている。穴の底面の高さは6.16m～6.31mとなる。

柱間寸法は、桁方向で1.39m～1.76m、梁方向で2.24m～2.26mを測る。やや寸法のばらつきは認められるが、柱筋はかなり通っている。

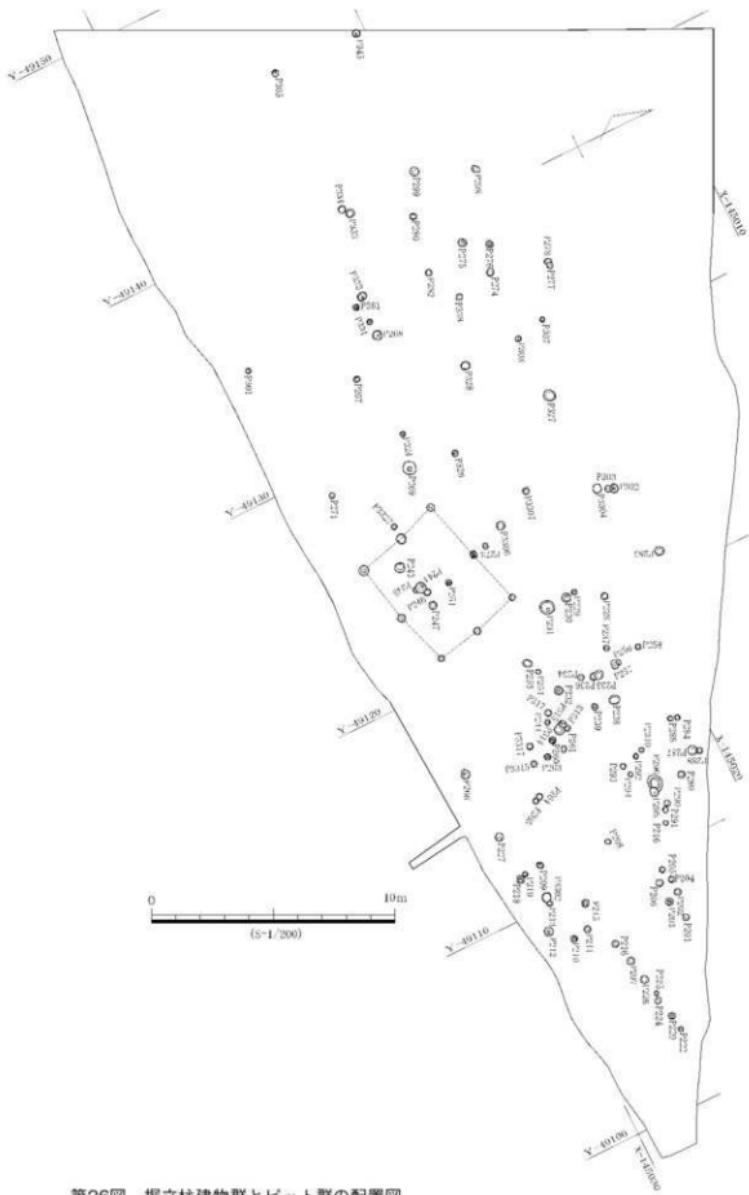
柱穴6本のうちの2本に柱痕跡が認められ、直径10cm以内の木柱が使用されている。



第24図 SB01 平面図・断面図



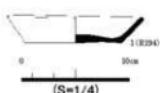
第25図版 P018の遺物出土状況(左・中)、P55の土層断面(右)



第26図 挖立柱建物群とピット群の配置図

遺物は、P018・052・054・055から出土しているが、図化できたのは1点のみである。それ以外は土師器、土師質土器の小片で、量も微量である。P52からは鉄滓が出土している。

1は、P018の中ほどから出土した。断面には柱痕跡が認められ、その建てられた木柱の真下に置かれた状況であった。また、北東隅の柱であることから、建物の地鎮に関わる行為で土器を埋め込んだものと考えられる。しかし、残部は2/3と完形にはならない。



番号	器種	口径	底径	器高	形態・手法の特徴	胎土	色調	残部
1	土師質/皿	12.0	8.8	2.5	底部ヘラ切り/板目痕?、内・外縁ヨコナデ	砂/多	淡黄灰色	2/3

第27図 P018(SB01)の出土遺物

### SB02 (第26・28・30図、第23・29図版)

調査区の中央部に位置している。

1間×2間の側柱建物である。南北に長く、東西向きの建物となる。主軸はN-8.2°-Wである。

規模は、桁行で4.77m～4.84mの平均4.81m、梁行で2.24m～2.30mの平均2.26mを測る。床面積は10.9m<sup>2</sup>である。

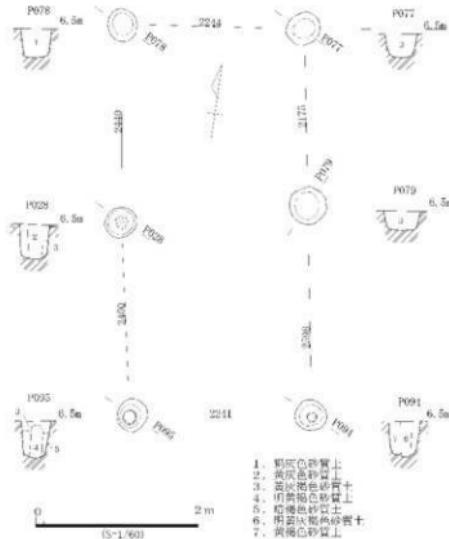
柱穴6本は、直径35cm～45cmの円形かわずかに楕円形で、深さ24cm～45cmの掘り込みである。穴の底の高さは5.09m～5.29mとなる。

また柱間寸法は、桁方向で2.18m～2.60m、梁方向で2.24mを測る。やや寸法のばらつきは認められるが、柱筋はかなり通っている。

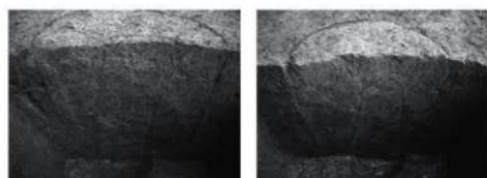
柱穴6本のうちの3本には柱痕跡が認められ、直径10cm～15cmの木柱が使用されている。

遺物は、P028・077～079・094・095・097の柱穴すべてから出土している。いずれも土師器、土師質土器の小片で量もわずかである。

2はP078から、3はP095から出土した。ほかに土師質土器の高台や肥厚した口縁端部、土師器の縫などがある。

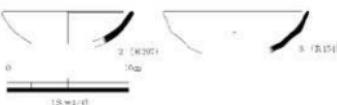


第28図 SB02 平面図・断面図



第29図版 断ち割り断面 P094(左)・P095(右)

土師質土器の法量の縮小化が認められることから、14世紀前半以降の建物と考えられる。



番号	器種	口径	底径	器高	形態・手法の特徴	胎土	色調	残部
2	土師質/楕	10.6			内・外面ヨコナデ	砂/微	白色	1/8
3	土師質/楕	10.6			内・外面ヨコナデ	砂/少	白色	1/10

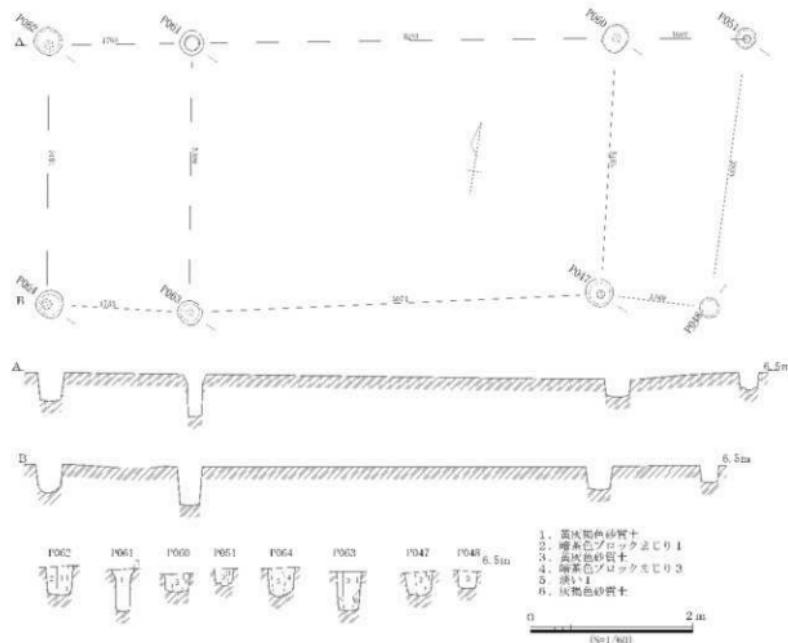
第30図 P078-095(SB02)の出土遺物

SB03 (第26・31・32図、第23・33図版)

調査区の西部に位置している。柱穴8本で構成される。1間×3間の建物というか構造物になるものと考えている。この周囲ではわずかにあと1本のピットが検出されたのみで、ほかの建物と混在するような状況にはなかった。

柱穴は、直径23cm～34cmのほぼ円形で、深さは21cm～51cmを測る。底の高さは5.92m～6.23mと差が大きい。

建物は、中央の柱間が非常に長く、両端はともに短く同じような柱間となっている。桁行は西から1.76m、5.15m、1.48mで、梁行は西から3.18m、3.31m、3.16m、3.33mの平均3.25mを測る。



第31図 SB03 平面図・断面図

遺物は、P060を除いたP047・048・051・061～064の柱穴から出土している。須恵器、土師器、土師質土器、鉄滓であり、そのほとんどが小片で、量もわずかである。P048・051・061～063からは鉄滓が出土し、ノロ状のものも認められ、近隣で製鉄あるいは大鍛冶の工房があったものと推測される。P061から出土した4・5のほかには、土師質土器で三角形状の低い高台となる楕や、磨滅した須恵器の杯蓋がある。

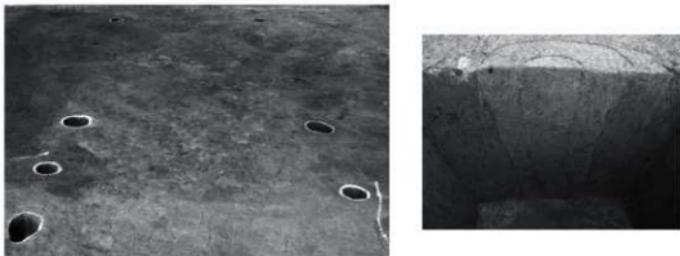
土師質土器の法量の縮小化から、14世紀前半以降の建物と考えられる。



番号	器種	口径	底径	器高	形態・手法の特徴	胎土	色調	残部
4	土師質/小皿	4.4	2.6	0.9	内・外縁ヨコナデ	砂/微	橙色	1/4
5	土師器/楕	23.0			内面ヨコハケ、外面押付/タテハケ/ナデ	砂/少	橙褐色	1/10

第32図 P061(SB03)の出土遺物

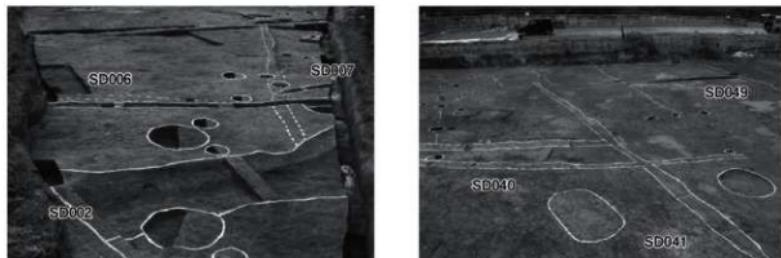
建物の用途については断定できないが、この建物にあわせているように浅く幅の広い窪みあるいは溝となるSD049が南北方向で確認されている。この造構と関連があるように思われる。SD049は幅約7mの自然流路と考えられ、それをまたぐように建物があることから、橋として設置された用途を推測してみたい。



第33図版 SB03の検出状況(東から), P063の断ち割り断面

## 2 溝(第35・38図)

溝は調査区の東端と、西端に位置している。幅の狭い通常の溝と、幅の広い溝あるいは窪みとなる、2種類が検出された。



第34図版 溝の検出状況(左手前がSD002, 左奥がSD006・007, 右がSD040・041・049)

## SD002 (第35図、第34・36図版)

調査区の東端で、N-9.2° -Wの方向に検出された。幅1.43m、深さ13.5cmを測る。溝底の高さは、南で6.5m、北で6.46mと北に向かって下降している。

遺物は土師器、土師質土器、須恵器、焼土塊、鐵滓が出土した。いずれも小片で、50点ほどである。土師質土器の高台や肥厚した口縁端部があるが、法量の計測はできない。椀の高台が三角形で低いことから、14世紀前半以降に埋没した溝となる。

## SD006 (第35図、第34・37図版)

SD002の西側に、N-8.1° -Eの方向で検出された。幅0.3m、深さ6cmを測る。溝底の高さは南で6.61m、北で6.57mと北に向かって下降している。

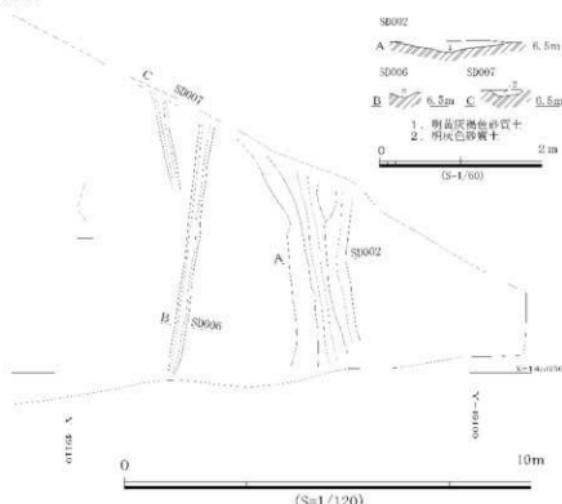
遺物は土師器、土師質土器、須恵器が少量出土した。土師質土器の椀が低い高台であることから、14世紀代に埋没した溝と考えられる。

## SD007 (第35図、第34図版)

SD006の西側に、N-11.0° -Wの方向で検出された。幅0.25m、深さ8cmを測る。溝底の高さは南で6.60m、北で6.66mと南に向かって下降している。

遺物は土師器、土師質土器、鐵滓が少量出土したが、時期の限定できるものはない。

埋土がSD006と同じであることから、同一時期の溝となろうか。



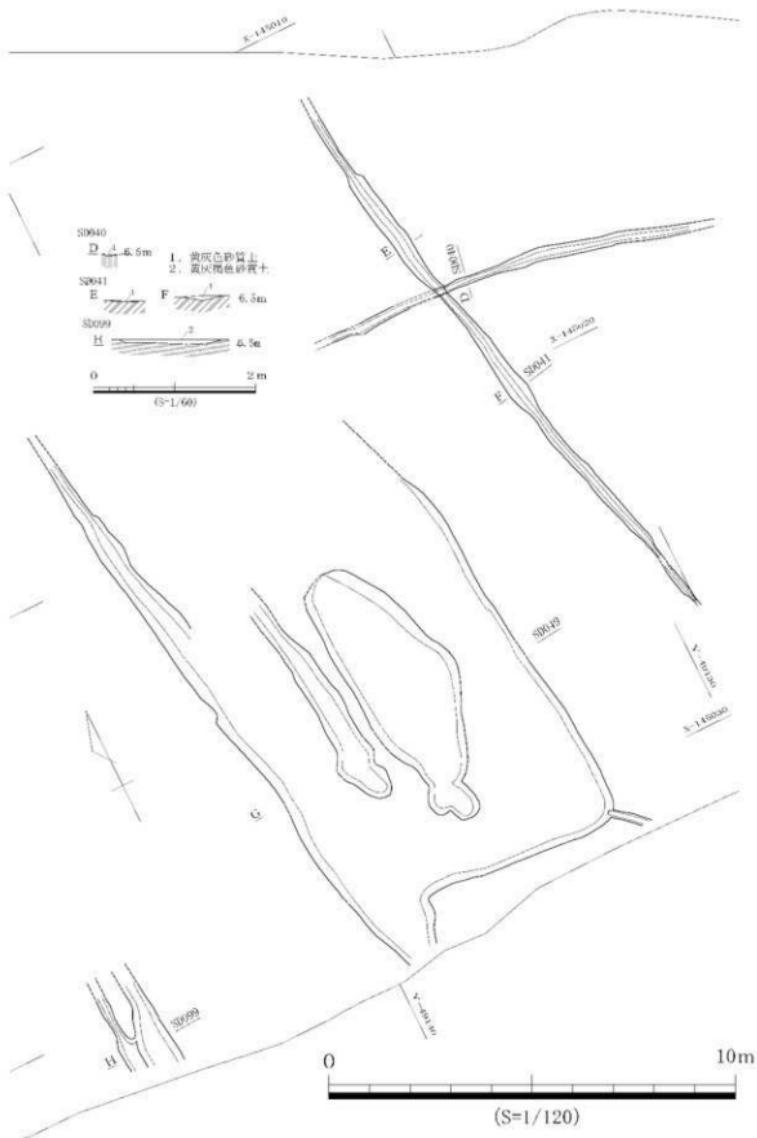
第35図 溝(東部) 平面図・断面図



第36図版 SD002 土層断面(南から)



第37図版 SD006 掘り上がり(南から)



第38図 溝(西部) 平面図・断面図



### SD099（第38図）

調査区の西端に、N-2.6°-Wで検出された。2条が並行し、また重複しており、SD049と同じような溝になると考えられる。断面Hの位置で幅1.28m、深さ4cmと6cmを測り、底面の深さは6.53mと6.51mとなる。

遺物は、出土していない。

埋土がSD049と同じであり、同時期の溝と推測される。

### 3 水田畦畔（第43・44図、第42図版）

調査区のやや北よりを東から西の方向に一直線で1条と、東端で南に折れる1条が検出された。西端の部分についてはバックホーによる掘り下げにより消滅しているが遺跡の立地する高まりの西の端まで存在していたものと思われる。

報告では、東西方向の畦畔の北側を田面1、東西方向の畦畔の南側で南北方向の畦畔の東側を田面2、同じく西側を田面3とする。

東西方向の畦畔は、上面幅25cm～43cm、下面幅50cm～85cm、高さ5cmを測る。

南北方向の畦畔は、上面幅30cm前後、下面幅50cm前後、高さ5cm以下である。

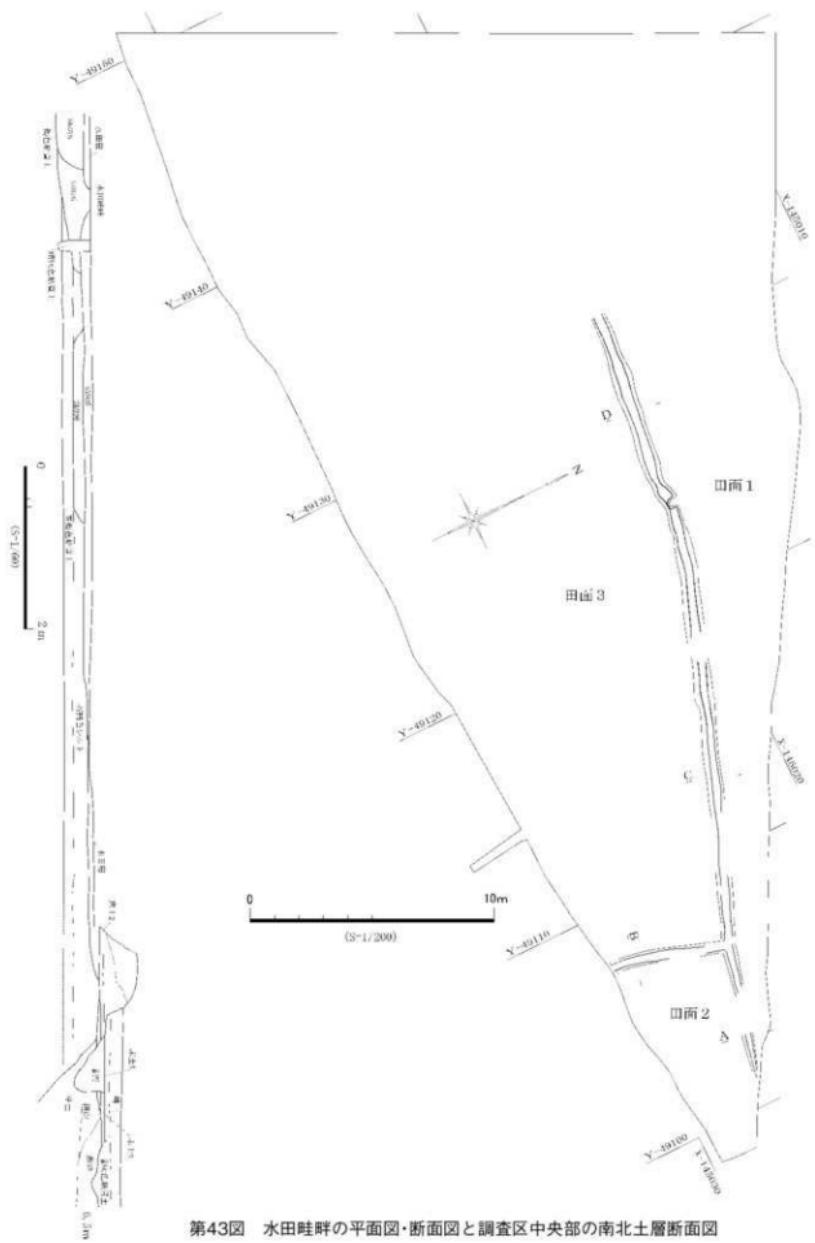
田面の高さは、田面1が東で6.66m、西で6.50m、田面2が6.60m、田面3が東で6.61m、西で6.52mとなる。田面1・3では10cm以上の高低差が認められ、同一面の水田としては成立しない。調査では遺構が密集していたことや掘り下げしそうな部分もあったことから畦畔を検出できなかったものと判断され、南北方向の畦畔が存在するものと考えられる。

調査区中央部の南北断面（第45図）でみると、畦畔は土を盛り上げて築いたものではなく、下層の土層からの削り出しによるものである。水田層の厚みは最大13cmを測るが、水田層の上層が旧床土となり、すでに削平を受けているものと判断される。また、調査区の南側にある現代の畦畔下にも同じ時期の畦畔が存在する。しかし、これより南について水田層は認められない。かわりに砂と粘土による斜面堆積となり、その上に旧床土が確認された。この斜面堆積は、調査区の東端でもその一部を面的に検出しているものである。

東西方向の畦畔と、現代畦畔の下にある畦畔との間隔は、約8.5mで復元される。

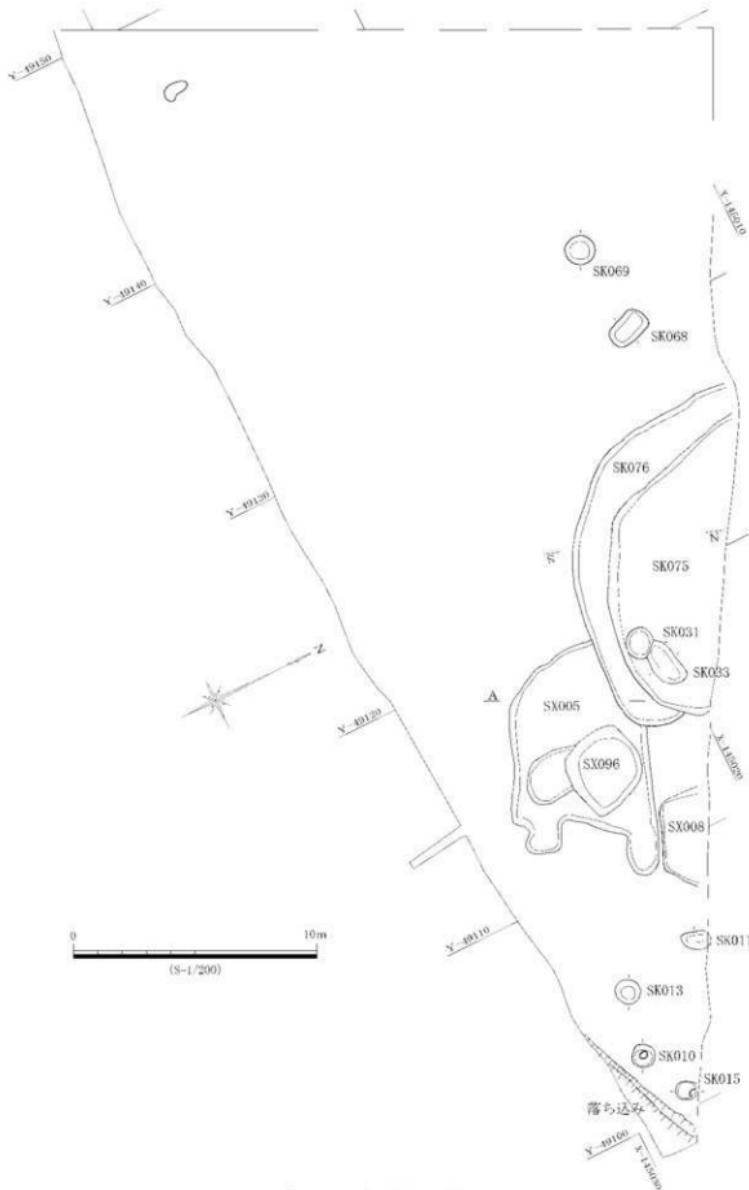


第42図版 水田畦畔 検出状況(左)・掘り上がり(右)



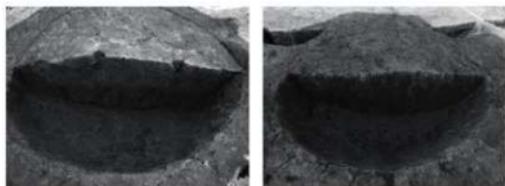
第43図 水田畦畔の平面図・断面図と調査区中央部の南北土層断面図





第46図 土坑群 配置図

遺物は、SK010から土師器、黒色土器、土師質土器が、SK013から須恵器、土師器、黒色土器がそれぞれ少量出土している。土師質土器の椀に三角形状の高台をもつものが認められるが、法量は求められなかった。



第47図版 土層断面 SK010(左)・SK013(右)

14世紀代に埋没した土坑群と  
考えられる。

#### SK031・033 (第46・48・50図、第49図版)

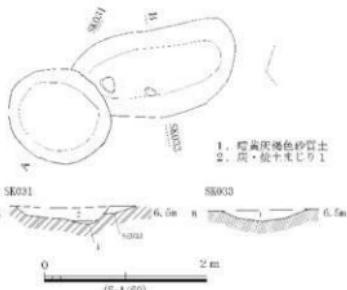
調査区中央の北よりに位置している。重複  
が認められ、SK031が新しい土坑である。

SK031は、1.1m～1.3mの円形に近い楕円  
形で、深さ16cmを測る。底面の高さは6.44m  
となる。

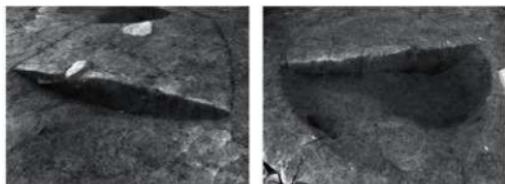
SK033は、1m×2mの長楕円形で、深さ  
15cmを測る。底面の高さは6.46mとなる。そ  
の形状から土壙墓の可能性がある。南端に  
15cmほどの自然石が置かれている。

遺物は、SK031から須恵器、瓦質土器、土  
師質土器が少量、SK033から土師  
質土器、須恵器が少量出土してい  
る。高台の低い土師質土器の椀か  
ら14世紀代に埋没した土坑群と  
考えられる。

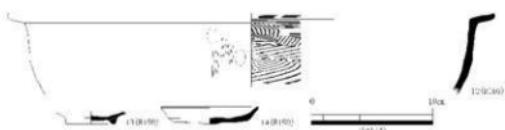
SK033は、SK068と形状が似て  
おり、土壤墓となる可能性が高い  
と判断される。



第48図 SK031・033 平面図・断面図



第49図版 土層断面 SK013(左)・SK033(右)



番号	器種	口径	底径	器高	形態・手法の特徴	胎土	色調	残部
12	土師質/鍋	39.8			内面ヨコハケ、外面押圧/タテハケ、	砂/多	褐灰色	1/12
13	土師質/椀			3.9	底部しづり痕、内面重ね焼き痕	砂/少	白色	完存
14	土師質/小皿	7.9	6.3	1.4	内・外面ヨコナデ	砂/多	橙色	1/3

第50図 SK033の出土遺物

SK068・069 (第46・51・52図、第53・54図版)

調査区の西部に位置している。

SK068は、1.08m～1.68mの隅丸長方形で、深さ30cmを測る。底面の高さは6.24mとなる。埋土は2層で、いずれも黄色ブロックがまじっており、短期間で埋め戻された可能性が高い。

遺物は土師器と土師質土器、鉄製品がわずかに出土した。土師器は甕の口縁部で、古墳時代前期と推測される。土師質土器は椀の口縁部であるが、法量は計測できない。鉄製品はほぼ完形の刀子(15)である。全長21cmを測るが鋒で覆われ、刃長14

～15cm、刀幅2.0cm、刃厚0.5cmほどと推測。

埋土の状況や刀子が出土していることから、土塚墓と判断した。

第52図 SK068の出土遺物



SK069は、1.2m×1.25mの円形で、深さ19cmを測る。底面の高さは6.33mである。

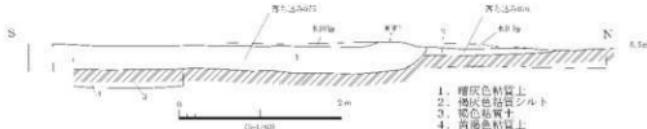
遺物は須恵器と土師器がわずかに出土した。須恵器は杯身であるが、立ち上がりを欠いており、法量の計測也不可能である。

土師器も同様に細片で、端部は残っていない。これらの遺物は下層遺構のものと推測され、混入遺物と判断される。

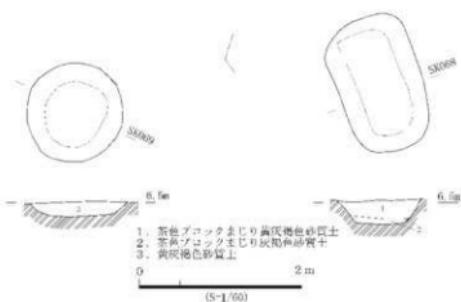
SK075・076 (第46・55・56図)

調査区中央の北端に位置している。幅13.54mを超える円形で、南北で6m分を検出した。重複しており、SK075が新しい。

SK076は約10cmの深さで、SK075は約34cmの深さである。底面の高さは6.42mと、6.20mとなる。



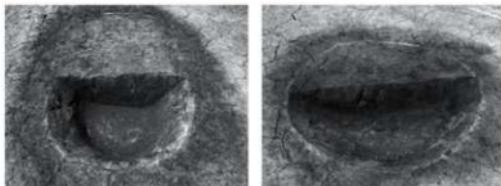
第55図 SK075・076 土層断面図



第51図 SK068・069 平面図・断面図



第53図版 SK068の出土遺物



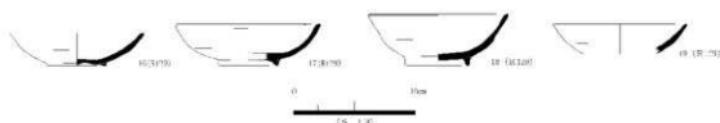
第54図版 土層断面 SK068(左)・SK069(右)

遺物は土師器、須恵器、土師質土器、黒色土器、瓦質土器、弥生土器、鉄滓、サヌカイトが200点ほど出土している。土師質土器の比率が高い。

図化できた4点(16~19)は口径11cm~12cm、器高3cm前後~4cmの土師質土器の椀である。ほかにも口径11.2cmに復元される土師質土器椀や、高台の高さが0.8cmに復元できる黒色土器椀、短脚の透かしのある須恵器、格子タタキの瓦質土器などがある。しかし、その多くは小片で、明らかに古い時期の土器も含まれている。

出土した土器で落ち込みの埋没時期が示されるものであるか不安が残る。しかし、土師質土器の高台には三角形状のものやあまり高くならないものばかりで、椀の復元口径も12cm台以下となる。

13世紀代以降に埋没した落ち込みと考えている。



番号	器種	口径	底径	器高	形態・手法の特徴	胎土	色調	残部
16	土師質/椀	11.0	4.9	2.7	内面ヨコナデ、外面押正/ヨコナデ	砂/微	白色	1/3
17	土師質/椀	11.8	4.6	3.4	内面ヨコナデ、外面押正/ヨコナデ	砂/微	淡白色	1/3
18	土師質/椀	11.4	5.0	4.0	内面ヨコナデ、外面押正/ヨコナデ	砂/少	淡褐色	1/8
19	土師質/椀	11.0			内面ヨコナデ、外面押正/ヨコナデ	砂/微	淡白色	1/3

第56図 SK075の出土遺物

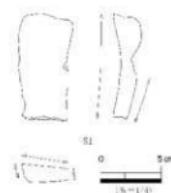
#### SX008 (第46・57図)

調査区東部の北端に位置している。東西方向の水田畦畔をわずかに切っている。

規模は、東西が約4m、南北で1.8m分を検出し、さらに調査区外へと続いている。深さは10cmほどとかなり浅い。底面の高さは6.57mとなる。

埋土は水田層とした黄褐色シルトと酷似し、それほどの時期差があるものとは思えない。また、この落ち込みを切り込んでいるピット群(P003・004)もあり、水田耕作にともなった土層堆積の違いと考えている。

遺物は須恵器、土師器、土師質土器、瓦質土器、砾石が少量出土した。土師質土器には椀や小皿、杯台があるが、法量は計測できない。砾石(S1)は、1面が欠損するほかは5面が残る。そのうちの3面には自然面が残る部分が認められるが、4面を磨り面として、とくに図化した正面は強く内湾するほどに使用している。



第57図 SX008  
土層断面図と出土遺物

#### SX005 (第46・58・59図)

調査区東部の中央に位置している。東西方向の水田畦畔をわずかに切っている。規模は、不整形であるが、東西で9m、南北で5.5mほどとなる。深さは6cmほどとかなり浅く、その埋土も水田層とし

た土層に酷似していることから水田層の堆積の違いとなる可能性が高い。底面の高さは6.55mである。

遺物は土師器、須

恵器、土師質土器、

瓦質土器、白磁、土

鍾、サスカイト片、

鉄滓が200点ほど出

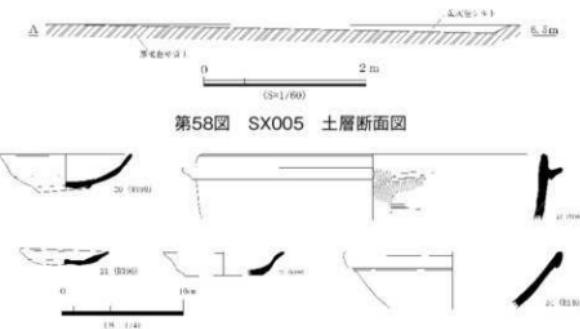
土した。土師質土器

の比率が高く、土師

器鍋の口縁部と格子

タタキの瓦質土器も

目立っている。



第58図 SX005 土層断面図

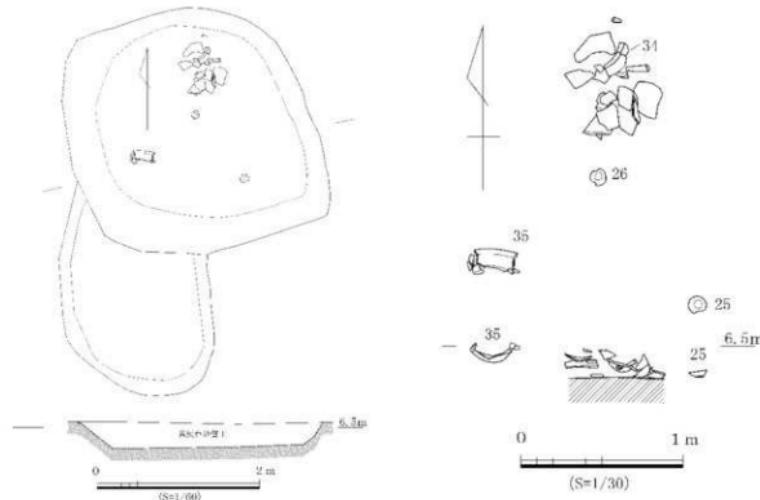
番号	器種	口径	底径	器高	形態・手法の特徴	胎土	色調	残部
20	土師質/碗	11.0	4.1	3.0	内面ヨコナデ、外面押圧/ヨコナデ	砂/少	淡橙色	1/2
21	土師質/小皿	7.0		1.3	底部ヘラ切り、内・外面ヨコナデ	砂/少	淡橙色	完形
22	土師質/小皿	10.0	6.4	1.9	内・外面ヨコナデ、外面に赤色顔料付着	砂/少	淡橙色	1/12
23	土師器/羽釜	28.0			内面ヨコハケ/ヨコナデ、外面ナデ	砂/少	淡褐色	1/10
24	白磁/碗	17.9			ナデ、施釉	砂/少	淡灰白色	1/6

第59図 SX005の出土遺物

#### SX096 (第46・60・62・63図、第61図版)

調査区の東部中央に位置している。SX005の底で検出され、SX005の一部とも考えられる。

規模は、一辺3mの隅丸方形に、1.8m×2mの楕円形が接続する形となる。別々の遺構とも考えられるが、調査時には同一遺構として掘り下げたため、重複関係にあったかは確認していない。深さは、



第60図 SX096 平面図・断面図・遺物出土状況図

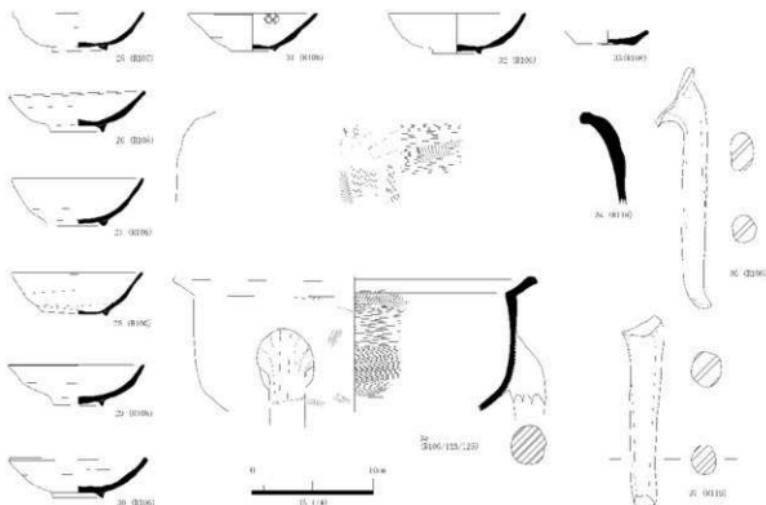
隅丸方形が30cm、楕円形が3cmを測る。底面の高さは隅丸方形が6.26m、楕円形が6.55mとなる。

遺物は三箇所でまとめて出土した。ほかにも出土位置は記録していないが、大きな破片が多くみられた。とくに土師質土器の椀が目立つものの、小皿の出土数は少ない。土師器では鍋や竈があり、脚も数点出土した。ほかに、須恵器や格子タタキの瓦質土器、玉縁口縁の白磁がある。

土師質土器の椀は、口径11cm前後、器高3~4cmで、低い高台が付けられている。外面下半が押圧によ



第61図 SX096 遺物出土状況(北から)



番号	器種	口径	底径	器高	形態・手法の特徴	胎土	色調	残部
25	土師質/楕	10.7	4.5	3.3	内面ヨコナデ、外面押圧/ヨコナデ	砂/少	淡褐色	3/4
26	土師質/楕	11.0	4.1	2.6	内面ヨコナデ、外面押圧/ヨコナデ	砂/微	淡白色	完形
27	土師質/楕	10.8	4.9	3.9	内・外ヨコナデ	砂/少	灰白色	完形
28	土師質/楕	10.7	5.4	3.4	底部押圧、内面ヨコナデ、外面押圧/ヨコナデ	砂/少	淡橙色	3/4
29	土師質/楕	11.2	3.9	3.3	内面ヨコナデ、外面押圧/ヨコナデ	砂/少	灰白色	1/3
30	土師質/楕	11.2	4.0	3.3	内面ヨコナデ、外面押圧/ヨコナデ	砂/少	淡白色	1/2
31	土師質/楕	10.6	3.6	3.2	内面ヨコナデ、外面押圧/ヨコナデ	砂/少	灰白色	1/3
32	土師質/楕	11.2	4.0	3.3	内面ヨコナデ、外面押圧/ヨコナデ	砂/少	淡白色	1/5
33	土師質/小皿	6.7	5.0	1.0	底部へら切り、内・外ナデ	砂/少	淡白色	完形
34	土師器/鍋	30.2			内面ヨコハケ、外面押圧/タテハケ、口縁ヨコナデ	砂/多	橙褐色	1/5
35	土師器/鍋	29.3			内面ハケ/ヨコナデ、外面押圧/タテハケ	砂/少	淡橙色	1/2
36	土師器/鍋			15.3	内面ヨコハケ、外面押圧	砂/少	褐灰色	完存
37	土師器/鍋				外面押圧	砂/少	褐灰色	上欠損
38	土師器/竈	39.4	38.6	30.9	内面ヨコハケ/ナデ、外面ケズリ/ナデ	砂/多	褐灰色	完存

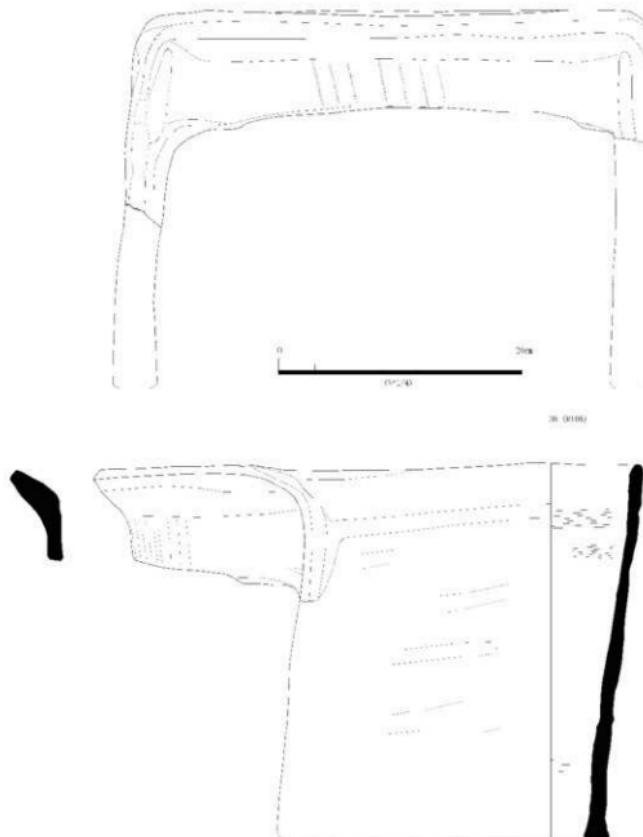
第62図 SX096の出土遺物 1

る整形されたままになるものが多く、楕円形にもひしゃげており、製品の簡略化が顕著に現れている。

土師器の鍋（35）椀は、三方に脚のつくもので、36・37のほかにも脚部が出土しているが接合できるものはなかった。

土師器の竈（38）は、上半分をほぼ残しているが、正面の焚口側の下半は欠損し、奥側でかろうじて底部が残っているにすぎない。外面は指ナデによる整形痕が顕著にみられる。使用によって内側の上部分が黒色に変色している。

土師質土器椀の口径が11cm前後であることから、13世紀後半以降に埋没したと考えられる。



第63図 SX096の出土遺物2

## 5. ピット (第26・68図)

ピットはSB01とSB02の周辺で数多く集中して検出されている。P025などのように、深さ40cmとしっかり掘り込まれ、かつ柱痕跡の認められるものが多くあった。しかし、建物として認識することはできなかった。また、ピットの一部については断ち割り断面の確認を行った。第65図のP071やP072などのように、遺構の半裁による断面確認と、断ち割りによる断面確認を行い、両者で遺構の深さにかなりの差があったものが認められた。

ピットは全部で69基である。直径20cm～30cm前後のものと、50cmを超えるものとの、大小があった。深さも、20cm以下の浅いものと、40cm前後の深いものとがある。埋土は、土層5とした黄灰褐色砂質土と土層9とした黄灰色砂質土が多い。このほかの埋土もその土層観察の条件的観点から、あまり差がないものと考えられる。

遺構との切り合い関係にあるピットとして、P003はSX008より新しく、P083はSX008より古い遺構である。P004はSX009より新しく、P080はSK076より新しい。またP026・027・029・030・032・034・058・059・081・082は水田層の上面で検出できることから、水田層より新しい遺構である。

さらに、下層の遺構面で検出したP207・214・223・233・240・249・250・252・255・259・262は、その埋土から上層の遺構と判断した。

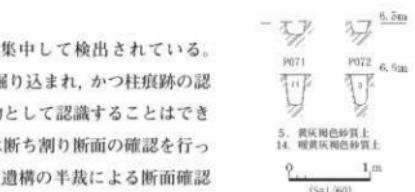
ピットからの出土遺物は微量かつ小片が多い。遺構の掘り込みによる下層遺構からの混入であり、遺構の時期を限定するものではない。しかし、中には、完形に近い遺物が出土しており、これについては地鎮行為にともなうものと考えられ、建物となる時期を表すものである。

### P021 (第65・67図、第66図版)

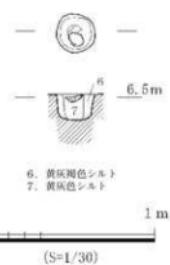
調査区の中央部南側、SB01とSB02の中間点で検出された。直径23cm×24cmの円形で、深さ16cmを測る。底面の高さは6.28mとなる。埋土は土層6が黄灰褐色シルト、土層7が黄灰色シルトである。柱痕跡は底径で8cm×9cmの木柱となる。

出土遺物は、土師器がわずかに検出された。

39は底面から10cm浮いた状態で出土しており、遺構検出面との差はほとんどない。残部が1/2となることから、削平による可能性が高いと考えられる。また、柱痕跡と重複していることから、掘形内に納めたものが転落したものであろうか。



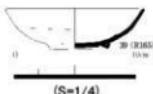
第64図 P071・072  
断面半裁(上)と断ち割り(下)



第65図 P021  
平面図・断面図

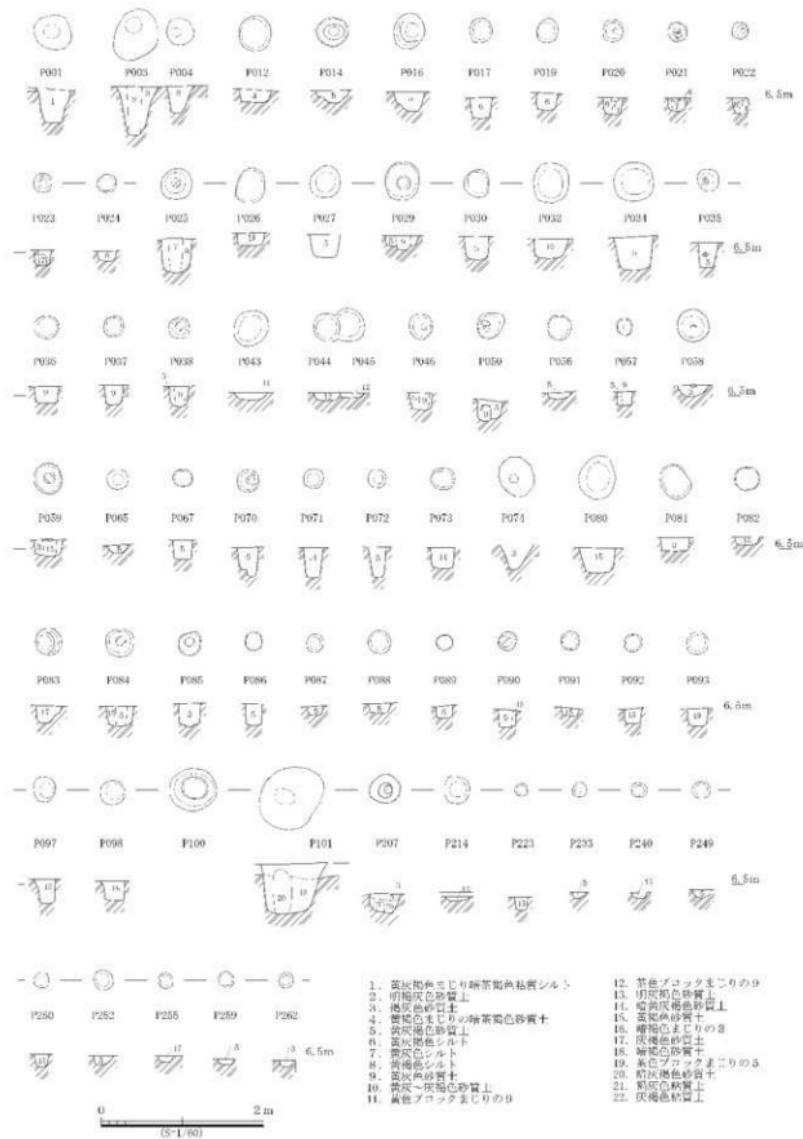


第66図版 P021 遺物出土状況



番号	器種	口径	底径	器高	形態・手法の特徴	胎土	色調	残部
39	土師器/楕	11.2	4.7	3.3	内・外ヨコナデ	砂/少	暗褐色	1/2

第67図 P021の出土遺物

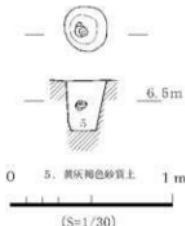


第68図 ピット群 平面図・断面図

P035 (第69・71図、第70図版)

調査区の中央部北側、SB02の北東で検出された。直径26cm×27cmの円形で、深さ31cmを測る。底面の高さは6.22mとなる。埋土は黄灰褐色砂質土である。

出土遺物は、小皿が3枚、重なって検出された。出土位置は、深さのほぼ中間で、底面からは12cmを測る。1と2が水平で内面を上に向け、3が内面を柱穴の中心に向けて2に添わせた状況にあつた。



第69図 P035  
平面図・断面図



第70図版 P035  
遺物出土状況



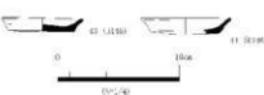
番号	器種	口径	底径	器高	形態・手法の特徴	胎土	色調	残済
40	土師器/小皿	6.8		1.2	底部押正、内・外面ヨコナデ	砂/少	橙色	完形
41	土師器/小皿	8.9		2.2	底部押正、内・外面ヨコナデ	砂/少	橙色	完形
42	土師器/小皿	6.9		1.3	底部押正/板目痕?、内・外面ヨコナデ	砂/少	橙色	完形

第71図 P035の出土遺物

P034 (第72図)

調査区の中央部北端で検出された。直径47cm×49cmの円形で、深さ41cmを測る。底面の高さは6.19mとなる。埋土は黄灰褐色砂質土である。

出土遺物は、土師器と瓦質土器がわずかに検出された。半裁による断面では検出されなかったので位置を特定できていないが、完形の土師質土器小皿が1枚と、残部1/2の小皿が1枚、ほかに竈の開口部片が出土している。

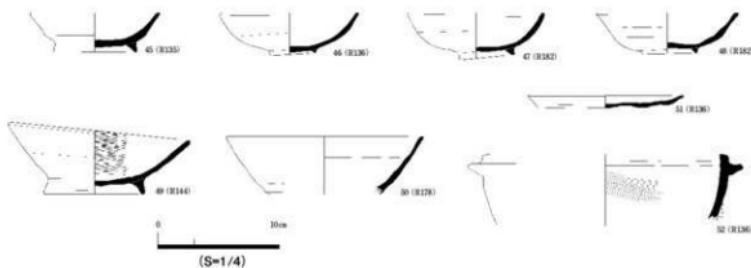


番号	器種	口径	底径	器高	形態・手法の特徴	胎土	色調	残済
43	土師質/小皿	6.6	5.5	1.1	底部板目、内・外面ヨコナデ	砂/少	明白色	完形
44	土師質/小皿	7.2	5.4	1.2	底部ヘラ切り?、内・外面ヨコナデ	砂/少	淡橙色	1/2

第72図 P034の出土遺物

## 6. そのほか（第73図）

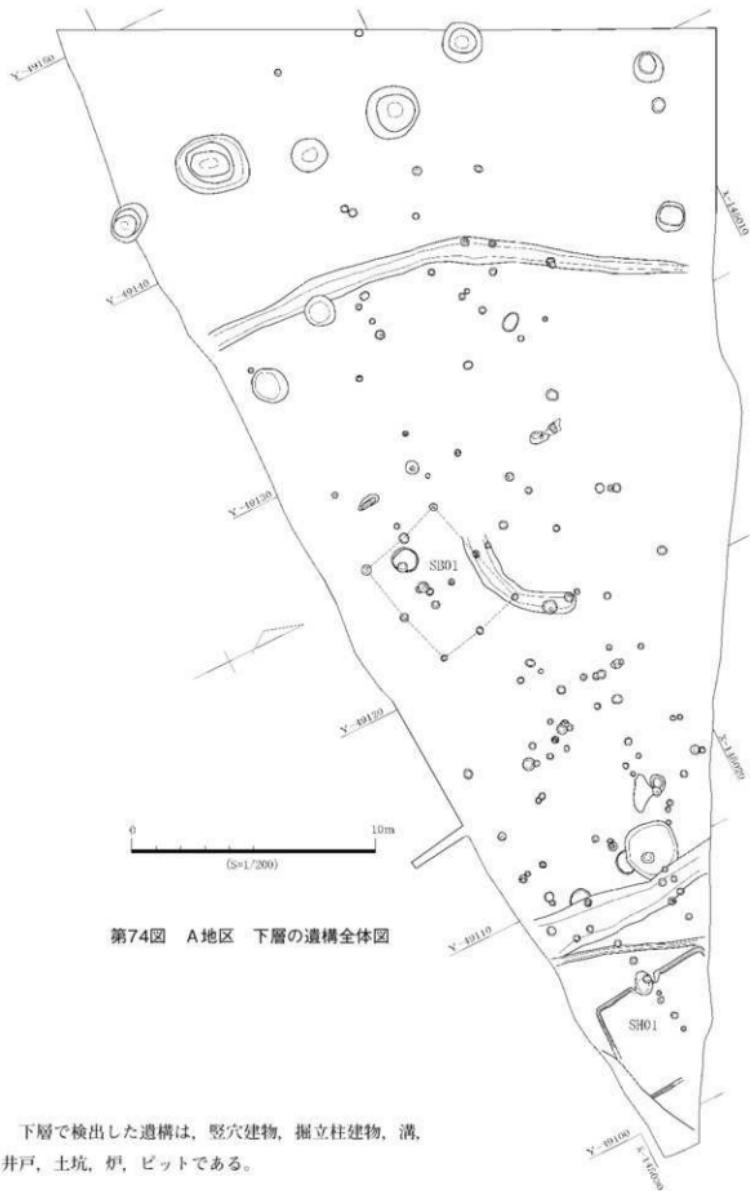
遺構にともなうものではないが、遺構の検出中や側溝の掘削、サブレンチの掘削により小片以上 の土器も出土している。この出土遺物には下層の包含層からの出土も含まれている。45～48の口径が 11cm前後となる土師質土器の楕が上層にともなうもので、47は二次焼成を受けて赤く変色している。また、49の黒色土器は下層にともなうものと推測される。



番号	器種	口径	底径	器高	形態・手法の特徴	胎土	色調	残部
45	土師質/楕	10.6	6.8	3.2	内・外面ヨコナデ	砂/少	淡褐色	1/2
46	土師質/楕	11.2	3.7	3.4	内面ヨコナデ、外面押正/ヨコナデ	砂/少	灰白色	1/2
47	土師質/楕	10.9	6.4	3.7	内・外面ヨコナデ	砂/多	赤褐色	1/2
48	土師質/楕	11.6	4.4	3.3	内面ヨコナデ、外面押正/ヨコナデ	砂/多	淡白色	1/6
49	黒色土器/楕	16.0	8.1	4.5	内面ミガキ、外面ヨコナデ/ナデ	砂/少	褐色	1/2
50	須恵器/杯	16.0			内・外面ヨコナデ	砂/多	暗灰色	1/6
51	土師器/皿	12.8	11.1	1.0	底部押正、内・外面ヨコナデ/ナデ	砂/多	赤褐色	1/2
52	土師器/羽釜	18.8			内面ヨコハケ、外面ヨコナデ/ナデ	砂/少	淡褐色	1/8

第73図 遺構にともなわない遺物

2) A地区下層



## 1 壇穴住居（第75図、第76図版）

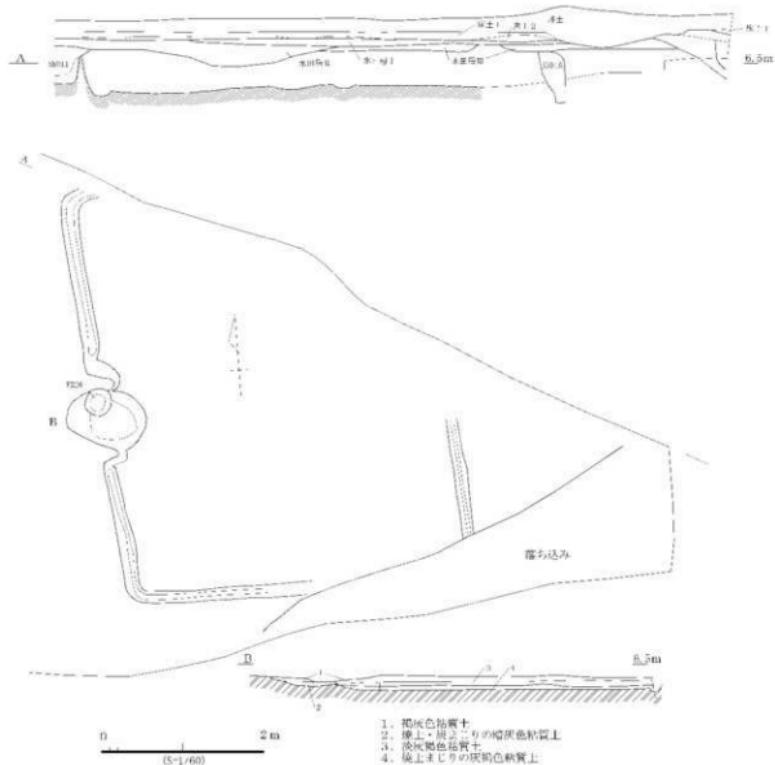
調査区の東端で1基を検出したが、その遺構の残りはあまり良好ではなかった。

### SH01（第75図、第76図版）

平面が長方形を呈する建物と想定される。しかし、調査区の幅が狭くなっているため、北辺は調査区外に、南辺と東辺もその一部が調査できただけでない。カマドをもつ住居であり、西辺のほぼ中央に築かれている。

規模は、東西方向で4.09mを測る。南北方向は、南西隅を検出できたが、北西隅は調査区の側溝により消滅し、平面プランでは検出できなかった。しかし、調査区の北壁となる断面Aに残る壁体溝から復元すると、4.90mとなる。床面積は約19m<sup>2</sup>で復元される。床面の高さは、断面図から張り出し痕跡が推測され、最終床面で6.28m～6.30mである。

住居の掘り込みは、断面Aから床面より50cmとかなり高い位置にあった。しかし、遺構面と住居の

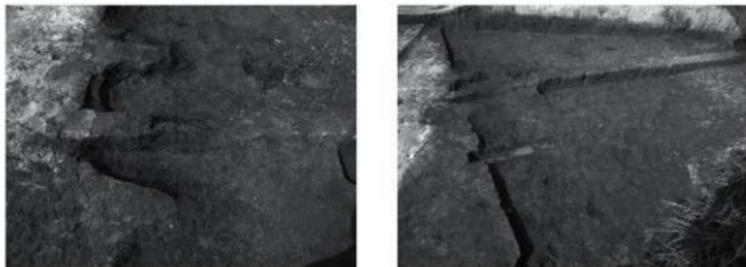


第75図 SH01 平面図・断面図

埋土とほんど差がなく、カマドの存在が確認できるまで掘り下げをおこなって検出できたものである。同様に、主柱も検出することができなかった。

カマドはわずかに南へ寄っているものの、西辺のほぼ中央に築かれていた。P226により一部破壊されているが、内法99cm×69cm、高さ10cmを残している。カマド内とその周辺には焼土と炭の散布がみられたが、被熱面はほとんど検出できなかった。カマドの底面は土層5の黄褐色砂質土である。土層4は焼土まじりで、その高さがカマドの底面よりも低くなっている。おそらく、カマドに先行する住居の堆積と考えられ、土層3がカマドを築いた時の貼り床になるものと推測した。

遺物は出土していない。また、住居に切り込んでいるP226などのピット群からも時期の限定できる遺物はなく、住居の時期は不明である。

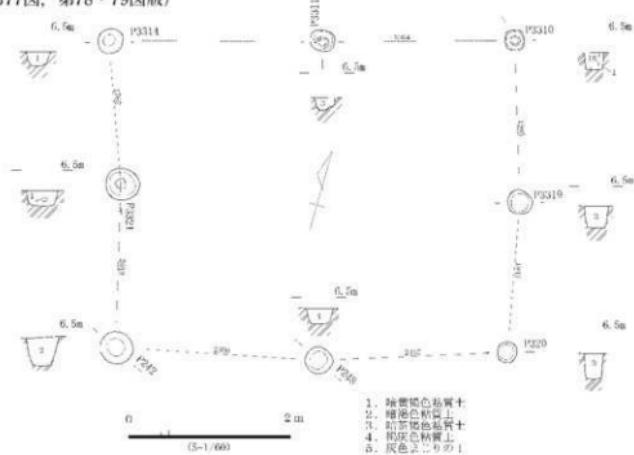


第76図版 SH01 検出状況

## 2 掘立柱建物（第74図）

調査区の中央部、南側で1基が確認された。

### SB01（第77図、第78・79図版）



第77図 SB01 平面図・断面図

2間×2間の側柱建物である。南北に長く、東西向きの建物となる。主軸はN-15.1°-Wである。また、SB01との距離は15.5mを測る。

規模は、桁行で4.82m～5.00mの平均4.91m、梁行で3.77m～3.83mの平均3.80mを測る。床面積は18.93m<sup>2</sup>である。

柱穴6本は、直径23cm～41cmのほぼ正円形で、深さは15cm～31cmの掘り込みである。穴の底の高さは5.92m～6.18mとなる。

柱間寸法は、桁方向で2.339m～2.50m、梁方向で1.76m～2.02mを測る。

柱穴6本のうちの1本に柱痕跡が認められ、直径8.5cmの木柱が使用されている。またP3321では底面から5cm浮いた状態で12cmほどの平石が出土している。礎板の可能性がある。

遺物は、P242・248・320・3310・3311・3321から、わずかな土師器が出土したほかに、P3310・3311には1cm～3cmほどの鉄滓が20点ほど出土している。



第78図版 SB01 掘り上がり(西から)



第79図版 P3321 土層断面

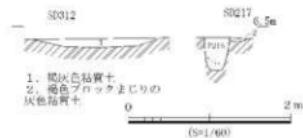
### 3 溝(第83図)

調査区の東部で2条、中央部で1条、西部で1条の計4条が検出された。

#### SD217・312(第80・83図)

調査区の東部に位置している。SD217がN-12.0°-E, SD312がN-1.1°-Wとなる。

SD217の規模は、長さ6.6m以上、幅23.5cm～29.6cm、深さ6cm～8cmを測る。溝底の高さは6.28m～6.32mで、北に下がっている。



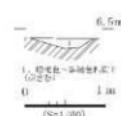
第80図 SD217・312 平面図・断面図

SD312は、長さ7.9m以上、幅1.13m～1.78m、深さ10cm～13cmを測る。溝底の高さは南端で6.25m、北端で6.24mとなる。おそらくほかの溝と同様、北に下がった溝であろう。

遺物は、SD217から土師器、土師質土器が少量、SD312から土師器、黒色土器、須恵器、手づくね土器、鉄滓が100点ほど、それぞれ出土したが、いずれも小片であった。

#### SD311(第81・83図、第82図版)

調査区の中央部に位置している。北から西に向かって湾曲しており、西に向かったところで消滅している。北側も構造面の高さからみて、西側と同じように終了するものと考えられる。溝よりも土坑と考えてもよいものである。

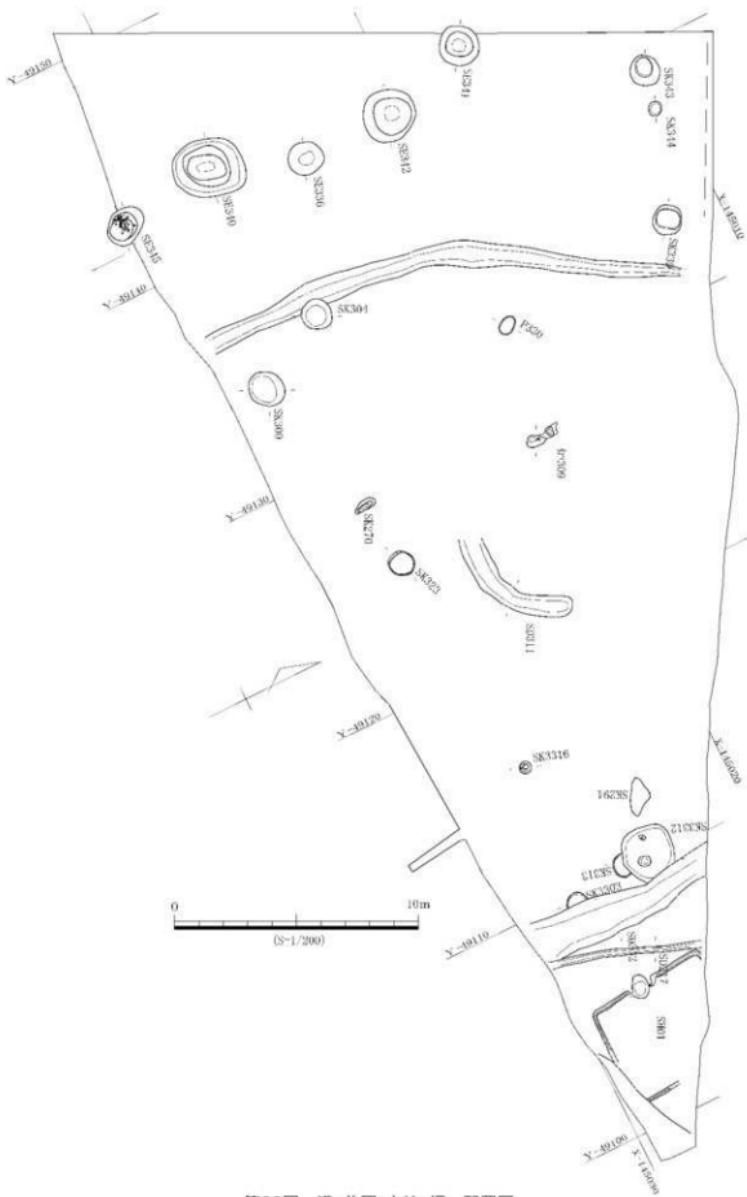


第81図

その規模は、長さ5.45m以上、幅0.8m、深さ13cmを測る。溝底の高さは6.26mである。

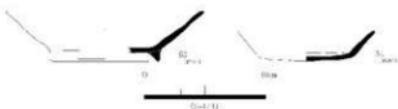


第82図版 SD311 土層断面



第83図 溝・井戸・土坑・炉 配置図

遺物は、土師器、黒色土器、須恵器が100点ほど出土した。図化したほかに土師器の鍋や高杯があるが、法量計測のきない小片であった。



第84図 SD311の出土遺物

#### SD335 (第83・85図)

調査区の西部に位置している。直線的な溝にはならないが、N-5.5°-Eの方に向に流れる溝である。

その規模は、長さ22.76m以上、幅0.83m~1.10m、深さ5cm~12cmを測る。溝底の高さは南端で6.19m、北端で6.18mである。

遺物は、土師器と鉄滓が少量出土しているが、「く」の字状となる鍋の口縁のほかは端面の残らない小片であった。



第85図

SD335 断面図

#### 4 井戸 (第83図)

5基を検出した。いずれも調査区の西端に位置する素掘り井戸で、その配列は等間隔とまでは言えないものの、ほぼ一列に並んで検出されている。N-1.6°-Wであり、ほぼ南北となる。

#### SE336 (第83・87・88図、第86図版)

井戸群のうち、真ん中に位置する。北に1.9mでSE342、南に1.8mでSE340がある。

規模は1.35m×1.48mのほぼ円形の平面形で、深さは90cmを測る。井戸底の高さは5.36mである。

埋土は4層に分層される。

最下層の土層1と土層3・4の間には0.5cmの厚さの炭層が均一に堆積していた。

遺物は、土師器が少量出土したのみである。図化したほかはいすれも小片の甕などであった。

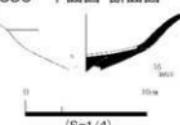
55には脚部と杯部の接合のためにハケを施した痕跡が残る。



第86図版  
SE336 土層堆積状況



第87図  
SE336 平面図・断面図



第88図 SE336の出土遺物

番号	器種	口径	底径	器高	形態・手法の特徴	胎土	色調	残部
55	土師器/高杯	15.8			円板充填、外面ハケ/ヨコナデ、内面ヨコナデ	砂/多	赤橙色	1/3

SE340 (第83・90~93図, 第89図版)

井戸群のうち、南から2番目に位置する。北に1.8mでSE336、南に1.9mでSE345がある。

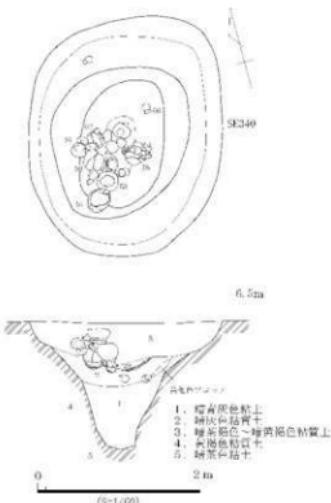
規模は2.38m×2.91mの楕円形で、途中に2度の段掘りが認められる。掘り下げは、1.55mを測り、底の深さは4.85mとなる。

埋土は3層に分層される。

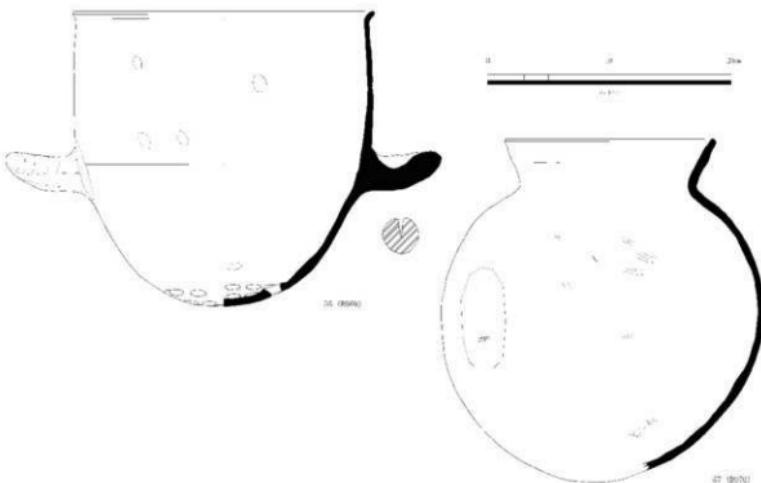
遺物は、土層2の中間層と土層3の上層から完形を含む土器群が出土している。一括して投棄された状態であった。土師器のみで須恵器は出土していない。



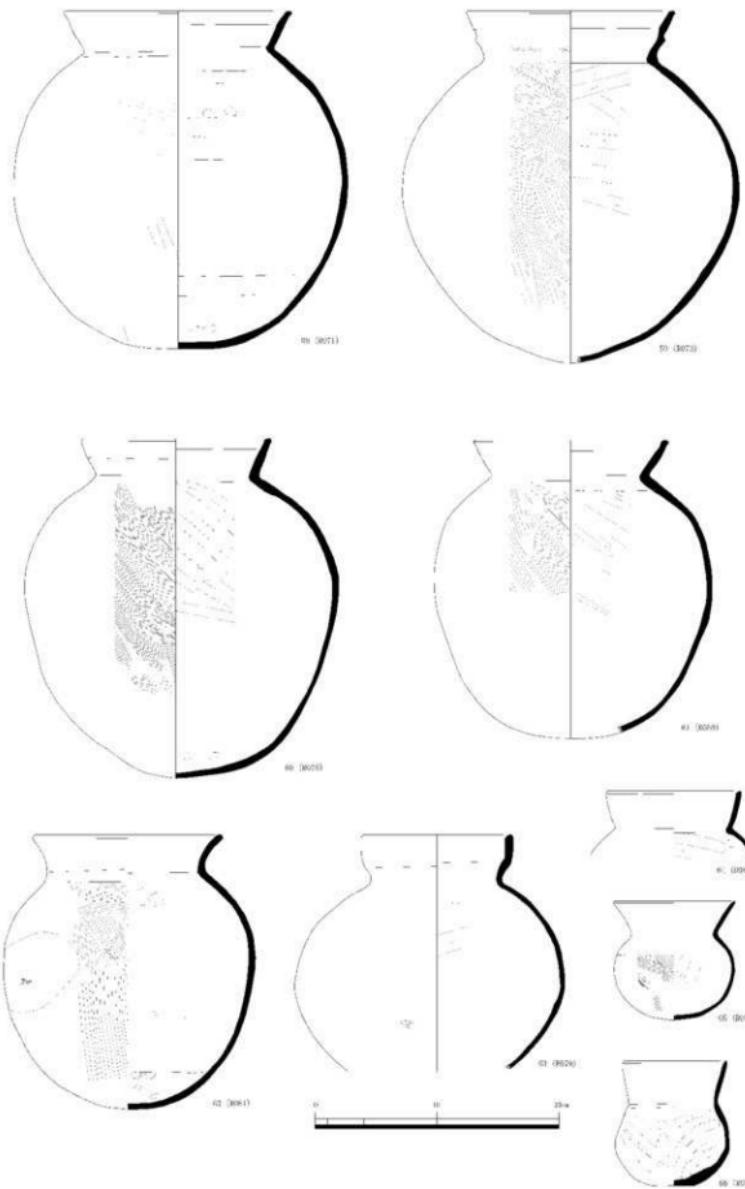
第89図版  
SE340 土層断面と遺物出土状況



第90図 SE340 平面図・断面図



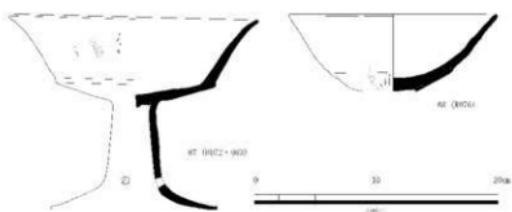
第91図 SE340の出土遺物 1



第92図 SE340の出土遺物 2

甕には底部をわずかに残すものと丸底のものとがあり、口縁も外反するものと肥厚するものとがみられた。

57には内面に同心円文のタキが、58には内面に粘土組を接合した痕跡が顯著に残る。



番号	器種	口径	底径	器高	形態・手法の特徴	胎土	色調	残部
56	土師器/甕	24.7		24.1	底部に18穴、内・外面ヨコナデ	砂/少	淡褐色	完存
57	土師器/甕	17.0	26.5	28.0	内面タキ/ナデ、外面ヨコナデ/ハケ	砂/少	淡褐色	4/5
58	土師器/甕	18.3	27.4	27.7	内面ナデ、外面ハケ	砂/少	淡灰褐色	完形
59	土師器/甕	16.8	27.6	28.8	内面ナデ/ケズリ、外面ハケ	砂/多	淡橙色	3/4
60	土師器/甕	15.3	28.7	27.8	内面ナデ/指ナデ、外面ハケ	砂/少	淡褐色	4/5
61	土師器/甕	15.4	22.8	24.5	内面ナデ/ケズリ、外面ハケ	砂/少	橙褐色	完存
62	土師器/甕	15.3	20.6	22.5	内面押E/ケズリ/ナデ、外面ハケ	砂/少	淡黄灰色	2/3
63	土師器/甕	12.5	22.2		内面ヨコナデ/外面ハケ/ナデ	砂/少	褐色	3/4
64	土師器/甕	10.9			内面ヨコナデ/ケズリ、外面ヨコナデ	砂/少	灰褐色	1/3
65	土師器/甕	10.0		9.7	内面ヨコナデ/ケズリ/ナデ、外面ヨコナデ/ハケ	砂/少	淡黄灰色	2/3
66	土師器/甕	8.5		10.2	内・外面ヨコナデ/指ナデ	砂/少	赤橙色	完形
67	土師器/高杯	20.5	13.5	15.8	内面ヨコナデ/ナデ、外面ヨコナデ/ハケ/ナデ	砂/多	赤橙色	完形
68	土師器/高杯	17.0			内面ヨコナデ/ナデ、外面ヨコナデ、ハケ	砂/少	淡黄灰色	3/4

第93図 SE340の出土遺物3

#### SE341 (第83・95・96図、第94図版)

井戸群のうち、一番北に位置する。南に2.1mでSE342がある。おそらく調査区外となる北へも井戸は続くものと思われる。

規模は1.52m×1.60mの正円形で、途中に1段の変換点がある。掘り下げは、深さ0.8mと浅い。井戸底の高さは5.23mとなる。

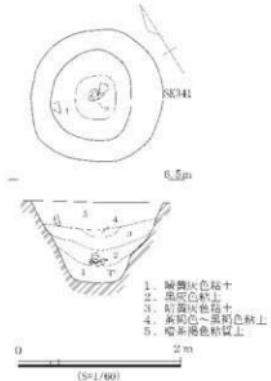
埋土は5層に分層される。土層1と2、土層2と3の境目には0.5cm厚の炭層が確認された。

遺物は、最上層の土層5から69の高杯が、中間層の土層2から70の完形を含む土師器が100点ほど出土している。

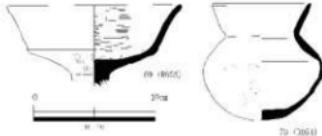
しかし、図化した以外はいずれも小片である。



第94図版  
SE341 土層断面と遺物出土状況



第95図  
SE341 平面図・断面図



番号	器種	口径	底径	器高	形態・手法の特徴	胎土	色調	残部
69	土師器/高杯	14.3			内面ハケ/ヨコナデ、外面ヨコナデ/ハケ	砂/少	淡褐色	完存
70	土師器/小壺	8.1		9.6	内・外面押付/ヨコナデ	砂/多	淡褐色	完形

第96図 SE341の出土遺物

#### SE342 (第83・98~100図、第97図版)

井戸群のうち、北から2番目に位置する。北に2.1mでSE341、南に2.0mでSE336がある。

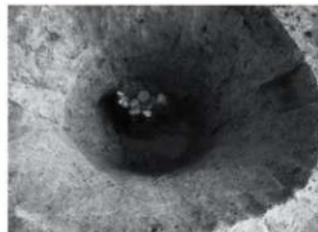
規模は2.12m×2.16mの正円形で、途中に1段の変換点がある。掘り下げは、深さ1.90mを測り、底の高さは4.40mとなる。

埋土は5層に分層された。土層2には円跡がまじる。

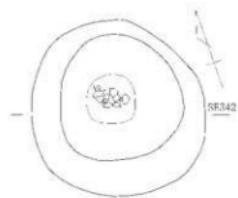
遺物は、最下層の土層1と、中間層の土層2および4からまとめて出土している。

土層4からは、疊がまじる中に71~75・78・79が出土している。

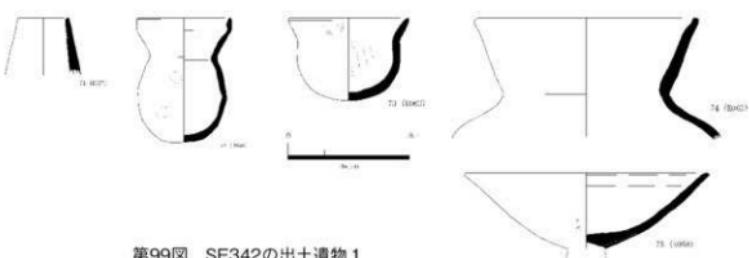
土層2からは、76・77が完形品で出土している。横倒しの状態で、井戸底より34cm上となる高さ(4.74m)から出土したものであるが、出土状態の図化はできなかった。



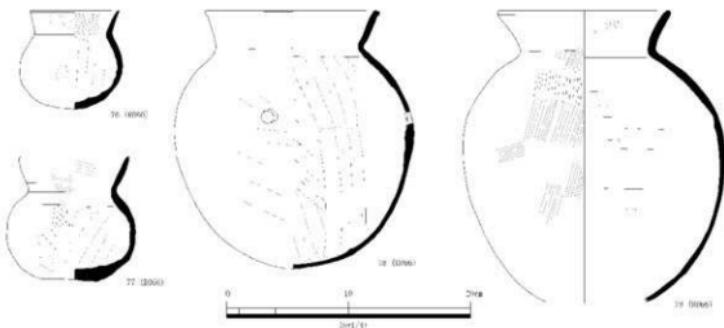
第97図版  
SE342 遺物出土状況



第98図  
SE342 平面図・断面図



第99図 SE342の出土遺物 1



番号	器種	口径	底径※	器高	形態・手法の特徴	胎土	色調	残部
71	土師器/小壺	4.2			内・外面ナデ	砂/多	橙色	1/4
72	土師器/小壺	7.6		10.1	内・外面ココナデ/押圧/ナデ	砂/多	淡灰褐色	1/2
73	土師器/小鉢	9.8		7.8	内面指ナデ/ナデ、外面ハケ/ナデ	砂/多	赤褐色	1/3
74	土師器/甕	17.8			内・外面コナデ	砂/多	淡棕褐色	1/4
75	土師器/高杯	19.8			内面ココナデ、外面ココナデ/ハケ/ナデ	砂/多	淡黃褐色	完存
76	土師器/小壺	7.6	3.4	8.0	内面ハケ/指ナデ、外面指ナデ	砂/少	淡褐色	完形
77	土師器/小壺	8.8	4.7	10.1	内・外面ココナデ/ハケ/指ナデ	砂/多	淡灰褐色	1/2
78	土師器/甕	14.3	21.1		内面ココナデ/ケズリ、外面ココナデ/指ナデ	砂/多	赤褐色	完形
79	土師器/甕	14.1	21.5		内面ココナデ/ハケ/ケズリ、外面ココナデ/ハケ	砂/多	棕褐色	完存

第100図 SE342の出土遺物2

#### SE345（第83・101・103～105図、第102図版）

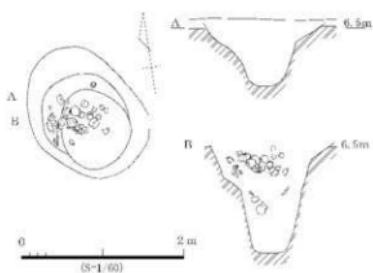
井戸群のうち、一番南に位置する。北に1.9mでSE340がある。

規模は1.30m×1.68mの楕円形で、途中に変換点となる段をもって掘り下げられている。掘り下げの深さは、1.38mを測り、井戸底の高さは4.83mである。

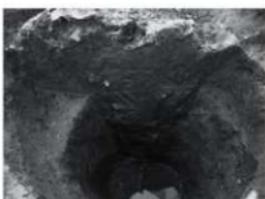
埋土は、暗灰色～黒灰色粘土の1層と判断し、分層はできなかった。しかし、井戸底の大きさが31cm×35cmと非常に狭く、さらに遺物も多量に出土していることから、半裁ではなく、全体での掘り下げをおこないながら遺物の出土状況の平面図や土層の断面図を図化したため、分層できなかった可能性

もある。

遺物は、中ほどから上層にかけて完形を含む



第101図 SE345 平面図・断面図

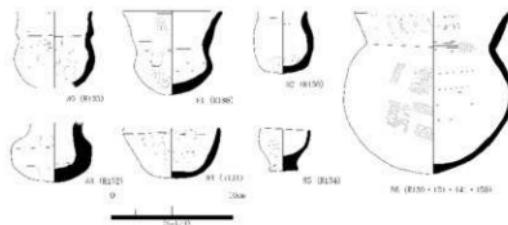


第102図版 SE345 土層断面

多量の土器が出土している。その多くは手づくね土器あるいは小型の壺が大部分であった。

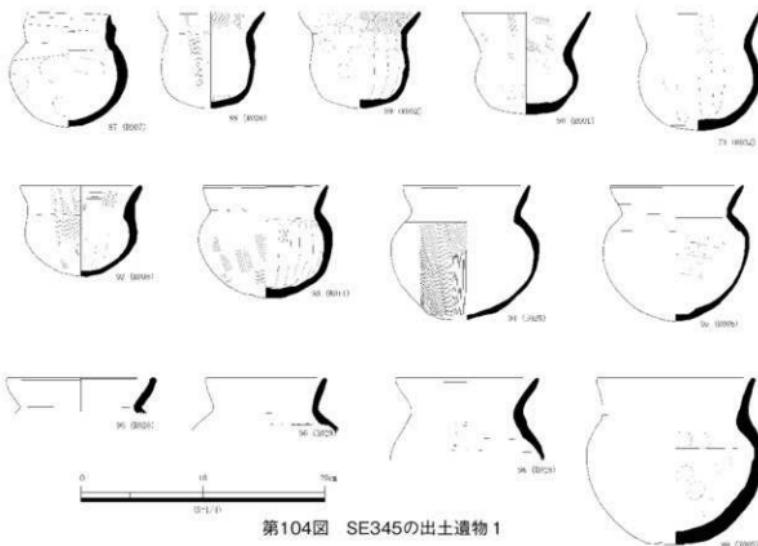
また、上層の調査においてもSE345の付近で同様の土器群が50点ほど検出されている。78~84である。その出土位置は、SE345の位置より外側にも分布している。検出の高さは6.51mであり、SE345が削平されたことにより散乱したものと考えられる。

86は、上層のSX005とSB02（P028）から出土した遺物と接合している。SE345とP028の直線距離は19.17m、SE345とSX005の直線距離は24.49mである。

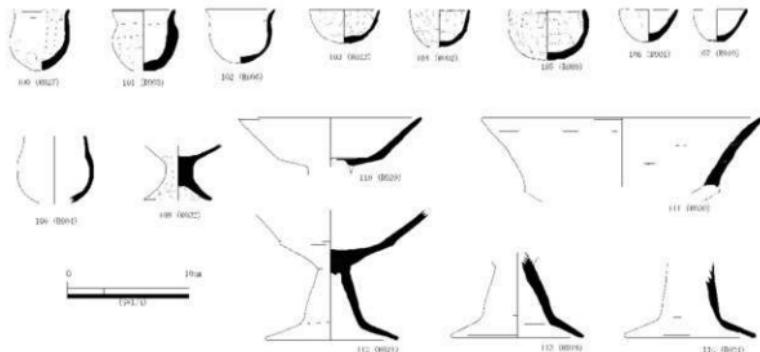


番号	器種	口径	底径	器高	形態・手法の特徴	胎土	色調	残部
80	土師器/小壺	6.0			内面ヨコナデ/押圧、外面ヨコナデ/ハケ/押圧	砂/多	淡褐色	1/3
81	土師器/小壺	8.2		6.8	内面ナデ/ヨコナデ、外面ヨコナデ/ハケ/押圧	砂/多	淡褐色	3/4
82	土師器/小壺	3.9	3.0	5.1	内・外面ナデ/指ナデ	砂/少	橙褐色	3/4
83	土師器/小壺				内・外面指ナデ	砂/少	淡褐色	完存
84	土師器/小杯	7.8		4.1	内・外面指ナデ	砂/少	淡褐色	完形
85	土師器/小杯	4.1	2.3	3.5	しぶり痕、内・外面指ナデ	砂/少	淡褐色	完形
86	土師器/小壺	12.8		13.3	内面ヨコナデ/ハケ/ケズリ、外面ヨコナデ/指ナデ/ハケ	砂/少	橙色	完形

第103図 上層で検出したSE345周辺の出土遺物



第104図 SE345の出土遺物 1



番号	器種	口径	底径	器高	形態・手法の特徴	胎土	色調	残部
87	土師器/小壺	6.7		9.4	内・外面ヨコナデ/指ナデ	砂/多	黄褐色	完形
88	土師器/小壺	8.7		7.9	内・外面ハケ/指ナデ	砂/少	赤褐色	完形
89	土師器/小壺	9.7	8.2	7.9	内面ハケ/指ナデ、外面指ナデ	砂/少	赤褐色	1/2
90	土師器/小壺	10.4		8.4	内・外面ハケ/ハケ/指ナデ	砂/少	淡赤褐色	完形
91	土師器/小壺	10.1		9.7	内・外面指ナデ	砂/少	褐色	完形
92	土師器/小壺	9.8		7.5	内・外面ハケ/ナデ	砂/少	褐色	2/3
93	土師器/小壺	10.2		9.2	内面ヨコナデ/指ナデ、外面ヨコナデ/ハケ/ナデ	砂/少	棕褐色	1/6
94	土師器/小壺	10.4		11.0	内面ヨコナデ/ナデ、外面ヨコナデ/ハケ	砂/少	褐色	完形
95	土師器/小壺	11.2		11.1	内面ヨコナデ/ケズリ、外面ヨコナデ/ナデ	砂/少	赤褐色	完形
96	土師器/小壺	12.0			内・外面ヨコナデ	砂/少	明褐色	1/6
97	土師器/小壺	9.8			内面ヨコナデ/ケズリ、外面ヨコナデ	砂/少	淡褐色	1/2
98	土師器/小壺	11.6			内面ヨコナデ/ケズリ、外面ヨコナデ/ハケ/ナデ	砂/少	褐色	1/2
99	土師器/小壺	12.8		13.6	内・外面指ナデ	砂/少	淡褐色	1/2
100	土師器/小壺	4.5		4.8	内・外面指ナデ	砂/少	淡褐色	完形
101	土師器/小壺	5.1		7.0	内・外面指ナデ	砂/少	淡黄褐色	2/3
102	土師器/小壺	5.6		4.5	内・外面ハケ?	砂/少	棕色	完形
103	土師器/小杯	5.8		2.7	内・外面指ナデ	砂/少	暗褐色	1/2
104	土師器/小杯	4.8	1.8	3.1	内・外面指ナデ	砂/少	褐色	1/6
105	土師器/小杯	6.0		4.2	内・外面指ナデ	砂/少	褐色	完形
106	土師器/小杯	4.8		4.7	内・外面指ナデ	砂/少	棕色	1/2
107	土師器/小杯	4.4		2.6	内・外面指ナデ	砂/少	棕褐色	完形
108	土師器/小壺	4.9			内・外面ナデ?	砂/多	黄褐色	2/3
109	土師器/小杯			5.5	内・外面指ナデ	砂/少	棕色	完存
110	土師器/高杯	15.0			内・外面ヨコナデ	砂/多	褐色	1/6
111	土師器/高杯	22.8			内・外面ヨコナデ	砂/少	褐色	1/6
112	土師器/高杯			11.0	内面ヨコナデ/ナデ/ケズリ、外面ヨコナデ/ナデ	砂/少	淡黄白色	1/3
113	土師器/高杯	22.8	10.7		内・外面ヨコナデ	砂/少	褐色	1/6
114	土師器/高杯			10.5	内面ケズリ/ナデ、外面ナデ	砂/多	淡黄褐色	1/2

第105図 SE345の出土遺物2

## 5 土坑（第83図）

土坑は13基が検出された。

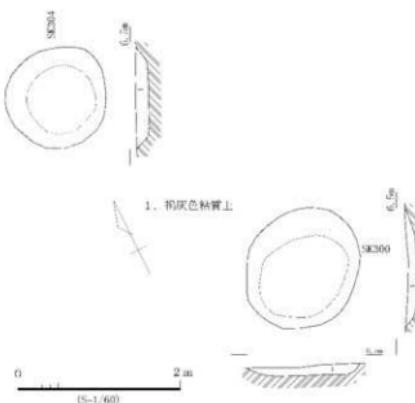
### SK300・304（第83・106図）

調査区の西部、南端に位置している。

SK300は、直径 $1.35\text{m} \times 1.55\text{m}$ の楕円形で、深さ16cmを測る。底面の高さは6.24mとなる。

SK304は、直径(1.2m)  $\times 1.28\text{m}$ の楕円形で、深さ16cmを測る。底面の高さは6.27mとなる。

遺物はいずれも小片で、SK300から土器類、須恵器、鐵滓が少量、SK304からは土器類、須恵器、黑色土器がわずかに出土したにすぎない。



第106図 SK300・304 平面図・断面図

## SK339・343・344（第83・107・109・110図、第108図版）

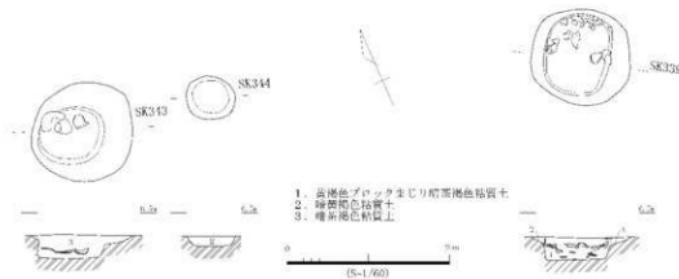
調査区の西部、北端に位置している。

SK339は、直径 $1.17\text{m} \times 1.23\text{m}$ の円形で、深さ29cmを測る。底面の高さは5.91mである。埋土は2層となるが、土層2は埋没による周囲の崩落土であり、もともとの土坑は $0.80\text{m} \times 1.05\text{m}$ の楕円形であったと考えられる。

SK343は、 $1.22\text{m} \times 1.23\text{m}$ の正円形で、深さ30cmを測る。底面の高さは5.94mとなる。埋土は1層であったが、SK339と同じような断面形態である。

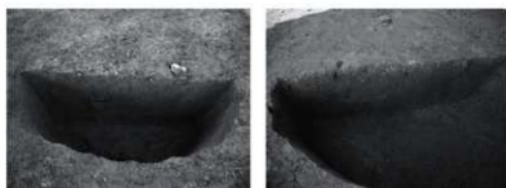
SK344は、 $0.53\text{m} \times 0.61\text{m}$ のほぼ円形で、深さは12cmを測る。底面の高さは6.09mとなる。

遺物は、SK339とSK343から北側に偏った出土状況で弥生土器が出土している。SK339では壺・壺・鉢・瓶が破片となっており、投棄されたものか。SK343では壺が個体で出土したが、1/2を残すのみ

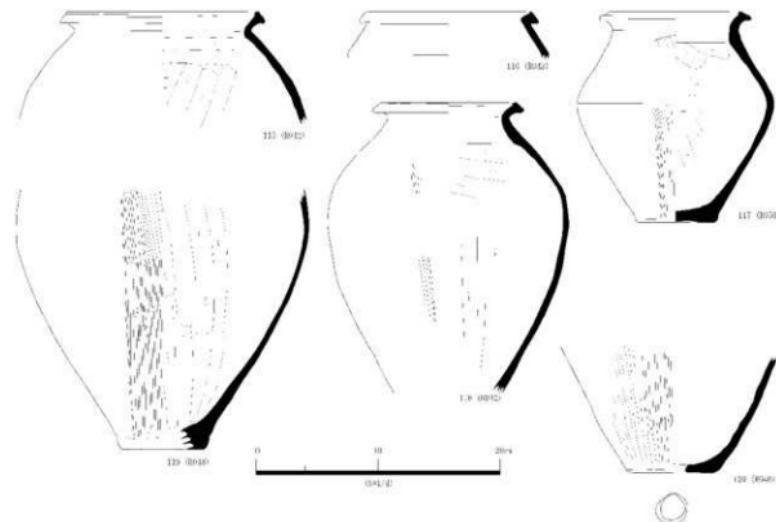


第107図 SK339・343・344 平面図・断面図

であり、底面より浮いた状態にあることから投棄されたものであろう。

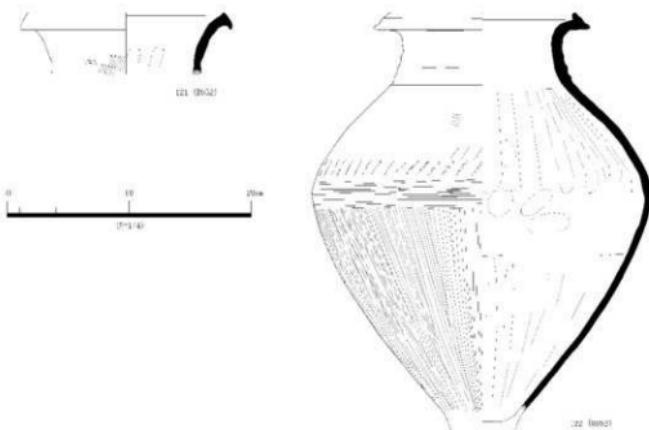


第108図版 土層断面 SK339(左), SK343(右)



番号	器種	口径	底径	器高	形態・手法の特徴	胎土	色調	残済
115	弥生/甕	25.6			内面ケズリ/ヨコナデ。外面ナデ?	砂/多	棕褐色	1/2
116	弥生/鉢	13.4			内・外面ヨコナデ	砂/多	赤褐色	1/4
117	弥生/壺	10.7	6.4	17.2	内面ヨコナデ/ケズリ。外面ヨコナデ/ハケ/ナデ	砂/多	褐色	1/2
118	弥生/甕	11.0			内面ヨコナデ/ケズリ。外面ヨコナデ/ハケ	砂/多	褐色	1/2
119	弥生/甕		6.8		内面ケズリ。外面ミガキ	砂/多	褐色	1/4
120	弥生/甌		7.6		焼成後穿孔。内面ミガキ。外面ミガキ?	砂/多	暗褐色	完存

第109図 SK339の出土遺物



番号	器種	口径	底径	器高	形態・手法の特徴	胎土	色調	残部
121	弥生/壺	16.1			内面ヨコナデ/ナデ、外面ヨコナデ/ハケ	砂/多	淡褐色	1/2
122	弥生/壺	15.5		28.0	内面ヨコナデ/指ナデ/ミガキ、外面ヨコナデ/ハケ/側突/ミガキ			1/5

第110図 SK343の出土遺物

SK270・3316・330（第83・111・113図、第112図版）

調査区の中央部に位置している。

SK270は、0.40m×0.96mの楕円形である。深さは27cmを測る。底面の高さは6.12mとなる。

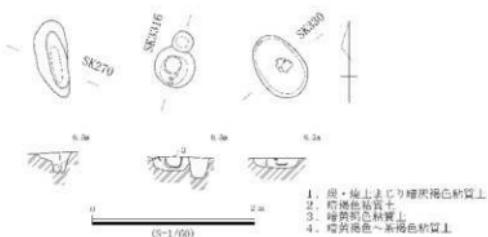
遺物は、土師器と須恵器がわずかに出土したのみである。

SK3316は、0.45m×0.50mの正円形である。ピットとも考えられるが、1個体の土器が出土していることから土坑として報告する。深さは17cmを測る。底面の高さは6.10mである。

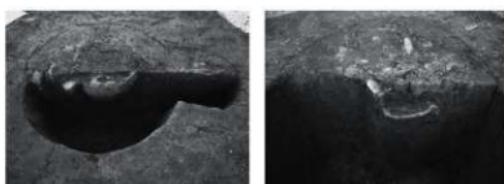
123は、口縁部を斜め下に向け、土坑のほぼ中心に置かれた状態で出土した。土器の底から下半部は遺構上面の削平により欠損している。

遺物は弥生土器が少量出土している。123以外は同様の底部と小片にすぎない。

SK330は、0.57m×0.82mの楕円形で、深さは12cmを測る。底面の高さは6.13mである。

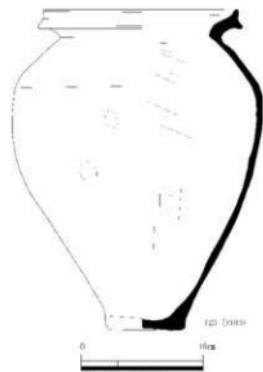


第111図 SK270・3316・330 平面図・断面図



第112図版 土層断面 SK3316(左), SK330(右)

遺物は、弥生土器の小片が100点ほど出土した。端部が残っているものはわずかであった。123以外では口縁端部を上方に拡張した壺や、外方に肥厚させた高杯の脚部があるにすぎない。



番号	器種	口径	底径	器高	形態・手法の特徴	胎土	色調	残部
123	弥生/甕	16.0	6.1	26.3	内面ヨコナデ/ケズリ、外面ヨコナデ/ナデ	砂/少	橙色	完形

第113図 SK3316の出土遺物

#### SK323（第83・114・116図、第115図版）

調査区の中央部、南側に位置している。

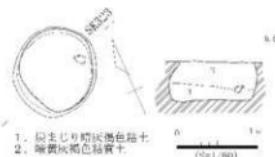
0.92m×0.96mの正円形で、深さ49cmを測る。底面の高さは5.77mとなる。断面形態は西から南に向けて胴張りとなり、とくに西側が大きく外側に膨らんでいる。最大径は1.12mとなる。

遺物は、土層1と2の間で出土している。弥生土器が20点ほどであるが、124～126以外

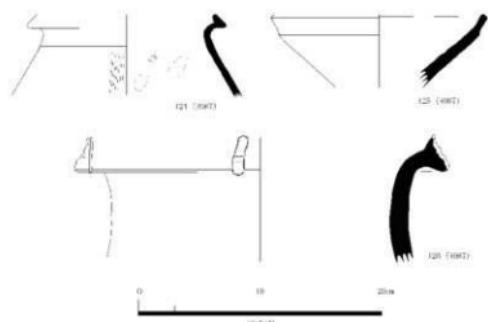
は小片である。



第115図版 SK323 土層断面



第114図 SK323 平面図・断面図



番号	器種	口径	底径	器高	形態・手法の特徴	胎土	色調	残部
124	弥生/甕	14.6			内面ヨコナデ/指ナデ/ハケ、外面ヨコナデ/ハケ/ナデ	砂/少	淡褐色	1/8
125	弥生/高杯	17.2			内・外面ヨコナデ?	砂/多	赤褐色	1/6
126	弥生/壺	28.2			棒状脊文貼り付け、内・外面ヨコナデ	砂/多	赤褐色	1/3

第116図 SK323の出土遺物

SK294・3312 (第83・117・119図, 第118図版)

調査区の東部に位置している。遺構の重複が認められる。SK294はP295に切られている。SK3312はSD312に切られ、SK313を切っている。

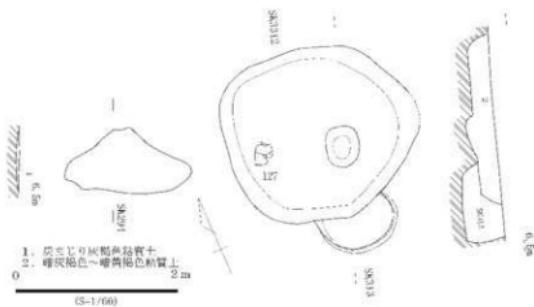
SK294は、0.8m×1.58mの不整形で、深さ16cm、底面の高さ6.24mを測る。

遺物は、土師質土器がわずかに出土した。

SK3312は、2.20m×2.38mと大型で、中ほどに0.5m×0.4mの窪みがある。深さは25cm、窪みが10cmを測る。底面の高さは6.0mに5.90mである。

遺物は、127の弥生土器

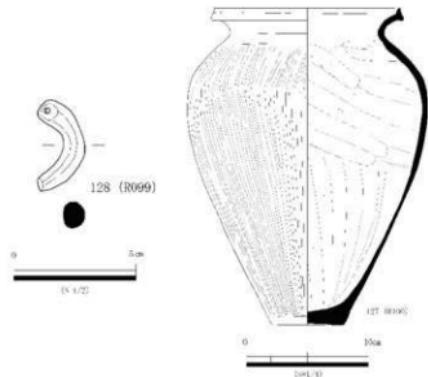
が1固体横倒しの状態で底面より出土したほか、土製勾玉1点が出土している。



第117図 SK294・3312 平面図・断面図



第118図版 SK3312 土層断面



番号	器種	口径	底径	器高	形態・手法の特徴	胎土	色調	残部
125	弥生・甕	15.1	6.0	26.0	内面ヨコナデ/ケズリ、外面ヨコナデ/ハケ	砂/多	暗褐色	1/2
126	土製勾玉	3.7	1.9 (厚み)	1.0	指ナデ	砂/少	赤褐色	完形

第119図 SK3312の出土遺物

SK313・3303 (第83・120図, 第121図版)

調査区の東部に位置している。遺構の重複が認められる。SK313はSK3312に切られている。SK3303はSD312に切られている。

SK313は、0.98m×(1.00)mの円形である。南側を中心に胴張りとなっている。深さは49cmを測

る。底面の高さは5.78mとなる。

遺物は、弥生土器の小片が少量出土した。壺の底部が大半で、ほかに上下に拡張した口縁部片がある。

SK3303は、検出面での直径が $0.86\text{m} \times 0.93\text{m}$ 、最大形の直径が $0.92\text{m} \times 0.95\text{m}$ の胴張りとなる。深さは38cm、底面の高さ6.89mを測る。

遺物は出土していない。



第120図 SK313・3303 平面図・断面図



第121図版 土層断面  
SK313(上), SK3303(下)

#### 6 鋼冶炉 (第83図)

鉄滓を出土している遺構が上層においても多くみられたことから、周辺において製鉄あるいは大鋳治の工房があったものと推測された。

下層の遺構面においてがが1基確認された。

#### 炉309 (第83・123図、第122図版)

調査区の中央部に位置している。

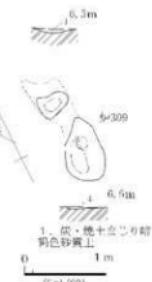
がは、幅0.5m、長さ1.5mの範囲の中に、2ヶ所の窪みが検出されている。

窪みは、南北の並列で、20cmほどの間隔である。

それぞれの規模は、北側が30cm×35cm、深さ5cm、南側が45cm×80cm、深さ10cmを測る。底面の高さは、北側が6.34m、南側が6.35mである。北側の窪みの周囲には被熱によって赤色に変化した部分が認められ、南側の窪みでは周囲



第122図版 炉309 検出状況



第123図版 炉309  
平面図・断面図

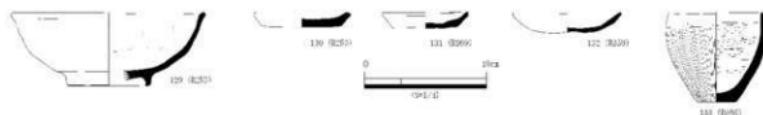
の被熱範囲は確認されなかった。また、それぞれの底面でも、北側がわずか暗赤褐色に変色していたが、南側ではほとんど焼けていなかった。さらに、それぞれの理土にも差が認められ、北側の窪みでは炭と焼土が、南側の窪みでは焼土と鉄滓が含まれていた。

このことから、<sup>か</sup>の本体は北側の窪みで、南側の窪みは排溝等の片付けにともなう土坑と考えられる。

#### 7 ピット（第124～126図）

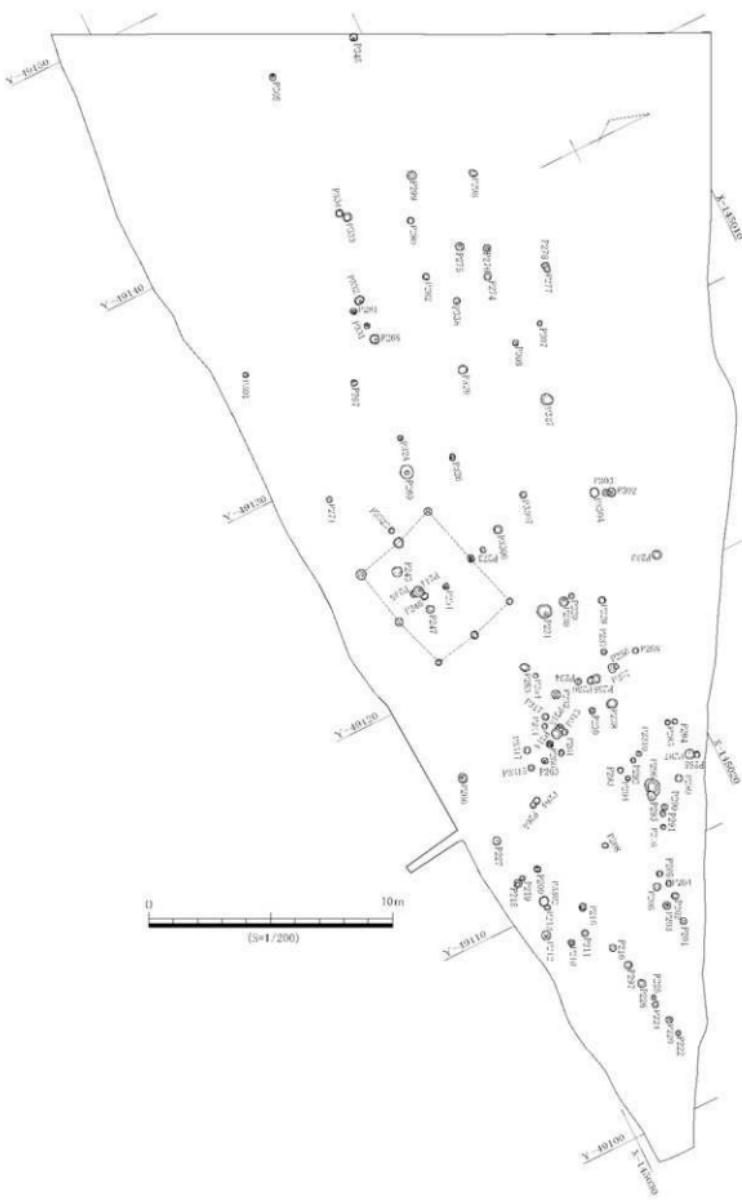
ピットは、109基検出されている。調査区全体に掘られているが、西部の北端と南端では希薄となっている。建物となったのはわずかに1棟であるが、土層観察から柱痕跡を確認できるピットも多くあり、建物はほかにも存在していたものと推測される。

ピットから出土した遺物はそれほど多いものではなく、いずれも小片にすぎない。図化できたのはわずかに5点である。129・130がP227より、131がP230より、132がP276より、133がP306よりそれぞれ出土している。

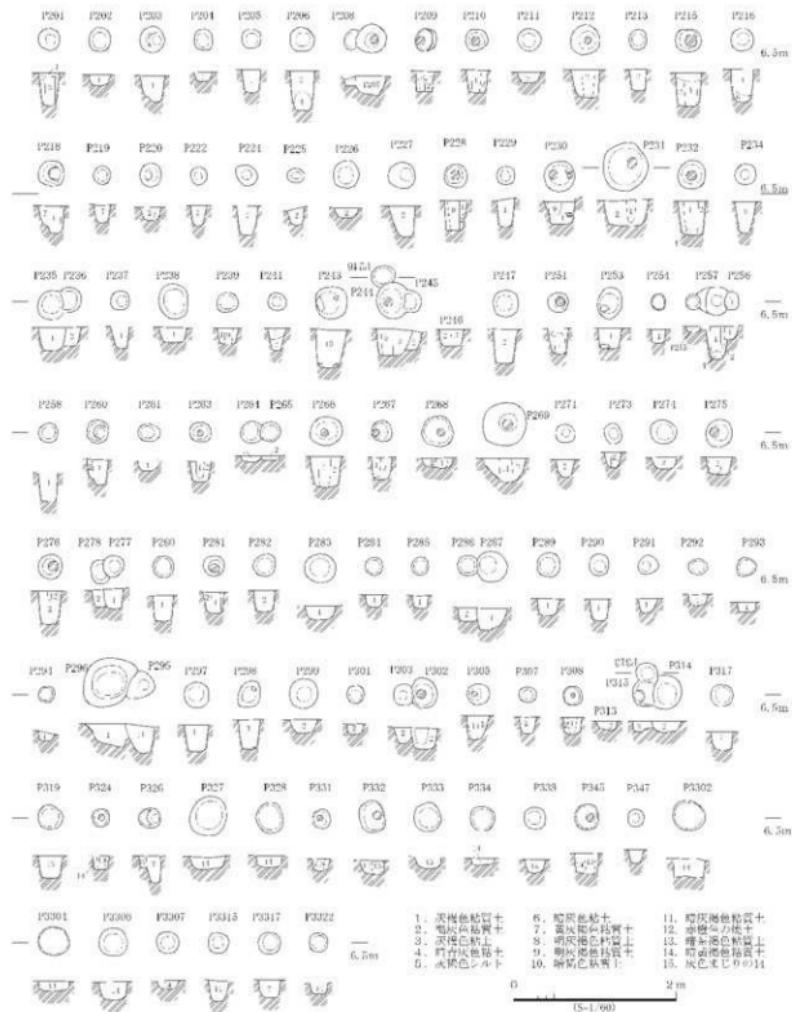


番号	器種	口径	底径	器高	形態・手法の特徴	胎土	色調	残部
127	土師質/楕	15.6	6.9	6.0	内・外面ナデ	砂/少	淡白色	1/4
128	土師器/小皿	8.0	6.6	1.1	内・外面ヨコナデ/ナデ	砂/少	橙褐色	1/4
129	土師質/小皿	7.1	5.4	1.3	底部へら起こし/内面ヨコナデ/ナデ、外面ヨコナデ	砂/多	淡橙色	3/4
130	土師器/小皿	8.8		1.6	内・外面ヨコナデ?	砂/少	淡褐色	1/2
131	弥生/小杯	7.8	3.0	7.3	内・外面ヨコナデ/ナデ	砂/少	赤橙色	2/5

第124図 ピットの出土遺物



第125図 ピット群 配置図



第126図 ピット 平面図・断面図

### 3) A地区のまとめ

#### 1 遺構

遺構として、上層では掘立柱建物3棟、溝、水田畦畔、土坑、ビットが、下層では竪穴建物1軒、掘立柱建物1棟、溝、井戸、土坑、炉、ビットが検出された。

検出された遺構群の時期は、弥生時代から中世である。上層の遺構面が中世、下層の遺構面が弥生時代から古墳時代である。

弥生時代の遺構は土坑群を主体として検出された。調査区の全域で、直径1mほどの土坑が検出されている。その断面形は胴張りとなるものが多く、貯蔵穴と推測される。

古墳時代の遺構は、竪穴住居と井戸群、溝が検出されている。井戸群が調査区の西端に位置し、南北方向で並列している。この東側には同じ方向にのびるSD335が4mほどの距離を置いて検出されており、井戸群を区画する溝と考えられる。竪穴住居は、調査区の東端に位置する。西辺中央にカマドをもつ住居で、この西側に南北でのびるSD312が2mほどの距離を置いて検出されており、住居群を区画する溝となる可能性が考えられる。また、下層遺構面の掘立柱建物1棟も、柱穴から土師器が出土しており、古墳時代と推測されるが、竪穴住居同様に詳細な時期は不明である。

中世の遺構は、水田畦畔、掘立柱建物、溝などである。掘立柱建物は2棟で、その規模からみても居住に使用されたものとは考えにくい。また、ビットの数からみてもそれほど多くの建物があったものとは考えられない。しかも土坑などもほとんど検出されていないことから、集落の周辺域にあたるものと思われる。

#### 2 遺物

遺物は、井戸群や貯蔵穴を中心に、完形を含んだ土器が出土している。とくにSE345からは手づくね土器が多量に出土し、SE340からも古墳時代前期の土師器の甕や瓶などが出土している。SE340の土器群はいずれも土師器であるものの、瓶は須恵器の形態をそのままに土師器としたもので、本来は須恵器として焼成したものとも考えられる。また、甕の内面に同心円文のタタキ痕跡が認められることから、須恵器の製作技法も用いられている。井戸の廃絶とともに完形の土器群を置いたものと考えられるが、須恵器を置くことはできなかったものと想像される。

遺物の出土量は、遺構の検出数からみてもそれほど多いものでもない。長期間にわたって遺跡が維持されていたとは考えにくいものである。

遺構・遺物の検出状況からは、弥生時代が中期末から後期初頭、古墳時代が前期、中世が13世紀末～14世紀代を中心として遺跡が形成されていたと判断される。このほかにカマドの付く竪穴住居が検出されていることから古墳時代後期と、遺構にともなわない遺物としてサヌカイト片や黒色土器などが出土していることから弥生時代中期と古代～中世前半にも遺跡の痕跡がわずかながらに認められる。

A地区では、南側が河道に面していることから、弥生時代～古墳時代に集落の縁辺部として利用されたもので、集落の中心は北側にあるものと推測される。また、中世には水田を開削することによって生産域とした土地利用に移り変わったことが確認できた。

## 第2節 B地区の調査記録

B地区は、A地区から北東に約60mの地点である。その間は、緑地帯と周回道路に該当し、地下に影響を及ぼすものでないという判断から、現地保存の対象地とした。調査したB地区的範囲は、建築物が配置される計画であり、造成工事以後に隨時調査を行なうことは適切でないと判断したことから造成前の全面発掘調査を実施した次第である。なお、建物設計にあたっては、できるかぎり道路部分を多くし、調査範囲を狭めるために事業者には最大限の努力をしていただいた。

試掘調査では、堅穴建物と推定しうる遺構が検出され、おそらく遺跡の中心部分にあたるものと判断している。

調査面積は、630m<sup>2</sup>である。

### 1 B地区上層

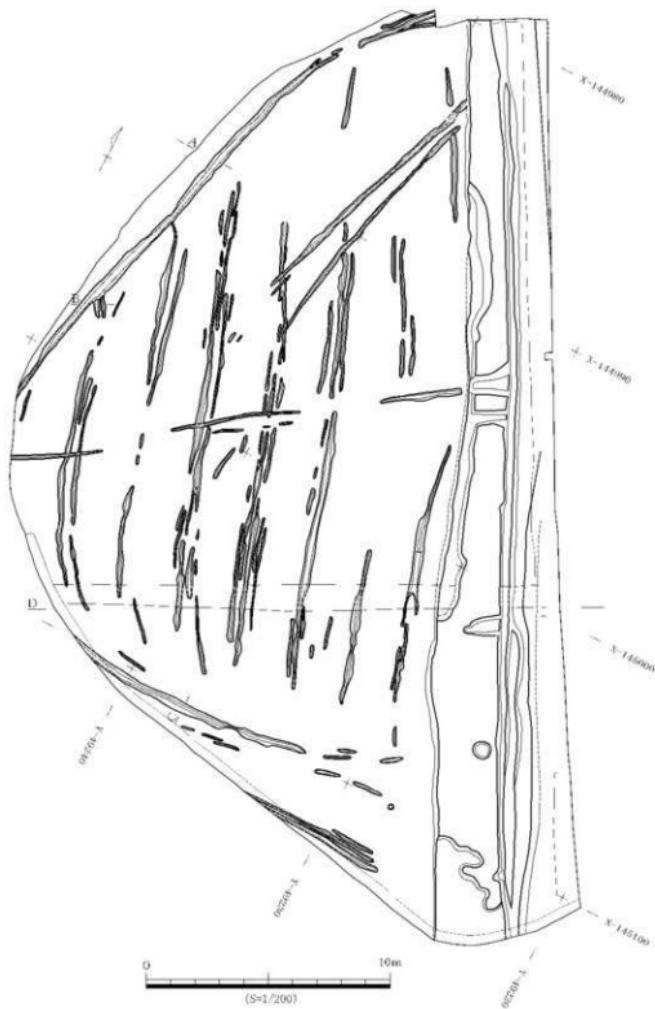
上層で検出した遺構は、溝と土坑、ピットである。しかもその大部分は溝であり、耕作地として利用していたことがわかった。



第127図版 B地区 全景(北から)



第128図版 大溝・大畦・溝群



第129図 B地区 上層の遺構全体図

## 1 溝（第129図）

大溝（第129・131・133図、第130・132図版）

調査区の東端で検出された溝で、現況のコンクリートによる用水路とほぼ並行している。

大溝はその西岸を検出しており、東岸は用水路の東側の調査区であるC地区においてその位置を確認している。つまり溝の中心部分は現用水路の下にあって、わずかのトレンチ調査でその落ち込みを確認したが、用地内の雨水排水の点やおそらくグライ化していることなどの判断からそれ以上の調査は実施していない。

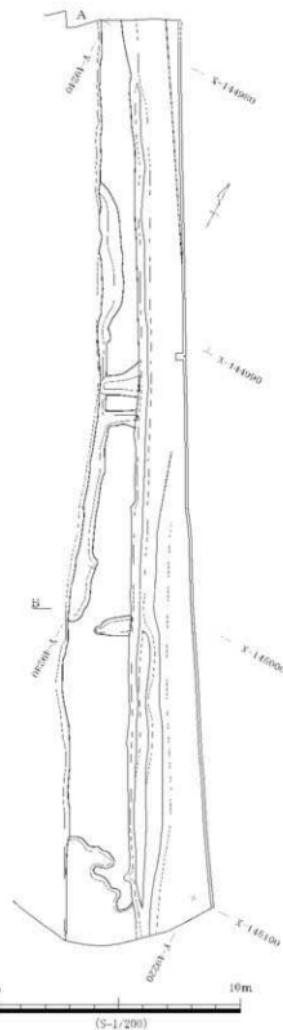
検出した溝幅は、南端で2.2m、中央で2.0m、北端で2.5mである。深さは南端で56cm、中央で53cm、北端で上段が48cm、下段が80cm以上を測る。標高では南端6.06m、中央6.10m、北端上段6.14m・下段5.86mとなる。

また、断面Aにおいて土層7とした明灰色粘質土が盛土状となっている。現状では高さ26cmを測る。土層8・9の堆積する深い溝の部分が埋没したこと、同規模による再掘削をせずに、溝幅を狭めたために築かれた護岸堤防と考えられる。

また、この大溝に付属して、西岸に平行する大畦状の



第130図版 大溝 全景(南から)



第131図 大溝 平面図

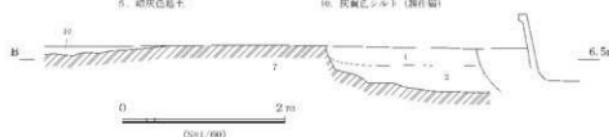
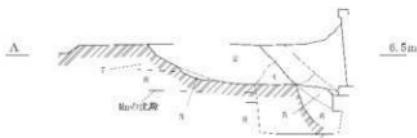
高まりが残されていた。断面Bにおいて高さ10cmを測る。上面の幅は2.5m、下面の幅は2.7mであるが、北に行くほど狭くなり、北端では上面幅1mにも満たなくなる。この幅を減じた部分はいずれも大畦の西側部分にあたり、東側部分の大溝西岸は直線的である。おそらく耕作地の拡張とともにあって大畦を削り込んでいったものと推測される。

この大畦には、中ほどと南部において溝状の窪みが確認されている。中ほどに位置する溝は、畦に直交して2本が並列しており、ひとつは大溝側で幅1.45m、西側で0.78m、もうひとつはいずれも0.68m～0.75mを測る。深さは、前者が7cm、後者が8cmで、標高では6.55mと6.57mである。検出時ににおいて、北側の溝は大溝より古く、南側の溝は大溝と同じであった。大溝が機能している中で、北側から南側へと掘り替えたものであろう。

また南部にある窪みは、大溝側で幅0.87m、深さ9cmを測り、溝底の高さは6.58mとなる。この溝は大畦を東西に貫通しておらず、畦の中心地点で終わっている。これは大畦が削平されたことによるものと考えられる。



第132図版 大溝 土層断面



第133図 大溝 土層断面図

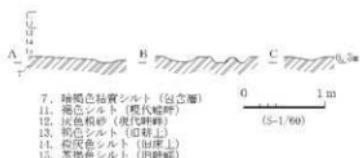
遺物は、弥生土器、土師器、須恵器、黒色土器、土師質土器、陶器、磁器、鉄滓、鉄釘がわずかに出土した。いずれも小片以下であり、古い時期の遺物が混入している。陶器には砂目による重ね焼き痕が残り、磁器が出土していることから、近世初頭に埋没した溝と考えられる。

#### 周回溝（第129・134図）

調査区の北側から西側、南側で、その外周に沿っている溝が検出された。調査区の設定は、現況地形で畦が置かれていた土地の境界であり、外側は一段下がった耕作地となっている。検出した溝は、この畦に沿っている溝になるものである。

その規模は、最大幅50cm、深さ最大10cmで、浅いところでは2cmにも満たない。また溝底の高さは6.49m～6.54mとなる。

断面Aの地点では、この溝より西側に溝の埋土である土層10とした灰黄色シルトは存在していない。おそらくここに畦があったものと推測され



第134図 周回溝 土層断面図

る。しかし、断面Cの地点では、その南側にも並列している溝が検出され、掘り直しによるものと考えられる。土層10も存在していた事実から、畦の位置はさらに南側になるものである。

また、この溝から派生した溝も存在する。ひとつは細溝とつながり、もうひとつは2条が並列する。取水のために掘られた溝と考えられる。

遺物は出土していない。

#### 細溝（第129・135図、第128図版）

調査区の全体で検出されている。溝は削平されたことにより、長さは0.3m～11.5m、幅は10cm～40cmとなっている。また深さは浅くて1cm、深くても5cmであり、溝底の高さは6.52m～6.57mとなる。

溝は東西方向にあるもの、南北方向にあるもの、前2者の中間となる斜めの3種類が認められる。このうち南北方向の溝がもっとも多く検出された。報告では、南北方向の溝を溝A、東西方向を溝B、中間を溝Cとして区別する。

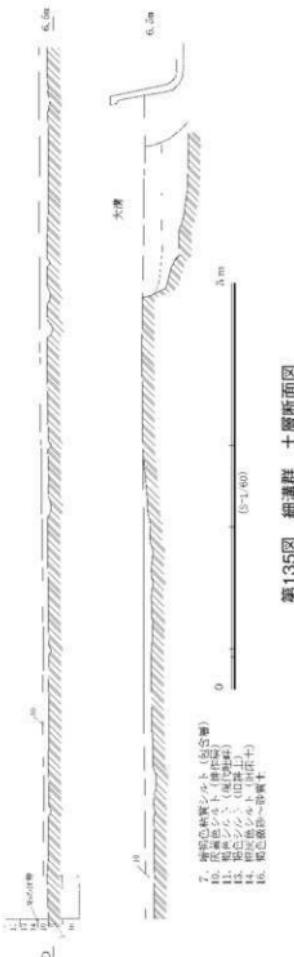
溝Aは、調査区の全体、周回溝に囲まれた範囲内すべてで確認されている。いずれも同一の方向にあるが、西端では周回溝とあわせるかのようにカーブをしている。それぞれの溝間は接触するもの～30cmと近距離にある場合と、180cm～200cmと距離を置いた場合とに2分される。これは同じ位置でいくども掘り替えられた結果と推測される。なお、大溝の方向に対しては、わずかに東へ振っている状況である。

溝Bは、調査区の中ほどでのみ確認された。途切れ途切れとなっているものの、基本的には2条である。いずれも溝幅10cm～20cm、深さ1cm～5cmで、その溝底の高さは6.51m～6.54mである。溝間は30cm～35cmである。この溝Bは大畦の上で検出された溝に対応しており、取水・排水用の溝と考えられる。

溝Cは、中ほどから北で確認された。2条がほぼ平行して長さ11.5mにわたって伸びている。またその延長上にも短い溝が認められることから、さらに長い溝であったと推測される。溝Aとは重複し、溝Aより新しい遺構である。また、周回溝と平行している。

調査時において遺物の取り上げは、一括して行ったため、A～Cの区別はしていない。

遺物は、溝群から須恵器、土師器が各1点出土したのみで、須恵器は古墳時代の杯蓋の口縁部であることから、下層遺構の混入である。

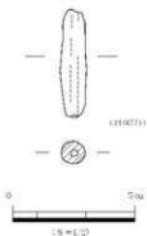


第135図 細溝群 壁面断面図

溝からの出土ではないが、溝を埋めている埋土となる水田層からは、須恵器、土師器、土師質土器、弥生土器、瓦質土器、陶器、サヌカイト、焼土、土錘が400点ほど出土している。しかし、水田耕作にともなっていざれも小片以下となっている。

番号	器種	口径	直径	重量	形態・手法の特徴	胎土	色調	残部
134	土錘	4.4	0.9	4.0g	指ナデ	砂/少	淡褐色	完形

第136図 水田層の出土遺物



## 2 土坑

### SK01 (第137図)

大畦の上面でSK01が1基確認されたのみである。

平面円形を呈し、直径63cm～73cmで、深さ5cmと浅い。

底面の高さは6.62mとなる。

遺物は、出土していない。

## 3 ピット

### P02 (第137図)

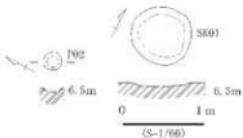
土坑と同じく、1基が確認できたのみである。

直径22cmの円形で、深さ4cmと浅い。底面の高さは6.56mである。

遺物は、出土していない。

第137図 SK01・P02

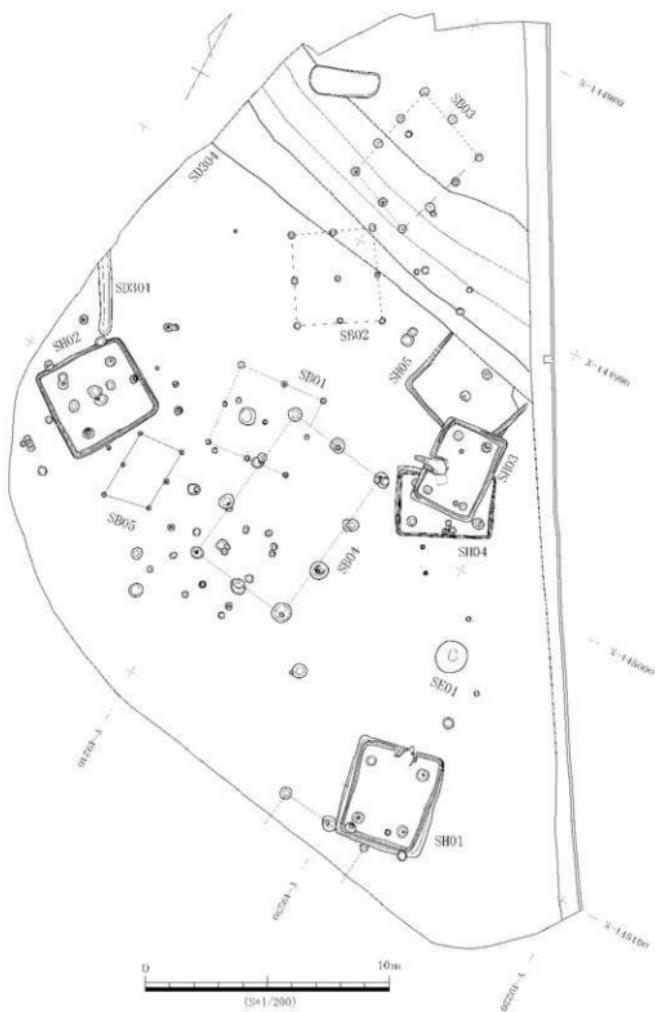
平面図・断面図



第138図版 遺構の検出状況 大畦の水口(左)、細溝の土層断面(右)

## 2) B地区下層

下層で検出した遺構は、竪穴住居群・掘立柱建物群・井戸・溝・土坑・ピットである。



第139図 B地区 下層の遺構全体図

## 1 壇穴住居群（第139図）

調査区全体で5軒の壇穴住居が検出された。SH01とSH02が単独となり、SH03～05が重複している。重複はSH03がSH04・05を切っている。

5軒のうち、カマドをもつものが2軒（SH01・SH03）であり、中央に炉をもつものが1軒（SH02）、残りは不明である。

### SH01（第139・142～144図、第140・141図版）

調査区の南東隅で検出された平面長方形を呈する建物で、南北に長く、北辺中央にカマドをもつ。

規模は壁体がすり鉢状に崩れていたが、明確に壁帶溝が残され、その内法で3.09m×3.72m前後、床面積11.80m<sup>2</sup>を測る。床面の高さは6.31m～6.34mである。主柱は4本からなる。柱穴は径40cm～50cmの円形ないし梢円形で、深さ16～19cmを測り、P1・2・4には柱痕跡が認められた。柱間間隔は東西が1.94m～2.20mの平均2.08m、南北が2.39m～2.44mの平均2.42mを測る。

カマドは大きく煙道部分を削平されていたが、内法75.6cm×58.8cm、高さ7.9cm余りを残している。被熱面はほんのわずかに赤く変色した範囲が認められたのみで、全体の残りはあまり良くなかった。



第141図版 SH01 カマド

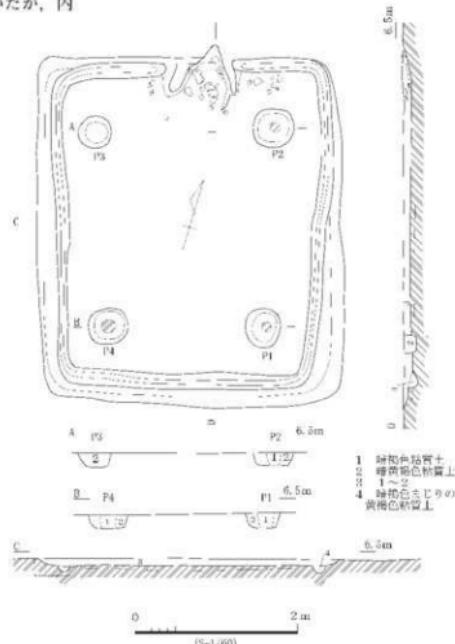
遺物は、カマドとその周辺に集中して出土した。須恵器、土師器が100点ほどであるが、その大部分は小片となっており、カマド内にも破片が散乱しているような状況であった。

また、カマドの中央には、支脚に使用した自然石が残されていた。

須恵器の杯蓋2点（135・136）は天井部が丸いものと平たいものであり、明ら

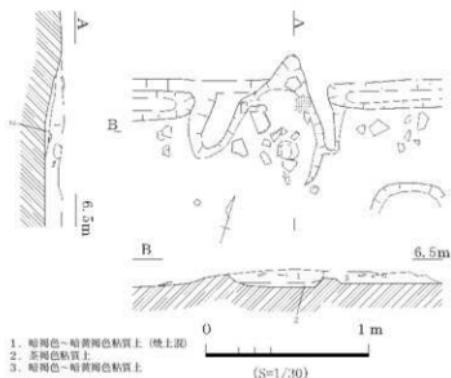


第140図版 SH01掘り上がり（東から）

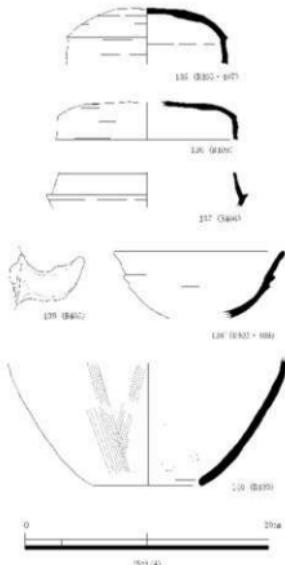


第142図 SH01 平面図・断面図

かに時期差が認められる。



第143図 SH01カマド 平面図・断面図



第144図 SH01の出土遺物

#### SH02 (第139・146・148・149図, 第145・147図版)

調査区の西端で検出された平面正方形を呈する建物で、中央に炉をもつ。

規模はわずかに北辺が短く、また壁体も多少崩れているが、明確に壁帶溝が残されている。壁体溝の内法で3.4m×3.6m前後、床面積12.32m<sup>2</sup>を測る。床面の高さは6.36m～6.37mである。

主柱は4本からなる。柱穴は径40cm～50cmの円形で、深さ16～19cmを測り、すべてに柱痕跡が認められた。柱間間隔は東西が1.94m～2.20mの平均2.08m、南北が2.39m～2.44mの平均2.42mを測る。



第145図版 SH02 挖り上がり(東から)

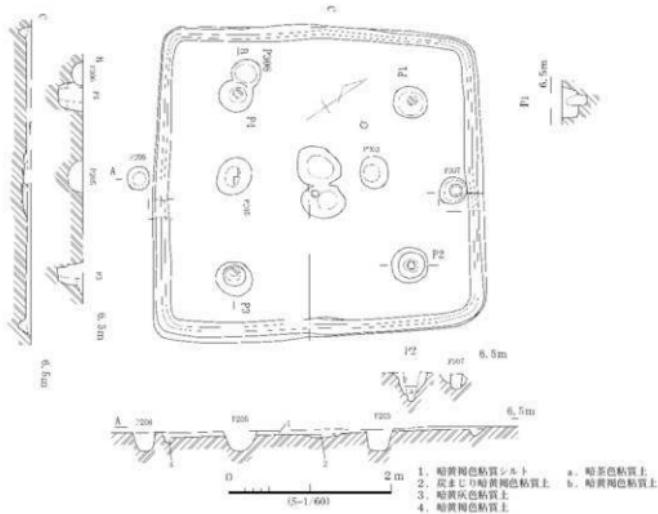
P203とP205、  
P306は、断面A・  
BからSH02より  
新しい柱穴であ  
る。P307も壁体溝  
に接していること  
からこの建物にと  
もなうものではな  
い。

炉は建物の中央  
に2つが確認され  
ている。いずれも  
50cm前後の円形  
で、深さは6cm  
である。熱を受け  
たことで赤色に変  
色した層が2枚あ

り、その切り合い関係から東側の炉が古く、東  
の炉から西の炉への造り替えが行われている。  
遺物は、土師器がごく少量出土しているのみで  
ある。住居の廃絶に際してすべてきれいに片付  
けられたと考えられるほどで、床面で出土した  
141も残部が1/8と、この住居にともなうもので  
ない可能性も多い。



第146図 SH02 平面図・断面図

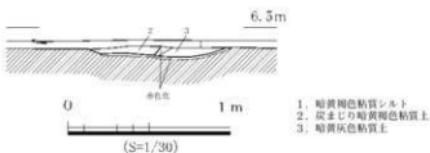


- 1. 始黄褐色粘質シルト
- 2. 反そじり始黄褐色粘質土
- 3. 始黄褐色粘質土
- 4. 始黄褐色粘質土

- a. 始黄褐色粘質土
- b. 始黄褐色粘質土



第147図版 SH02 中央炉(南から)



- 1. 始黄褐色粘質シルト
- 2. 反そじり始黄褐色粘質土
- 3. 始黄褐色粘質土

第148図 SH02 中央炉 実測図



第149図 SH02の出土遺物

番号	器種	口径	底径	器高	形態・手法の特徴	胎土	色調	残部
141	土師器/杯	13.2	7.0	5.6	内・外縁ナデ	砂/多	橙色	1/8

SH03 (第139・150・151・153図、第152図版)

調査区の中ほど東端で検出された平面長方形を呈する建物で、西辺の中央にカマドをもつ。

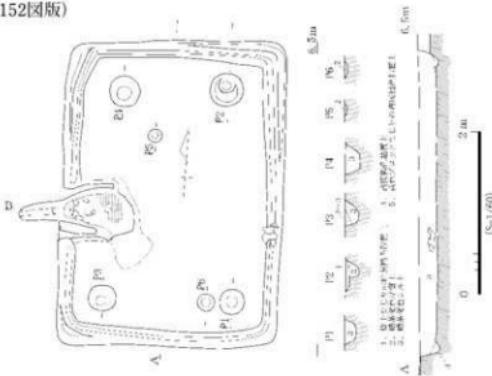
規模は、内法で東西2.28m、南北3.36m、床面積7.51m<sup>2</sup>を測る。床面の高さは6.18mである。

主柱は4本からなる。柱穴は直径30cm～40cmの正円形で、深さ14cm～18cmを測る。P2が2段掘りとなる。柱間間隔は東西が1.26m～1.62mの平均1.44m、南北が2.65m～2.57mの平均2.61mを測る。

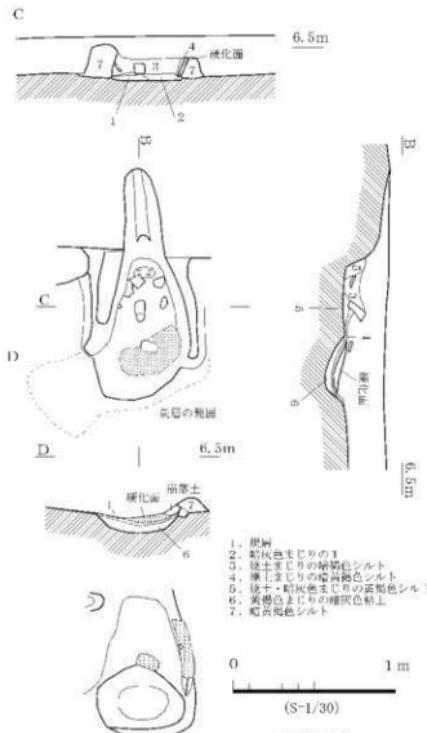
カマドは煙道部分も残されていた。煙道は、長さ51.5cm、幅23.5cm、深さ5.7cm。本体の内法49.5cm×86.9cm、高さ20cm余りを残す。赤く変色した被熱面がカマドの焚き口付近と奥壁、北側の袖で認められたほか、カマドの手前には炭層が広がっていた。また、カマド内にも炭層は



第152図版 SH03  
掘り上がり(上)・カマドの検出状況(下)



第150図 SH03 平面図・断面図



第151図  
SH03 カマド実測図

認められ、その上部では堅く焼き縮まった硬化面が残る。

遺物は、カマド内と、東辺際から土器が出土しているほかに、カマドの中央には支脚としていた自然石が置かれたままにあった。また、SH03とSH04のサブレンチから筋鍤車が出で、その出土位置を押さえることはできなかったが、SH04はほとんど覆土を持たなかつたことからSH03にともなうものと判断した。

番号	器種	口径	底径	器高	形態・手法の特徴	胎土	色調	
142	須恵器/杯身	10.1	6.0	4.6	内面ヨコナデ、外面ヨコナデ/ヘラケズリ	砂/少	青灰色	1/4
143	土器器/杯	15.0			内・外面ヨコナデ?	砂/多	褐色	1/3
144	土製筋鍤車	4.8	5.9	1.9	ナデ	砂/多	明褐色	完形

第153図 SH03の出土遺物

#### SH04 (第139・154図、第155図版)

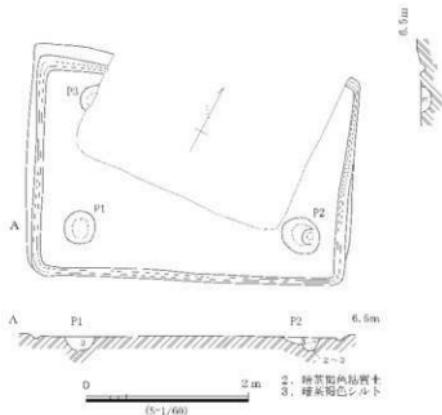
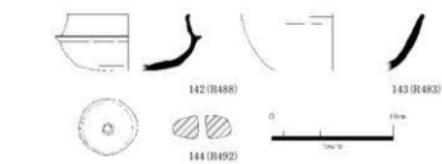
調査区中ほどの東端で検出された平面長方形を呈する建物である。SH03と重複しており、平面の1/3程度が消滅している。

規模は、東西壁がやや崩れていたものの、壁帶溝が明確に残り、その内法で東西3.7m、南北2.40mの長方形となる。床面積は約8.8mとなる。床面の高さは6.34m～6.38mである。

主柱は4本からなるが、そのうちの1本はSH03により消滅し、P3も1/2が残るのみである。柱穴はP1が直径40cm前後の円形で、深さ17cm、P2が40cm～50cmの楕円形で、深さ16cmを測る。P2は2段掘りで、10cm以下の木柱となる。柱間隔はP1・2間が2.83m、P1・3間が1.59mを測る。

火廻は、SH03が重複するため検出できなかつた。カマドであれば北辺の中央に、炉であれば建物の中央に築かれていたものと思われる。

遺物は、覆土の厚みがほとんどないことからごくわずかしか出土していない。土器器の甌で疑回線をもつものがあり、住居にともなうとすれば古墳時代前期前半の住居と考えられる。



第154図 SH04 平面図・断面図



第155図版 SH04 挖り上がり(南から)

SH05 (第139・156・160図、第157~159図版)

調査区の中ほど東端で

検出された平面長方形を呈する建物である。SH03と重複しており、平面の1/10程度が消滅しているほか、大溝によって東隅、試掘トレーニによつて北辺の一部も破壊されている。

規模は、内法で東西4.06m、南北4.28mの長方形となる。床面積は約16.4 m<sup>2</sup>となる。床面の高さは6.21m~6.26mである。

主柱は2本からなる。

P 1は、直径40cm前後

のほぼ円形で、深さ48cmの掘り込みである。土層断面では柱痕跡が認められる。柱穴を掘り上げた後、黄灰色粘質土で高さ調整をして直径10cm前後の木柱を立てている。

P 2も直径35cm~40cmの楕円形で、深さ33cmの掘り込みである。こちらも柱痕跡が残されており、直径10cm前後の木柱となる。柱間隔は1.33mを測る。

火廻は検出されていない。しかし、柱間より西側では、約2mの範囲で焼土や土器、炭の散布が多く認められた（第158図版）。また、炭化した木材も検出された。この2m範囲の土層を除去し、その下にあるかもしれないがの検出を行ったが、その痕跡は認められなかった。のことから、SH05では火廻をもたない建物と考えている。

建物の廃棄にあたって、片付けの焼成を行つたものと思われる。

遺物は、土師器が100ほど出土しているが、床面からは皆無に近い。図化した145も床面から浮いた状態で検出されている。



第156図 SH05 平面図・断面図



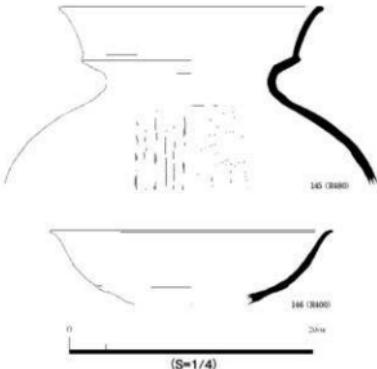
第157図版 SH05 掘り上がり(南から)



第158図版 SH05 土層断面



第159図版 遺物(145)出土状況



第160図 SH05の出土遺物

## 2 掘立柱建物群（第139図）

調査区全体で5基の掘立柱建物が検出された。SB02と05が単独、SB01・03・04が重複している。

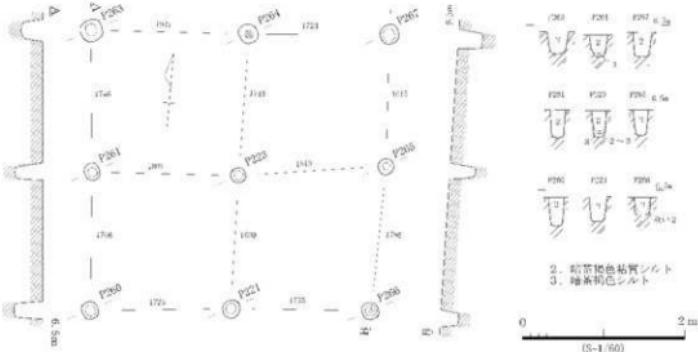
5基のうち、総柱建物が2基（SB01・02）であり、残りは側柱建物である。

### SB01（第139・161図、第162図版）

調査区の中央で検出された2間×2間の総柱建物である。南西約1mにSB05が、北約2.4mにSB02があり、南東に重複してSB04が確認されている。

その規模は、東西方向で3.46m～3.67mの平均3.58m、南北方向で3.38m～3.45mの平均3.49mを測る。東西方向にわずか長い建物である。床面積は12.20m<sup>2</sup>となる。

柱穴9本は、直径20cm前後の円形で、深さ36～59cmと深く掘り込まれている。標高5.90～6.05mが



第161図 SB01 平面図・断面図

底面の高さとなる。

各柱間寸法は、東西方向で1.72m～1.95m、南北方向で1.62m～1.79mと20cm程度のばらつきが認められる。

遺物は、P221・260・264・265・266から、土師器の小片が数点ずつ出土したが、いずれも図化できるほどではなかった。

#### SB02（第139・163図、第164図版）

調査区の北部中央で検出された2間×2間の総柱建物である。SB01が南約2.4mで、SB03が北約1mに位置している。

その規模は、東西方向で3.35m～3.51mの平均3.43m、南北方向で3.62m～3.83mの平均3.72mを測る。南北方向に少し長い建物である。床面積は12.66m<sup>2</sup>となる。

柱穴9本は、径20cm～30cmの円形ないし稍円形で、深さ15～25cmと浅い掘り込みである。標高6.14～6.27mが底となる。

各柱間寸法は、東西方向で1.65m～1.80m、南北方向で1.84m～1.93mと10～15cm程度のばらつきが認められる。

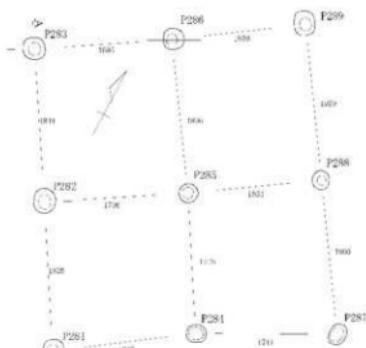
遺物は出土していない。



第164図版 SB02 挖り上がり(東から)



第162図版 SB01 挖り上がり(東から)



1. 総柱間色點賀シルト～シルト



第163図 SB02 平面図・断面図

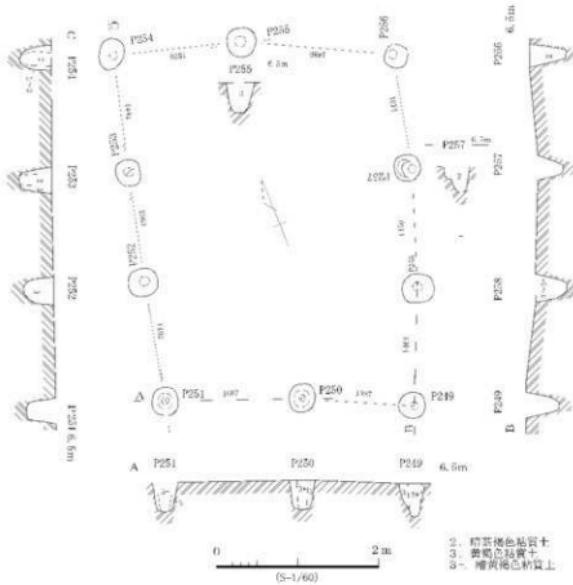
SB03 (第139・165・167図, 第166図版)

調査区の北端で検出された2間×3間の側柱建物である。南にSB02が南約1mに位置している。その規模は、桁行で4.30m～4.46mの平均4.36m、梁行で3.07m～3.49mの平均3.34mを測る。南北に長く、東向きの建物となる。床面積は14.61m<sup>2</sup>となる。

柱穴10本は、径30cm～40cmの円形で、深さ30cm～45cmと深い掘り込みで、標高5.88m～5.96mが底となる。

各柱間寸法は、桁方向で1.36m～1.49m、梁方向で1.39m～1.89mとかなりばらつきがある。

遺物は、P249・250から弥生土器、P254・258から土師器が出土しているが、いずれも小片で数点にすぎない。



第165図 SB03 平面図・断面図



第166図版 SB03 掘り上がり(南から)



第167図版 P254の断ち割り断面

SB04 (第139・169図、第168図版)

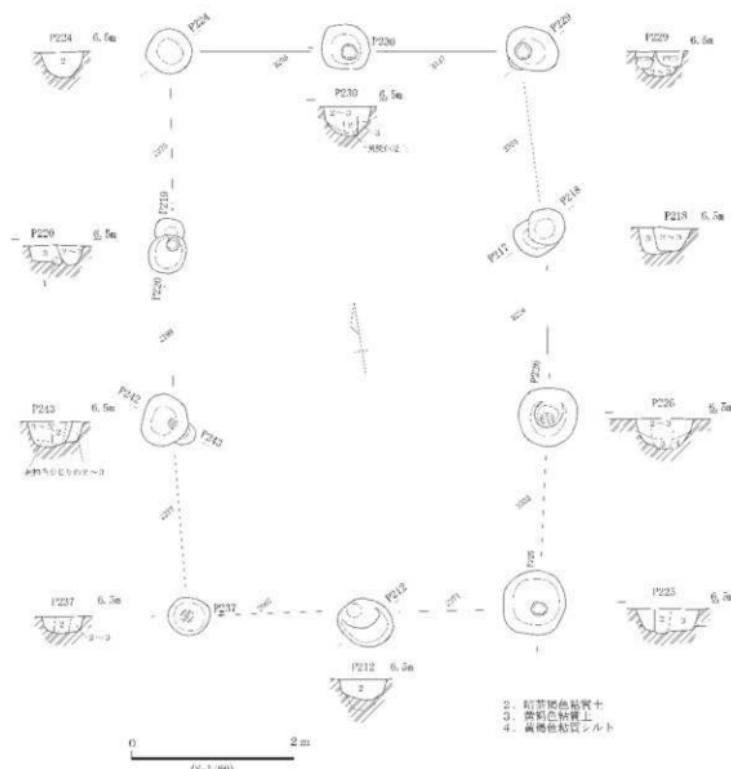
調査区の中央で出された2間×3間の側柱建物である。SB01と北西で重複している。

その規模は、桁行で6.85m～6.95mの平均6.89m、梁行で4.34m～4.61mの平均4.44mを測る。南北に長く、東向きとなる建物である。

P219とP220、P217とP218、P242とP243が重複しており、建物にともなう柱穴を新旧のどちらかに判断する必要がある。埋土にはほとんど違いがなく、その配置関係から切り合いの古いP220とP218、切り合いの新しい



第168図版 SB04 挖り上がり(南から)



第169図 SB04 平面図・断面図

P242をSB04の柱穴に該当するものとした。床面積は30.79m<sup>2</sup>となる。

柱穴10本は、径40cm～80cmとかなり違いのある円形ないし椭円形で、深さは20cm～40cmを測る。柱穴の底の高さは6.06m～6.19mを測る。

柱間寸法は、桁方向で2.20m～2.38mを測るが、中央の柱間が狭く、両側の柱間がやや広くなっている。それでみると10cmの差も認められない。反対に、梁方向では2.07m～2.27mとややばらつきがある。しかし、B地区で検出された掘立柱建物のなかでは一番均整のとれた建物である。

柱穴10本のうち5本に柱痕跡が認められる。

遺物は、P230・229・218・226・225・212・242・220から土師器が少量出土しているが、いずれも小片である。

P226から出土した土師器の高杯脚柱部には、杯部との接合位置を示すピン状の穴があけられている。

#### SB05（第139・170図、第171図版）

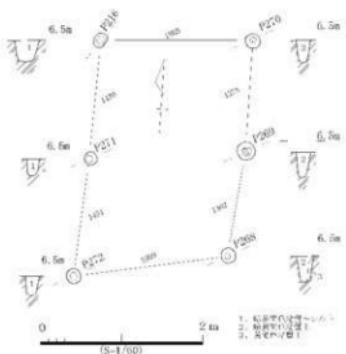
調査区の中央部、西端で検出された1間×2間の側柱建物である。北東約1mでSB01が位置している。

その規模は、桁行で2.68m～2.92mの平均2.80m、梁行で1.87m～1.93mの平均1.90mを測る。南北に長く、東向きの建物となる。床面積は5.25m<sup>2</sup>となる。

柱穴6本は、径20cm前後の円形で、深さ20cm～30cmを測り、底面の高さは6.04～6.20mである。

各柱間寸法は、梁方向で1.87m～1.93m、桁方向で1.30m～1.47mを測る。桁行にややばらつきがみられ、P272が南へ大きくずれている。

遺物は、P216と271から弥生土器か土師器か判断しにくい土器片が数点出土しているのみである。



第171図版 SB05 挖り上がり(南から)

第170図 SB05 平面図・断面図

### 3 井戸

1基のみが検出された。

#### SE01 (第172・174・179図、第173図版)

調査区の南端、竪穴住居1と3の間に位置する。

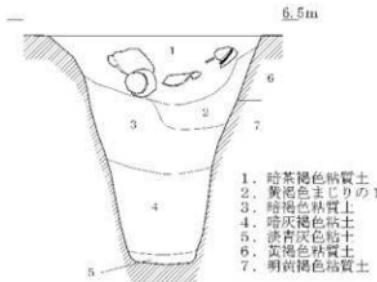
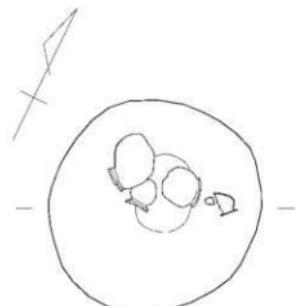
平面円形の素掘り井戸である。

その規模は、直径1.30mの正円形で、深さは1.40mを測る。井戸の底は検出面の約1/3ほどにすぼまり、標高5.0mが底面となる。

埋土は5層に分層され、深くなるほど粘質の強い粘土となっている。

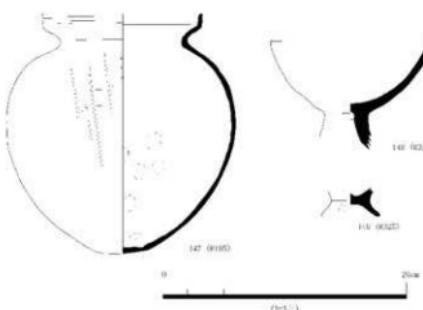
掘り込み面である黄褐色土は40cm厚さがあり、その下層は明黄褐色粘質土のかなり固い層であるが深く掘り込んでいる。

遺物は、最終の堆積層である1層から集中して出土している。大部分は土師器で、しかも完形を含んでいる。ほかには製塙土器が数点出土している。また最下層の5層からは桃の種が出土している。



0 1 m  
(S-1/30)

第172図 SE01平面図・断面図



第173図版 SE01 遺物出土状況(南から)

番号	器種	口径	底径	器高	形態・手法の特徴	胎土	色調	残部
147	土師器/甕	13.1	4.0	19.6	内面ヨコナデ/ケズリ/押圧、外面ヨコナデ//ハケ/ミガキ	砂/少	褐色	完形
148	土師器/高杯	13.2			内・外面ヨコナデ	砂/少	橙色	完存
149	製塙土器		4.6		内・外面ナデ	砂/多	明褐色	完存

第174図 SE01の出土遺物

#### 4 溝

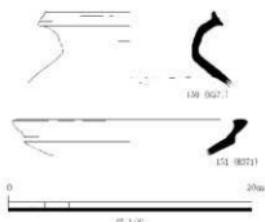
溝は、大小の溝が各1条ずつ検出された。

##### SD301 (第176・177・179図、第175図版)

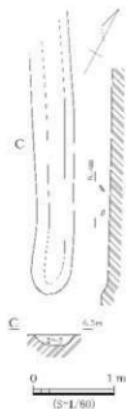
調査区の中央部、西端で検出された南北方向の溝である。

規模は、長さ3.45m以上、幅0.45m～0.5m、深さ14cmを測る。溝底の高さは6.29m～6.34mと、北に向かって下がっている。

遺物は、溝底より浮いた状態で弥生土器が少量出土した。



第175図 SD301  
掘り上がり(南から)



第176図 SD301  
平面図・断面図

番号	器種	口径	底径	器高	形態・手法の特徴	胎土	色調	残部
150	弥生/壺	13.8			内面ヨコナデ/ケズリ、外面ヨコナデ	砂/多	赤橙色	1/2
151	弥生/高杯	19.2			内・外面ヨコナデ?	砂/多	赤橙色	1/8

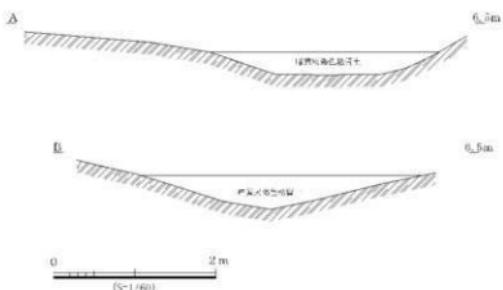
第177図 SD301の出土遺物

##### SD304 (第178・179図)

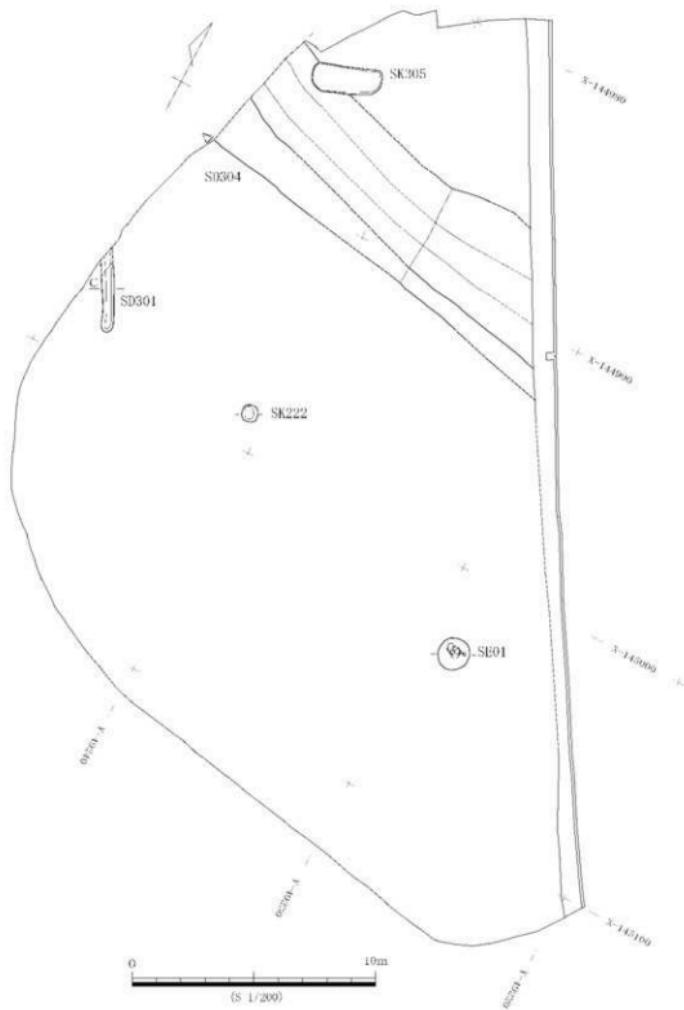
調査区の北部で、東西方向に検出された溝である。

規模は、長さ17m以上、幅4.40m～5.40m、深さ30cm～40cmを測る。溝底の高さは5.77m～5.86mとなる。

遺物は、弥生土器が数点と表面の残ったサヌカイト1点である。



第178図 SD304 平面図・断面図



第179図 B地区下層 井戸・溝・土坑の配置図

## 5 土坑

土坑は、わずかに2基が検出されたにすぎない。

### SK305 (第179・180図)

調査区の北端に位置する。SD304に切り込んだ平面長方形の大型土坑である。

その規模は、長さ2.88m、幅1.05m～1.14m、深さ37cmを測る。底の高さは5.77mとなる。

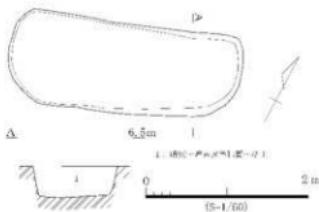
遺物は、土師器が数点、いずれも小片である。

### SK222 (第179・181図)

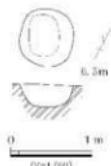
調査区の中央部に位置する。報告では土坑としたが、SB04の柱穴も同規模に近いものであることから柱穴となるものかもしれない。

その規模は、65cm～70cmの円形で、深さ27cmを測る。底面の高さは6.13mとなる。

遺物は、土師器がわずか出土したのみで、時期等のわかるものはない。



第180図 SK305 平面図・断面図



第181図 SK222  
平面図・断面図

## 6 ピット群 (第182・183図)

ピットは、竪穴住居や掘立柱建物のある範囲に集中して確認される傾向がうかがえる。おそらく建物の建て替えにあたって、同じ位置を選んだ結果と考えられる。

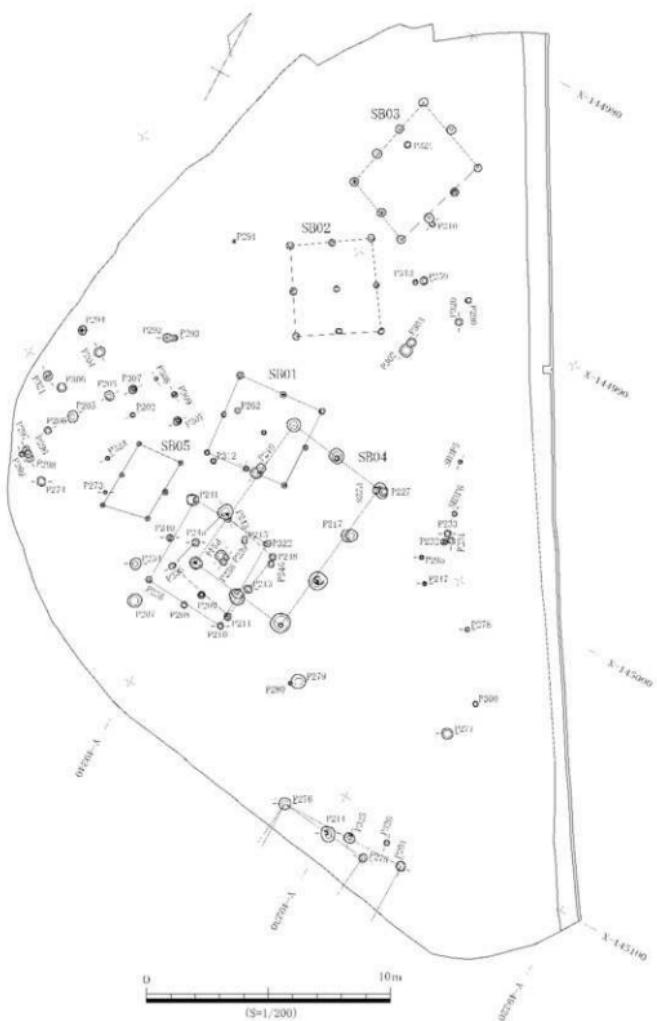
ピットは総数 基が検出され、このうち掘立柱建物として認識した5棟のほかにも、建物として推測が可能なピット群も存在する。

1棟目は、調査区の南端、竪穴住居・SB01の南側で検出したピット群のうち、P276・SH1P5・P201は、直径40cm前後、深さ20cm～30cmを測る。柱間寸法は、2.99mと2.42mと差が大きい。埋土は土層2、土層3、黄褐色～茶褐色シルトで、若干の違いが認められるものの、建物として認識できる可能性は高い。調査区外となる南側にのびる建物で、北辺が5.40mを測る2間×2間の縦柱建物、もしくは2間×3間の側柱建物となる。SH01との関係では、SH01P5が壁帶溝の掘り下げ段階で検出されており、SH01より古い遺構と考えられる。

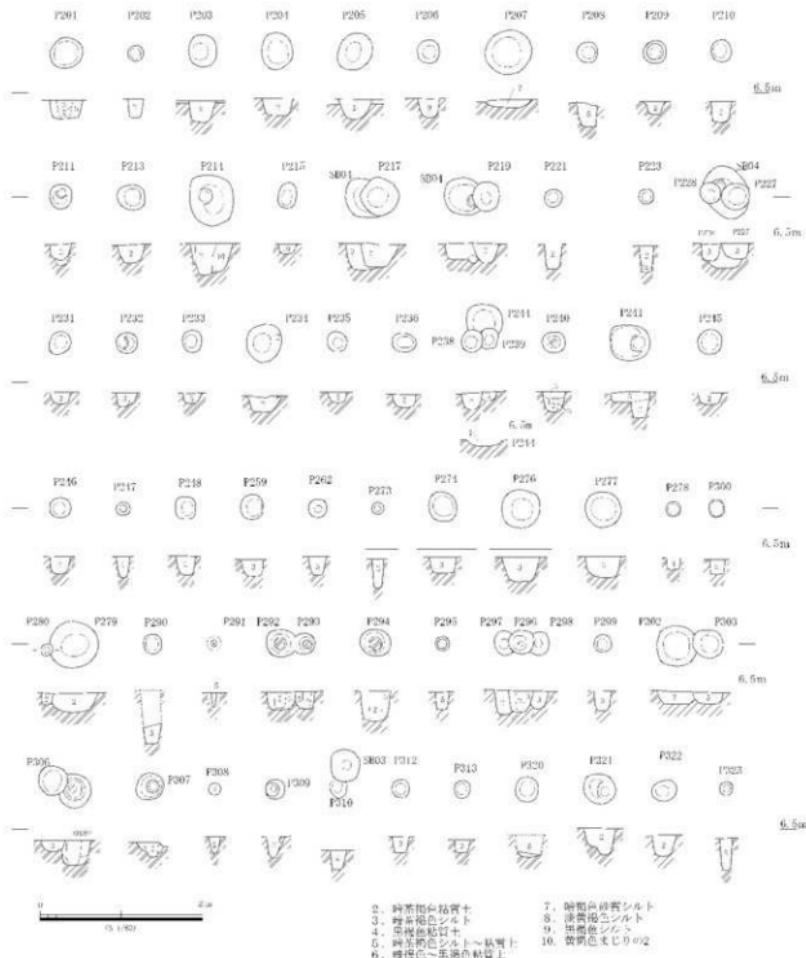
2棟目は、SB04と重複する形で、2棟の建物が推測できる。ただし共通する柱穴があることから疑問点も生じている。

そのひとつは、2間×2間の側柱建物となる。SB01と並んで南北に少し長い建物である。その規模は、南北方向3.81m～3.86m、東西方向3.43m～3.45mを測り、SB01と同規模である。しかし、2間×2間の建物は、SB02・SB03のように縦柱建物となる可能性が高く、この建物の中央の柱を調査時に検出できなかった可能性も残されているが、南北の中央柱列が四隅柱の中央に位置せず、1.50m～1.94mと差が大きいことから、確実に建物と断定するまでにはいたっていない。

もうひとつの建物は、2間×2間の縦柱建物として推測できる。SB03と同じ方向となる。その規模は、南北方向3.02m、東西方向(2.72m)～3.06mを測る。しかし、北辺の中央柱が内側に入り込んでいることや、東辺と西辺の中央柱も南側に寄っていることなどから建物として疑問がある。北西隅の柱穴が、SB04により破壊されていることから、SB04より古い建物となる。



第182図 ピット群 配置図



第183図 ピット群 平面図・断面図

このほかにも、SB02の周辺でしっかりと掘り込まれた柱穴がある。P203・P204・P205・P310であるが、建物としての復元はできなかった。柱穴は、直径40cm前後の円形で、深さ30cm前後を測る。以上、建物と推測可能な柱穴をのぞくと、P291のように杭跡と考えられるものや、掘り込みの浅いものなどが多い。竪穴住居と重複する柱穴が少ないことから、住居と建物の範囲に区別があったと考えられる。

P202は、SH02の検出段階で、その検出プランを切っているピットである。直径15cm～19cmの楕円形で深さ23cmを測る。調査中に杭を打ち込んだ跡と考えていた。しかし、SH02の調査が進み、主柱穴の検出において、その平面がぴったり重複するものであることがわかった。このことからP202としたピットは、SH02の柱穴の柱痕跡を遺構として検出したものである。SH02を検出した高さとなる6cm厚の覆土によって埋没しても、その上面で柱痕跡が検出できるということは、その柱が建物の廃棄にあたって抜き取られていないことを示している。建物はそのままに廃棄されたものか、あるいはある一定の高さで柱を切ったものかであろう。柱を途中から切る作業は当時の道具においては非常に困難なことと思われ、おそらく朽ち果てるままに放置された結果ではないだろうか。

### 3) B地区のまとめ

B地区では、上層と下層の2つの遺構面を検出した。検出した遺構から、上層は耕作地として、下層は居住地として利用していたことが判明した。

上層では、溝群が全面で検出された以外には、土坑とピットが各1基あったにすぎない。

まず、大溝の西岸を検出した。大溝は岸から深さ50cmの水平状態が2mほどつづき、そこからさらに1段深くなつた断面形態にある。この大溝には西側に幅2mの大畦が取り付いており、取水口となる溝もその上面2ヶ所で認められた。

大畦の西側には、現在の畦の方向と同じようにカーブしている周回溝が外周となり、その中に細溝群が広範囲で検出された。細溝群の方向には3方向が認められている。このうち全面で検出された細溝Aは、1間幅前後の間隔で同規模・同方向に存在している。耕作にあたって同じ作物を長期間作付けしたことから生じたものであろう。

下層では、竪穴住居、掘立柱建物、溝、土坑、井戸、ピットが検出された。

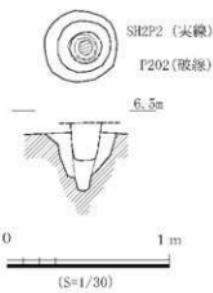
竪穴住居は、いずれも方形で、建物中央に炉をもつものが1軒、北辺・西辺にカマドをもつものが2軒、不明が2軒である。不明のうちSB04は出土遺物から古墳時代前期と推測され、中央炉となる可能性が高い。

掘立柱建物は、確実なものが5棟である。2間×2間の総柱建物と、2間×3間の側柱建物、1間×2間の側柱建物となる。

竪穴住居と掘立柱建物は重複しておらず、それぞれの建物の建築範囲があらかじめ決められていたものと推測される。竪穴住居が5軒、掘立柱建物が5棟と同数であることから、住居1軒に、建物1棟が付随したものと推測が可能である。

土坑は2基、溝は2条と少ない。B地区が住居地域として認識されていた結果と考えられる。

井戸は1基であった。A地区の5基に比べると格段に少ない。



第184図 ピットの重複  
(P202とSH02P2)

### 第3節 C地区の調査記録

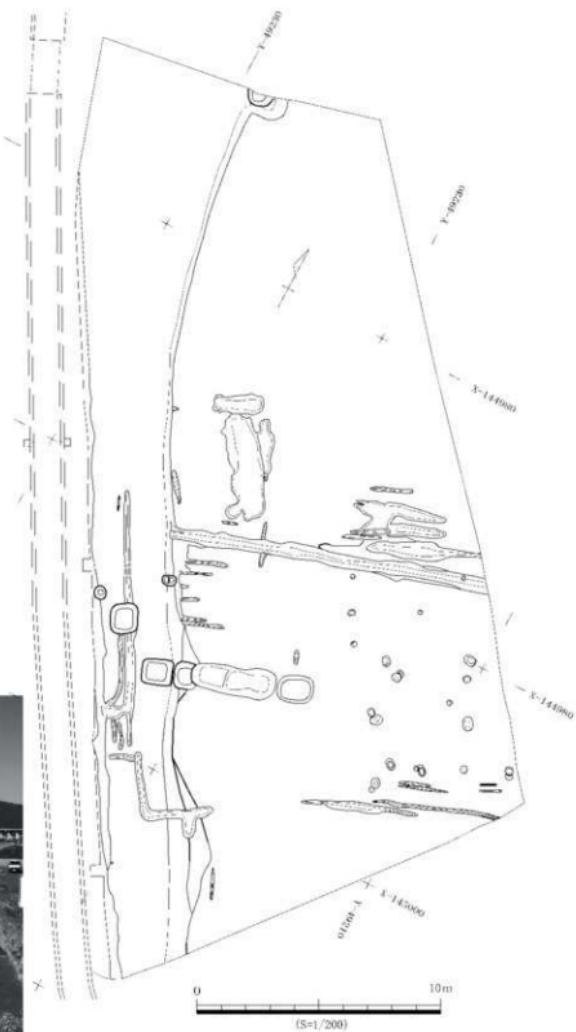
C地区は、B地区同様に竪穴住居、掘立柱建物、溝、土坑、ピットが検出され、集落を構成していることが判明した。

#### 1) C地区上層

上層で検出した遺構は、溝・土坑・ピットである。いずれも調査区の中央部～南部に集中する傾向にある。



第185図版  
C地区上層遺構 全景(南から)



第186図 C地区上層 遺構全体配置図

# 1 溝

大溝 (第187・190図、第188・189図版)



第187図 大溝 平面図

調査区の西端に位置する。現況のコンクリートによる用水路とはば並行で南北に伸びているが、北端部においてはやや東側にその向きを変えている。

大溝はその東岸を検出し、西岸は用水路西側の調査区であるB地区においてその位置を確認している。

検出された溝幅は、南端で4.5m、中央で3.6m、北端で6.3mである。深さは南端で40cm、北端で30cmを測り、標高では南端6.23m、北端6.18mと、わずかであるが北に向かって低くなっている。試掘調査の結果からC地区の北側には低位部が存在し、大溝は現行水路と逆の流れにあった可能性が推測される。しかし、現行水路の下には断面Cにおいて西に向かって下降する落ち込みが確認された。その埋土は青灰色の粘土系であることから旧用水路となる可能性が高く、溝の時期によっては現行同様に南へ向かった流れにあったものと思われる。

また、断面A～Cにおいて土層3とした淡灰色粘質土と土層5の黄灰褐色粘質土は盛土状になっている。現状では高さ25cmを測る。土層4により溝の深い部分が埋没した後、同規模の溝として再掘削するのではなく、溝幅を狭めて掘削したために築かれた護岸堤防と考えられる。これにより残地を可耕地化したものであろう。

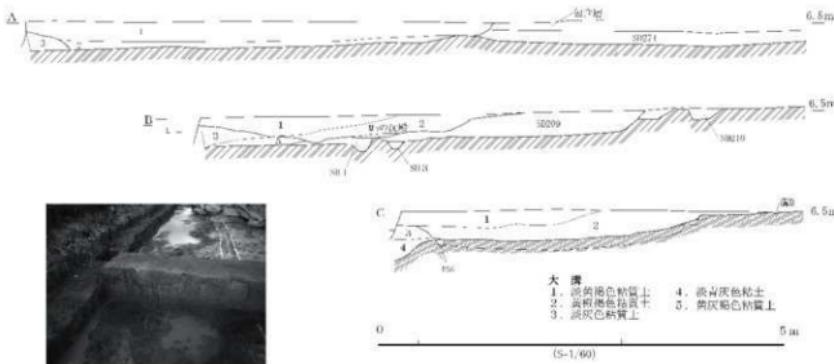
遺物は、150点ほど出土している。弥生土器、土師器、須恵器、土師質土器、備前焼、陶器、白磁、青磁であるが、いずれも小片にすぎない。ほかに、鉄滓や



第188図版 大溝 全景(南から)

サヌカイト片も出土した。

最も古い時期の遺物は錐の破損と考えられるサヌカイト片で、中期の弥生土器片が出土していることから、同時期のものと判断される。最も多く出土した遺物は土師器である。ほかに間隔のあいたスリ目をもつ備前焼のすり鉢片や、玉縁の口縁をもつ白磁片も出土している。



第190図版 大溝 断面C

東西溝 (第192図、第191図版)

調査区の中央部に位置する。調査区を南北に区画するように、東西方向で直線的に検出された溝である。その規模は、西側の断面Aで幅54.6cm、深さ11cm、東側の断面Bで幅63.6cm、深さ10.5cmを測る。溝底の標高は断面A・Bいずれも6.4mと高低差は認められず、取水用か排水用かの判断はできなかった。埋土は明黄褐色シルト。

溝は、大溝の上面で確認されなかつたので、大溝が埋没した後に掘削されたものではない。大溝の存続期間中か、大溝の掘削以前に開削・利用されたものである。大溝の掘削以前であればB地区へ続いている溝であるが、B地区では検出されていないので、大溝以前の溝となる可能性は低い。溝の埋土は細溝群と同じで、その方向も同一になることから、溝の開削・利用は大溝の存続期間中、それも川幅を狭めるために堤防構築を行った時期以前に機能していた溝と考えられる。

遺物は出土していない。

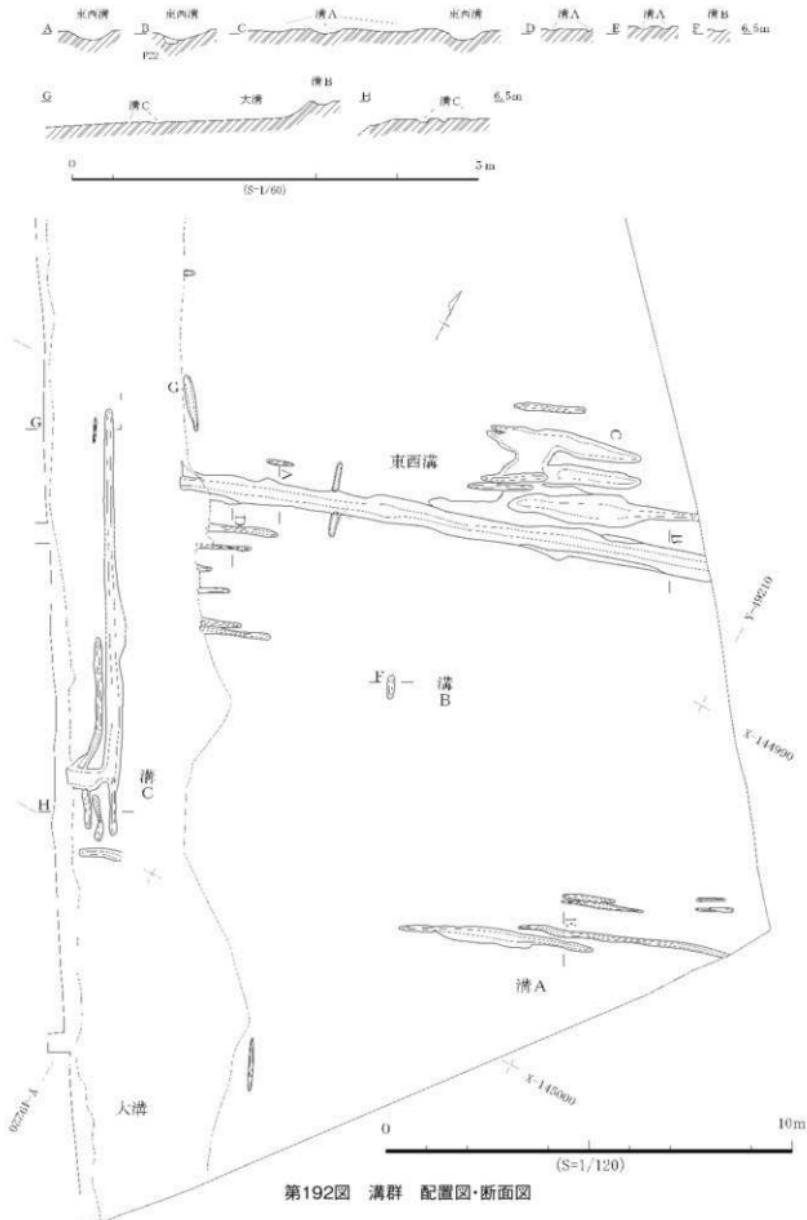
細溝群 (第192・193図、第191・194図版)

調査区の中央部～南部に位置する。B地区上面と同じ細溝群であるが、検出した条数はごくわずかである。報告では、東西方向の細溝群を溝A、南北方向の細溝群を溝B、その中間を溝Cとしているので、C地区ではそのうちの溝Aと溝Bが認められ、さらに溝Bのうちで大溝内にあるものを溝Dとした。

第189図 大溝 断面図



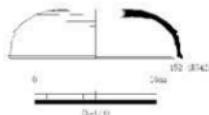
第191図版 東西溝・溝A (東から)



第192図 溝群 配置図・断面図

溝Aは、東西溝を境に、北と南でそれぞれ確認されている。北区画にある細溝は、長さ0.7m～4.7m以上で、幅は断面Cで40cm～75cm、深さ4cm～6cmを測る。標高では6.48m～6.50mとなる。南区画の細溝も、長さ0.7m～4.8m以上で、断面D・Eで幅6cm～16cm、深さ2cm～3cmを測る。溝底の標高は6.47m～6.57mとなる。この溝Aは、いずれも東西溝と方向を同じくし、埋土も酷似しており、同時期のものと考えられる。

遺物は、東西溝の北側にある溝Cから出土している。1点を除いていずれも小片にすぎない。150は下層遺構からの混入である。口縁端部の段や稜線はシャープであり、天井部のヘラケズリも広い範囲で丁寧に施されている。



番号	器種	口径	底径	器高	形態・手法の特徴	胎土	色調	残部
150	須恵器杯蓋	14.2		4.0	内面ナデ、外面天井部ヘラケズリ	砂・少	淡青灰色	1/4

第193図 細溝Aの出土遺物

溝Bは、わずか4条が検出されたにすぎない。溝Aの方向に対して直交する方向で、その長さは2m以下と溝Aよりも短い。断面F・Gで幅17cm～23cm、深さ2cm～4cmを測る。標高では6.51m～6.53mである。東西溝に切られており、溝Aに先行するものと判断される。

遺物は、土師器、土師質土器がわずかに出土したのみである。口縁部が肥厚する土師質土器の椀があるが、法量は計測できない。

溝Dは、大溝の底面で検出されたものである。南北方向に狭い間隔で存在し、それらの溝群をつなぐように東西方向の溝が接続している。断面G・Hで幅5cm～21cm、深さ1cm～5cmを測る。溝底の標高は6.21m～6.27mである。大溝の中央溝に排水した溝で、東西溝が廃止された後に利用された溝である。

遺物は出土していない。



第194図版 大溝内の溝D(南から)

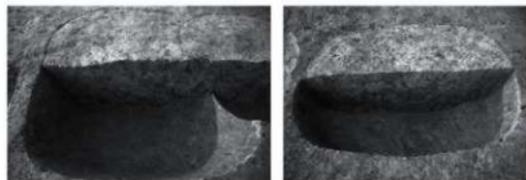
## 2 土坑

12基を検出した。調査区の中央部から南部の西側にあって、東側には存在しない。

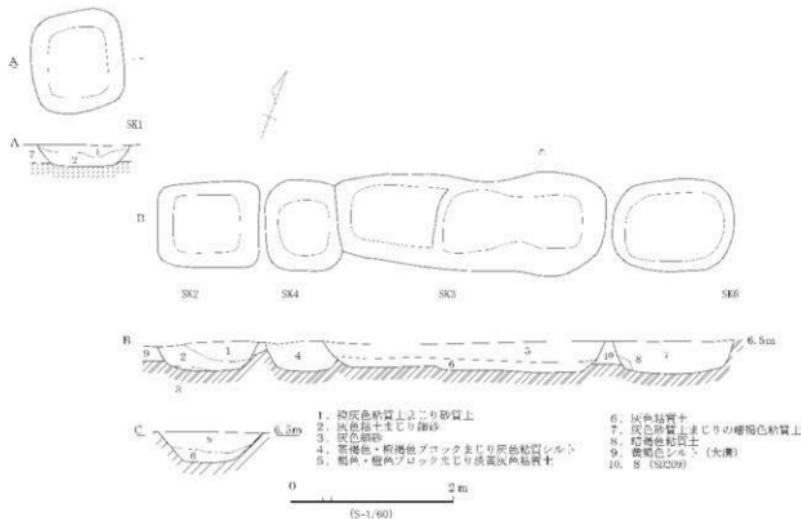
### SK 1～4・6 (第196・198図、第195図版)

大溝の中ほどから東岸にかけて検出された土坑群で、土坑1が1.2mほど離れているほかは、土坑2～4・6が直線的に連続して掘り込まれている。切り合い関係も認められる。

平面形は、土坑3が長方形となるほかは、ほぼ正方形に近い。その規模は、土坑3が長さ3.4m、幅1.2m、深さ40cmで、そのほかは一辺100cm～120cm、深さ25cm～40cmである。底面の標高は6.17m～6.24mとなる。埋土にはそれほどの違いはない。おそらく土坑3も正方形の土坑が3つ重なったものと考えられる。



第195図版 土層断面(左SK4とSK3,右SK6)



第196図 土坑1~4 平面図・断面図

遺物は、SK 2 から土師器、SK 3 から土師器・土師質土器、磁器、SK 4 から陶器と磁器、SK 6 から須恵器、陶器、土師質土器が出土している。いずれも少量かつ小片以下であり、陶器と磁器を除いては下層遺構への掘り込みにともなう混入である。

これらは同じ用途に使用された土坑と推定される。埋土からは断定できないが、い草の染壺のような用途が推測される。

#### SK 5・7 (第197・198図)

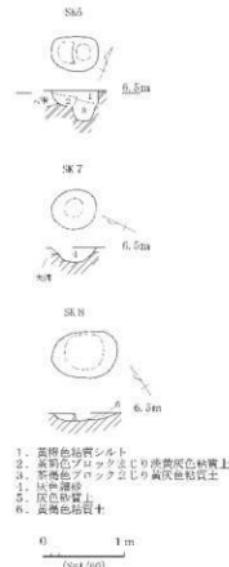
土坑1の北側に位置する。SK 5 が大溝東岸沿いで、SK 7 が西端で検出された。いずれも40cm ~ 60cmの楕円形を呈しており、ピットと判断すべきかもしれない。しかし大溝より新しい遺構であったことから、報告では土坑とする。SK 5 は深さ37cm (標高6.16m)、SK 7 は深さ13cm (標高6.37m) を測る。

遺物はSK 5 から土師器と鐵滓が各1点出土している。

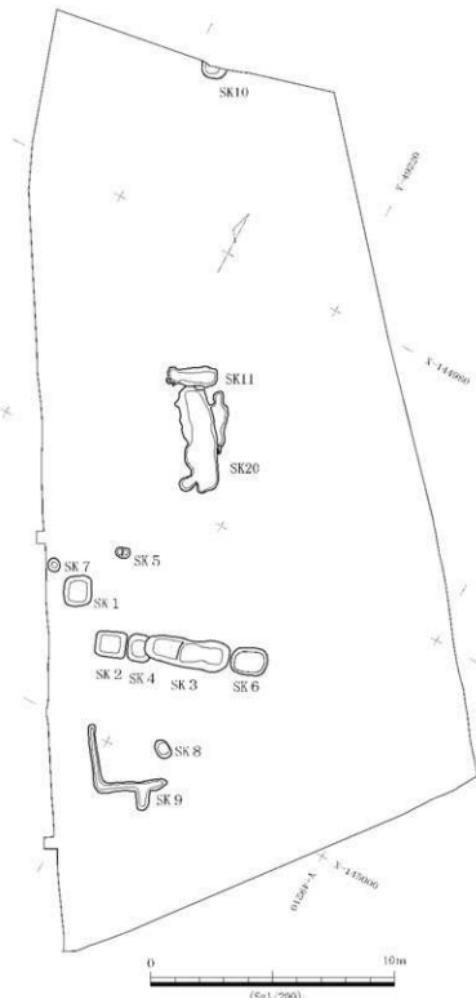
#### SK 8 (第197・198図)

土坑2 ~ 6 の南で検出された。59cm × 82cm、深さ10cm (標高6.40m) を測る卵形の浅い土坑である。

遺物は、陶器が1点のみである。



第197図 土坑5・7・8  
平面図・断面図



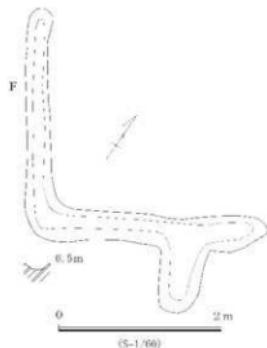
第198図 土坑群 配置図

### SK 9 (第198・199図)

土坑8の西側で検出された細長い土坑である。細溝AとBが接続したようなL字形で、溝と判断すべきかもしれない。しかしその埋土が土坑3と同じく淡黄灰色砂質土で、大溝を切っている遺構であり、細溝の時期とは異なるため、報告では土坑とした。

長さは南北に3.75m、東西に2.98mで、幅は25cm～50cm、深さは7～10cm（標高6.44m～6.47m）を測る。

遺物は、摩滅した土師器の小片が1点で、大溝に掘り込んだことによる混入と判断した。



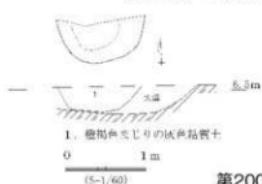
第199図 土坑9 平面図・断面図

### SK10 (第198・200図)

調査区の北端で検出された。大溝が埋没した後に掘り込まれた遺構で、平面の1/2が調査区外となっている。

その規模は直径1.04mを測る。掘り込みの深さは約30cm（標高6.23m）となる。

遺物は、瓦質土器の小片が1点である。



第200図 土坑10 平面図・断面図

SK11・20 (第201図)

調査区の中ほどで確認された不整形の浅い土坑というか、落ち込みである。

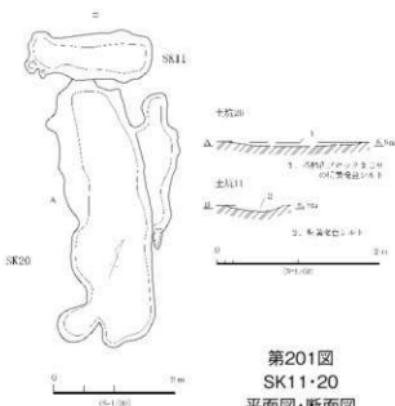
SK11が $0.8m \times 2.0m$ 、深さ 5cm (標高6.49m)、SK20が $2.2m \times 4.4m$ 、深さ 8cm (標高6.47m) を測る。

遺物は、SK11から土師器の小片が2点である。

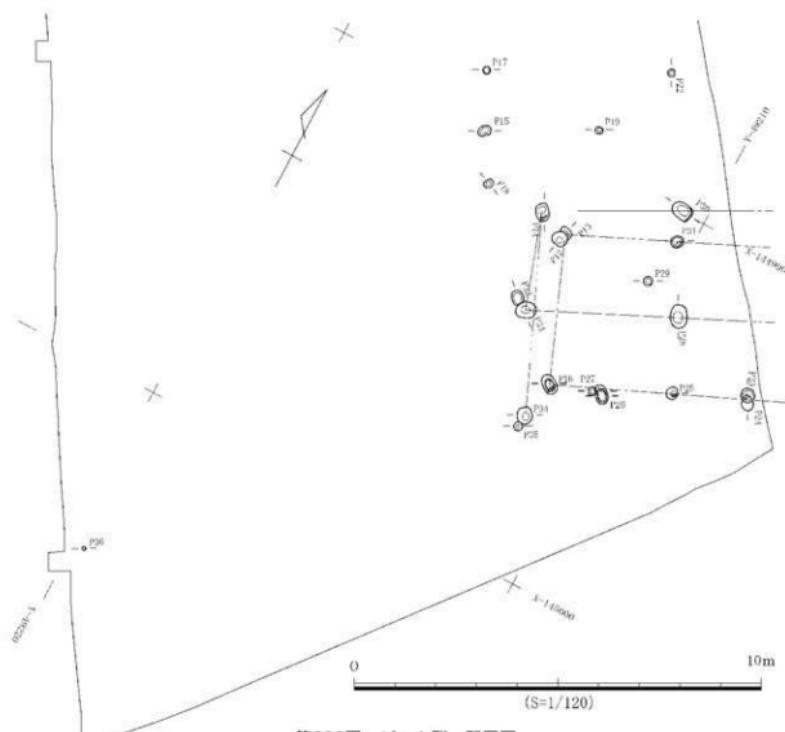
3 ピット (第202・204・205図、第203図版)

調査区の南部、それも東南隅に集中して検出されている。検出数はわずかに23基である。

平面形は、円形や楕円形で、その規模は直径10cmに満たないものから40cm×60cmの土坑と呼べるようなものまである。掘り込みの深さも10cm



第201図  
SK11-20  
平面図・断面図



第202図 ピット群 配置図

に満たないものから40cmまであり、掘り込み底面の高さでも6.12m～6.47mとかなりの差が認められる。

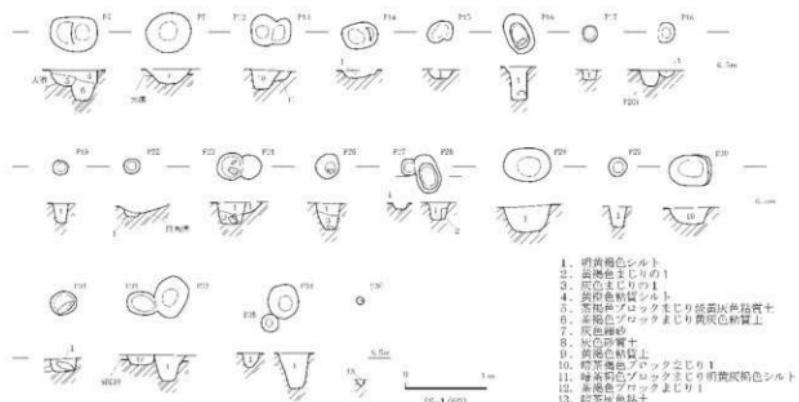
遺構の重複は、P22で東西溝と、P12とP13、P23とP24、P26とP27である。P22が古く、P12・23・26がそれそれぞれ新しい。

埋土は土層1とした明黄褐色シルトが多く、つづいて土層3の灰色まじりや土層2・10・12のブロックまじりとなる。

P36のみ単独に離れた位置にある。大溝の底で検出されており、護岸堤防にともなう杭と考えられる。



第203図版 ピット群 全景(南から)



第204図 ピット群 平面図・断面図

P36以外のピット群は、まとまった位置にある。P16・23・31からは石が出土しており、柱の根固めであろうか。さらにP25・26・33・34もしっかりと掘り込まれているピットである。調査時点では掘立柱建物としての判断はできなかったが、P14-30-28-33と、P16-13-31-25がそれぞれ長方形の配列となり、東の調査区外につづくものと仮定して1間×2間の建物とするとき、2.56m×7.2mと3.66m×5.94mの東西棟となる。あるいはP14-30-28-33にP34をつないだ南北棟や、P23・26間で梁間3.58mの南北棟とする建物の想定も可能である。しかし、それぞれの埋土が微妙に異なっていることもあり、積極的に建物としての認識はしていない。ただし、しっかりとしたピットが集中していることからも、ここに建物が存在していたことは間違いないものと判断している。

ピットとともに出土遺物は、P25から土師質土器の小皿が1枚出土した。

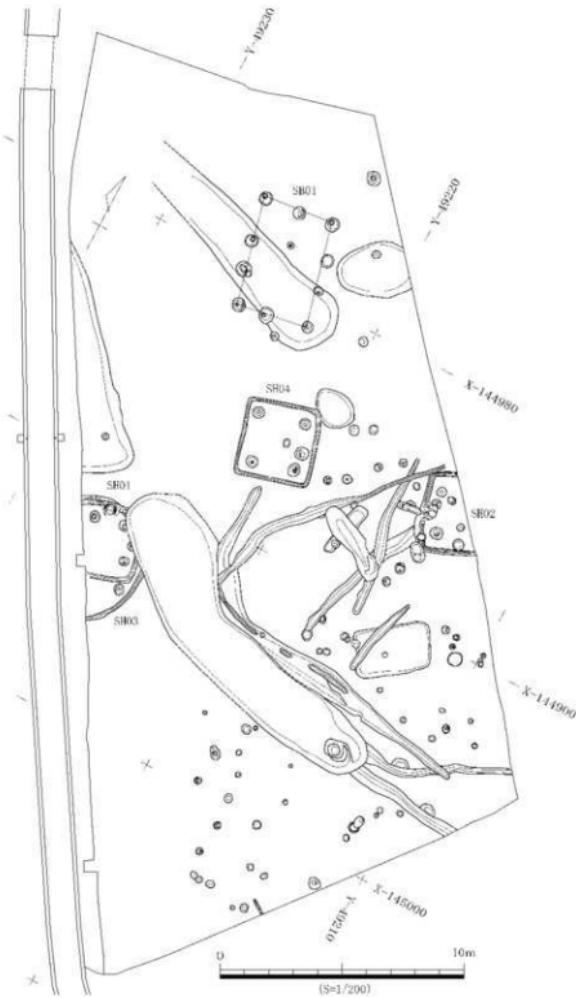
番号	器種	口径	底径	器高	形態・手法の特徴	胎土	色調	残部
153	土師器/杯	9.0	4.0	2.2	内・外面ヨコナデ	砂/多	淡褐色	1/2

第205図 P25の出土遺物



## 2) C地区下層

下層で検出した遺構は、竪穴住居群・掘立柱建物・溝・土坑・ピットである。



第206図 C地区下層 遺構配置図

## 1 壇穴住居群

4基を検出した。円形が1、方形が3である。いずれも調査区の中央部に位置している。

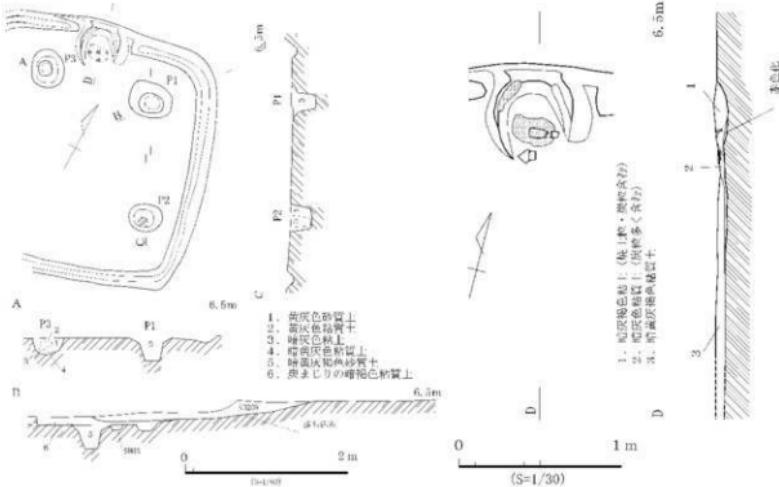
### SH01 (第206・208・209図、第207図版)

中央部西端で検出された平面方形の建物で、その2/3程度の確認ができた。しかし、大溝により建物の掘り込みの大部分が削平され、壁の立ち上がりは10cmにも満たない。わずかな焼土や炭粒の散布から、炉ないしカマドの可能性を疑い精査したことで検出できたように土層はグライ化した状況であった。

建物の規模は、南北方向で3.19m、東西方向でカマドの位置を北辺の中央に仮定して復元すると3.25mとなる。ほぼ正方形の建物と想定される。推定される床面積は約7 m<sup>2</sup>で、床面の高さは6.15m～6.22mである。主柱は3本が検出され、直径40～45cm前後の楕円形で、深さ25cm前後を測る。柱痕跡はP2で確認でき、P1・3も2段掘りとなることから柱痕跡に近い様相を呈していると推測される。このことから12cm前後の木柱を使用したものである。柱間間隔はP1-2間が約1.48m、P1-3間が約1.37mと大きな差はないが、3本の位置関係についてはP2が壁帶溝に近く掘り込まれており、直角とならず南に開いた形態となる。この状況で残る1本の主柱の位置を復元するとその柱間は約2mで復元され、建物への出入口として南側列の柱間を広くして設置したことがうかがえる。

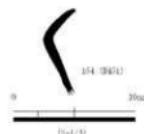


第207図版 SH01 挖り上がり(東から)



第208図 SH01 平面図・断面図

遺物は、土師器、須恵器、須恵質土器が少量出土しているが、図化できたのは154の小片のみである。



番号	器種	口径	底径	器高	形態・手法の特徴	胎土	色調	残部
154	土師器/甕				内面ヨコナデ/ケズリ、外面ヨコナデ	砂/多	淡褐色	1/10

第209図 SH01の出土遺物

SH02 (第206・211・213図、第210図版)

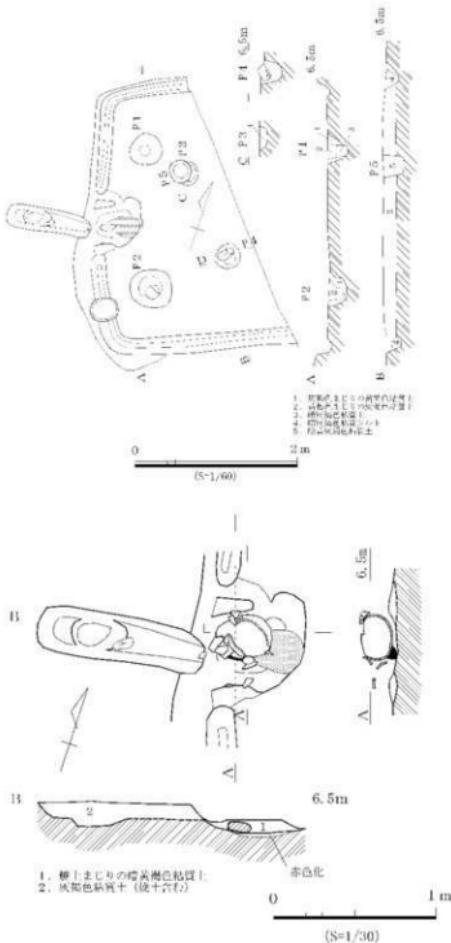
中央部東端で検出された平面方形の建物で、その1/2程度が確認できた。西辺の中央にカマドがある。

建物の規模は、内法で南北方向が2.96m、東西方向が現況で2.3mを測る。調査区外に続いていることから、正方形か長方形かの判断はできなかったが、正方形と仮定すると床面積約7.7m<sup>2</sup>となる。床面の高さは6.36mである。主柱は4本のうちの西側2本が検出できた。柱穴の直径は40cm～50cm前後の円形で、深さは21cm～25cmを測る。また柱痕跡も確認でき、14cm前後の木柱を使用したと推測される。柱間隔はP1～2間で1.74mを測る。

カマドは、煙道が長さ100cm、幅30cmで、深さは10cmを測る。底面の傾斜は1度とわずかであるが、なかほどより西では深さ5cmの凹みが残され、その斜面では被熱により赤色に変色した部分を確認することができた。おそらく煙出しにともなう凹みと思われる。カマド本体は内法32cm×44cm、高さ5cmが残る。底面で被熱面が大きく認められた。



第210図版 SH02 掘り上がり(南から)

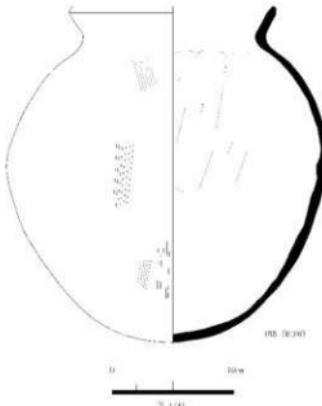


第211図 SH02 平面図・断面図

遺物は、少量の土師器と製塙土器が出土している。155は、カマドの中央部分から口縁を西向きにして横倒しの状態で出土している。その下には支脚である石も置かれたままであり、住居の廃棄時にカマドに据えられたままにされたものである。



第212図版 SH02 土器出土状況(南から)



番号	器種	口径	胴部径	器高	形態・手法の特徴	胎土	色調	残部
155	土師器/甕	16.5	26.8	27.4	内面ヨコナデ/ケズリ。外面ヨコナデ/ハケ/ナデ	砂/多	淡褐色	1/2

第213図 SH02の出土遺物

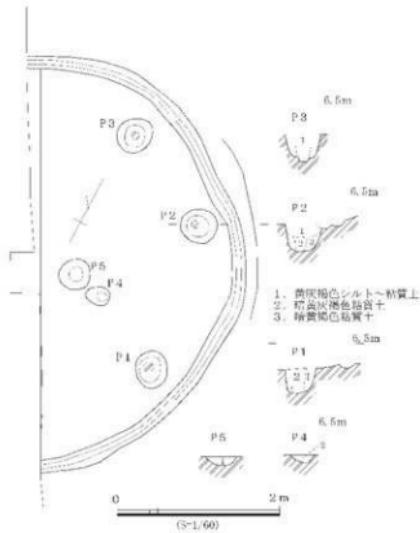
### SH03 (第206・215図、第214図版)

中央部西端、竪穴住居1と重複して検出された平面円形の建物で、その1/2程度の確認ができた。SH1と大溝によって掘り込みの大部分は削平され、壁の立ち上がりは5cm以下である。また、床面も削平されているので、推定される位置で中央炉を検出することはできなかった。

建物の規模は、壁帶溝の内側で復元すると直径約4.8m、主柱径で復元すると直径約3.6mで壁帶溝までの距離平均39.6cmを足すと約4.0mとなり、かなりの差が出る。検出できた範囲がほぼ1/2と推測できることから、南北4.8mの円形と考えておく。床面積は約18m<sup>2</sup>となる。床面の高さは5.99m～6.03mである。主柱は3本が



第214図版 SH03 掘り上がり(南から)



第215図 SH03 平面図・断面図

検出され、径約40cm、深さ30cm前後を測る。さらに柱痕跡も認められ、直径10cm前後の木柱と推測される。柱間間隔はP 1 - 2 間が約1.8m、P 2 - 3 間が約1.3mを測り、大きな差が認められる。幅広であるP 1 - 2 間を建物への出入口と推測すれば、主柱の位置は9本で復元できる。調査範囲内であると2本の主柱の検出を試みたが、大溝のグライ化にともなって確認することができなかった。また、中央炉もその推定位置に竪穴住居1のサブトレーンチを設定し掘り下げを行ってしまったが、その掘削過程の中で炉となるような焼土等の散布は認められなかつた。このことからすでに消滅したものと考えられる。しかしP 5 の埋土に微量ではあるが炭を含んでいたことから、建物の中心より東に少しずれてはいるもののP 5 が炉となる可能性もある。

遺物は弥生土器が数点出土したのみである。

#### SH04 (第206・217図、第216図版)

SH 1・3とSH 2の中間地点に位置する、平面方形を呈した建物である。

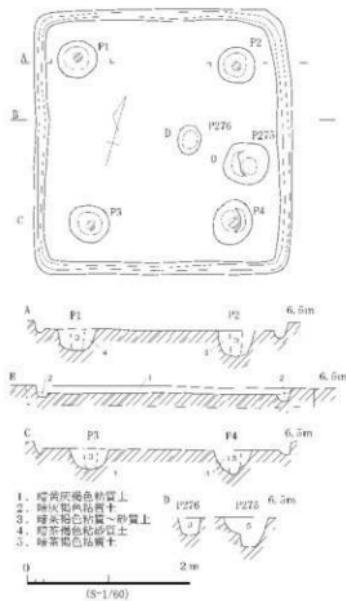
建物の規模は、壁帶溝の内法で南北2.97m、東西2.90mを測ることから一辺約3mの正方形である。床面積は8.37 m<sup>2</sup>、床面の高さは平均6.34mとなる。主柱は4本で直径45.5cm～48.8cmの少し楕円形、深さ25cm～30cmを測る。いずれも柱痕跡が認められ、直径11cm前後の木柱と推測される。柱間間隔はP 1 - 2 間が1.90m、P 2 - 3 間が1.93m、P 3 - 4 間が1.76m、P 4 - 1 間が2.1mとややばらつきが認められる。主柱のほかに東に偏った位置で柱穴を2ヶ所検出したが、いずれも建物より新しいものと判断している。また、火処については、焼土や

炭の散布がまったく認められていないことから、築かれていなかったものと考えられる。



第216図版 SH04 挖り上がり(南から)

遺物は、覆土から土師器・焼土塊・鐵滓、P 1・2から弥生土器あるいは土師器が少量出土しているが、いずれも小片であった。



第217図 SH04 平面図・断面図(1)

## 2 挖立柱建物群

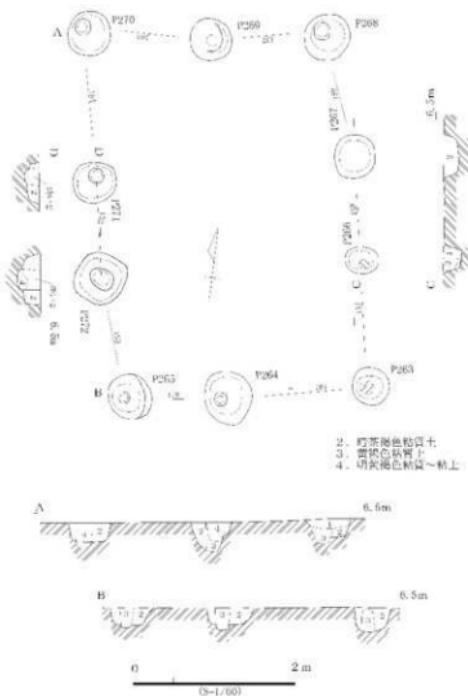
調査区の北部と南部で各1棟が検出された。

### SB01 (第206・218図、第219図版)

調査区の北部で検出された2間×3間の側柱建物である。やや菱形となった長方形を呈する。

その規模は、桁行で4.43m～4.59mの平均4.48m、梁行で2.96m～3.19mの平均3.08mを測る。南北に長く東西向きの建物となる。床面積は13.9m<sup>2</sup>である。各柱穴10本は、直径30cm～60cmの円形か楕円形で、深さ20～30cmの掘り込みとなる。溝底の高さは6.03～6.22mである。また各柱間寸法は、桁方向で1.28m～1.85mとかなりの差が認められるが、中央の柱間が狭く、両端の柱間が広いという寸法間隔となるためであり、それでみると、P270-P271間のみが25cm外方向にずれているにすぎない。対して梁方向は1.18m～1.81mとさらにばらつきが認められる。P267を除いた柱穴には柱痕跡、あるいは柱が沈み込んだことによる落ち込みが認められる。直径10～13cmの木柱が使用されたものである。

遺物は、P264～270から土師器がごくわずか出土したが、形の判明するものはなかった。



第218図 SB01 平面図・断面図



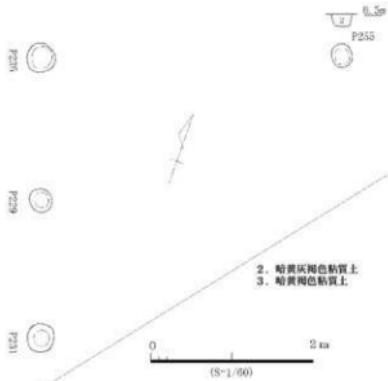
第219図版 左・SB01(P270) 右・SB01掘り上がり(西から)

SB02 (第206・220図)

南部南端で検出された側柱建物である。柱穴4本が確認され、西側の桁行で3本、東側の桁行で1本、それ以外は調査区外となっている。

その規模は桁行が3.45m、梁行が3.70mを測る。桁行の各柱間寸法は1.75mと1.71mとそろっており、しかも一直線に配置されている。しかし、梁行が桁行柱間寸法の2倍以上となり、建物とするにはやや不安が残る。柵列の可能性もある。各柱穴は直径30cm前後の円形で、深さは20cm以内である。

遺物は、P229と231から小片となった土師器が出土したのみである。



第220図 SB02 平面図・断面図

### 3 溝

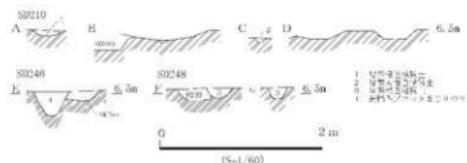
溝には、2種類が確認された。ひとつは幅の狭い溝で、もうひとつは幅広の溝である。幅狭の溝は中部～南部の東側に集中しており、しかも東西方向の溝と南北方向の溝とに細分することができる。

SD210・246・248 (第221・223・230図、第222図版)

東西方向にのびている幅の狭い溝である。調査区南部の東端から北西に向かって検出された溝であるが、調査区の中部にいたっては2条が直角に折れ曲がり、北方向へのびた溝となっている。SD209に切らされているため、SD210がその1条であるが、残る1条がどれに相当するかは確定できず、SD210が時期差で2条となったようにも考えられる。

溝の幅は、それぞれの断面位置で測って、SD210が幅14cm～38cm、深さ3cm～7cm、SD246が幅41cm、深さ30cm、SD248が幅24cm～34cm、深さ12cm～14cm (6.23m～6.44m) で、北にのびる溝が幅55cm、深さ10cmとなる。溝底の高さは、SD210が南で6.47m、折れ部で6.39m、北東で6.39m、SD246が西で6.21m～東で6.25m、SD248が西で6.39m～東で6.44m、北にのびる溝が北で6.39m～南で6.43mである。いずれの溝も北に向かって下がっている。

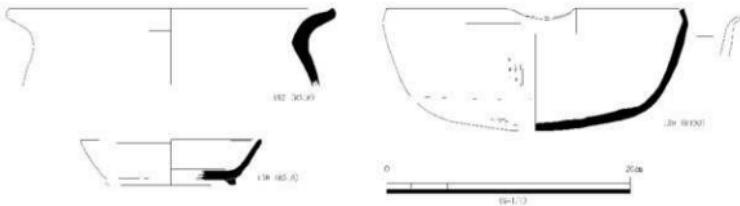
遺物は、SD210から土師器・須恵器、SD246から土師器・須恵器・鉄滓、SD248から土師器が出土した。157・158がSD210の、159がSD248の出土遺物である。とくに159は溝底に散乱した状態で出土した。



第221図 SD210-246-248 断面図



第222図版 SD248 遺物出土状況



番号	器種	口径	底径	器高	形態・手法の特徴	胎土	色調	残部
157	土師器/甕	26.6			内・外面ヨコナデ	砂/多	橙褐色	1/4
158	須恵器/杯	14.7	10.2	3.7	内・外面ヨコナデ	砂/多	淡白色	1/4
159	土師器/鉢	24.4	15.1	10.0	内面ヨコナデ、外面ヨコナデ/ナデ/タキ	砂/少	赤橙色	完形

第223図 SD210-248の出土遺物

#### SD218・220・282 (第224・230図、第225図版)

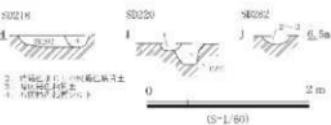
南北方向にのびている幅の狭い溝である。調査区中央部の東側で検出された。東西方向の溝とは直交する溝である。

断面位置での溝の幅は、SD218が30cm前後、深さ15cm、SD220が27cm、深さ9cm、SD282が37cm、深さ10cmを測り、また溝底の高さは、6.47m、6.46m、6.44mとなる。

遺物は、SD218から弥生土器の高杯がまとめて出土した。しかも完形品とまではいえないがかなりの部分が残っていた。遺構の切り合いの判断を間違えたとも考えたが、溝の埋土である土層4はP279と同じで、P279もSK203を切り込んでいた。このことからこの土器群はSK203のもので、混入したと結論付けた。溝の壁面が崩れるときに転落したものであろう。削平がかなり深くなれたものと思われる。

#### SD209・274 (第226・228~230図、第227図版)

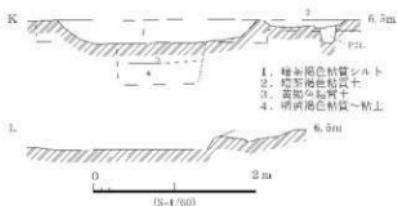
SD209は、調査区の中央から南部にかけて検出された幅広の溝である。東西方向に14m分を確認した



第224図 SD218・220・282 土層断面図



第225図版 SD218 遺物の出土状況



第226図 SD209 土層断面図

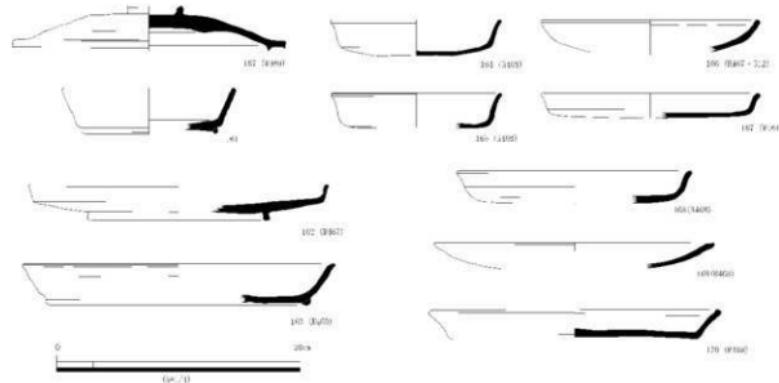


第227図版 SD209 土層断面

が、西は大溝により消滅し、東は後世の削平による消滅あるいは溝のはじまりとなるものか。SD210・246・249を切っている。

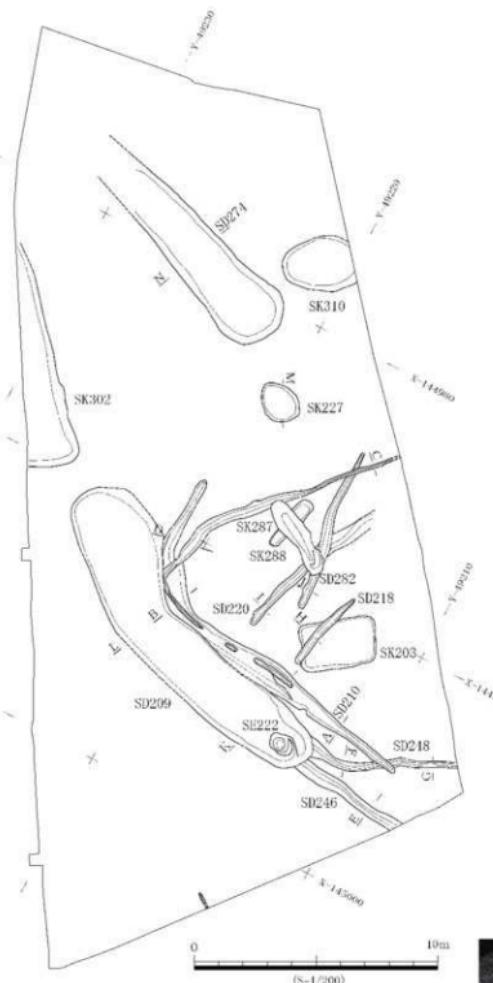
規模は、断面位置で幅2.47m、深さ30cm(6.25m)を測る。埋土は暗茶褐色粘質シルト。

遺物は、図化した遺物が点々と散らばった状態で出土している。



番号	器種	口径	底径	器高	形態・手法の特徴	胎土	色調	残部
160	須恵器/杯蓋	19.6		3.7	天井に自然輪、内・外面ヨコナデ	砂/小	淡灰色	1/6
161	須恵器/杯	13.8	8.9	3.7	内・外面ヨコナデ/ナデ	砂/多	淡灰色	1/3
162	須恵器/杯	24.2	14.8	2.9	内・外面ヨコナデ	砂/小	淡白色	1/8
163	土師器/皿	25.8	21.6	3.4	赤色塗布、内・外面ヨコナデ/ナデ	砂/小	赤橙色	1/8
164	土師器/杯	13.8	12.4	2.9	内・外面ヨコナデ/ナデ	砂/小	赤橙色	1/3
165	土師器/杯	13.8	11.0	2.9	赤色塗布、内・外面ヨコナデ	砂/小	褐色	1/6
166	土師器/杯	17.8			赤色塗布、内・外面ヨコナデ	砂/多	淡褐色	1/4
167	土師器/皿	17.6	16.2	2.0	赤色塗布、内・外面ヨコナデ	砂/小	淡白色	1/5
168	土師器/皿	19.2	15.4	2.6	内・外面ヨコナデ	砂/多	赤橙色	1/6
169	土師器/台付皿	22.8			赤色塗布、内・外面ヨコナデ	砂/小	赤橙色	1/8
170	須恵器/皿	23.5	20.4	2.2	内・外面ヨコナデ/ナデ	砂/多	淡白色	1/2

第228図 SD209の出土遺物

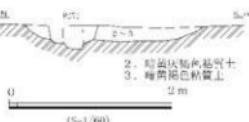


第230図 溝・土坑・井戸 配置図

SD274は、調査区の北部で検出された幅広の溝である。東西方向で約8.6m分を確認し、西は大溝により消滅、またSB 1の柱穴にも切られてしまっている。

規模は、断面位置で幅2.17m、深さ20cm（標高6.20m）を測る。埋土はやや淡い暗茶褐色粘質土である。SD209の埋土と酷似しており、またその方向もほぼ平行していることから同時期の溝と考えられる。

遺物は、土師器が少量出土した。



第229図 SD274 土層断面図

#### 4 土坑

わずかに7基が検出できたにすぎない。

**SK203**（第230・232・233～235図、第231図版）

調査区の南部東よりで検出した。平面形は長方形を呈する。SD218・P279・P281に切り込まれている。

その規模は、2.04m×3.25mで、深さ10cm（標高6.40m）を測る。

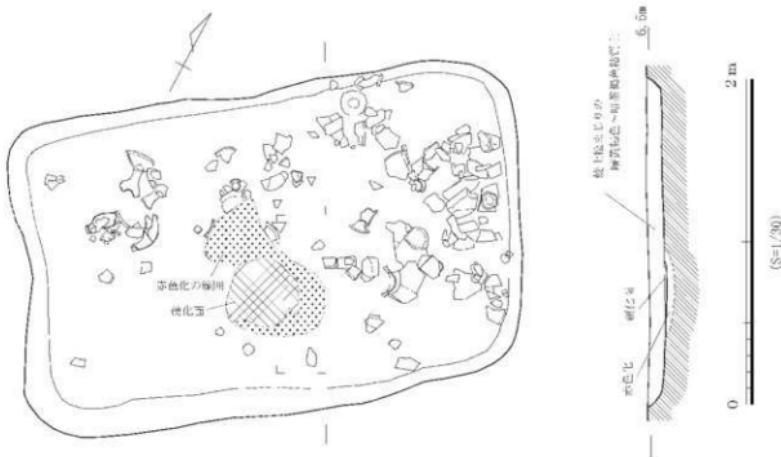
その検出段階から土器片が多量に



第231図版 SK203 土器出土状況

確認され、その主たるものについては土器を残しながら掘り下げを行ったが、図化できずに取り上げた遺物も少なくはない。

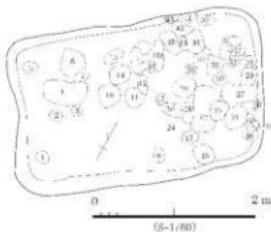
土坑底には、50cm×90cmの範囲で焼成による赤色化が確認され、その中心部分では45cm×50cmの範囲で硬化面となっていた。埋土には焼土粒がわずかに含まれていたものの、炭粒はごくわずかであったことから火を焚いた後に灰土の片づけを行っているものと判断された。また、出土した土器には2次的な焼成を受けたことによって赤色に変化し、表面が荒れて砂粒の目立つもののが多かった。



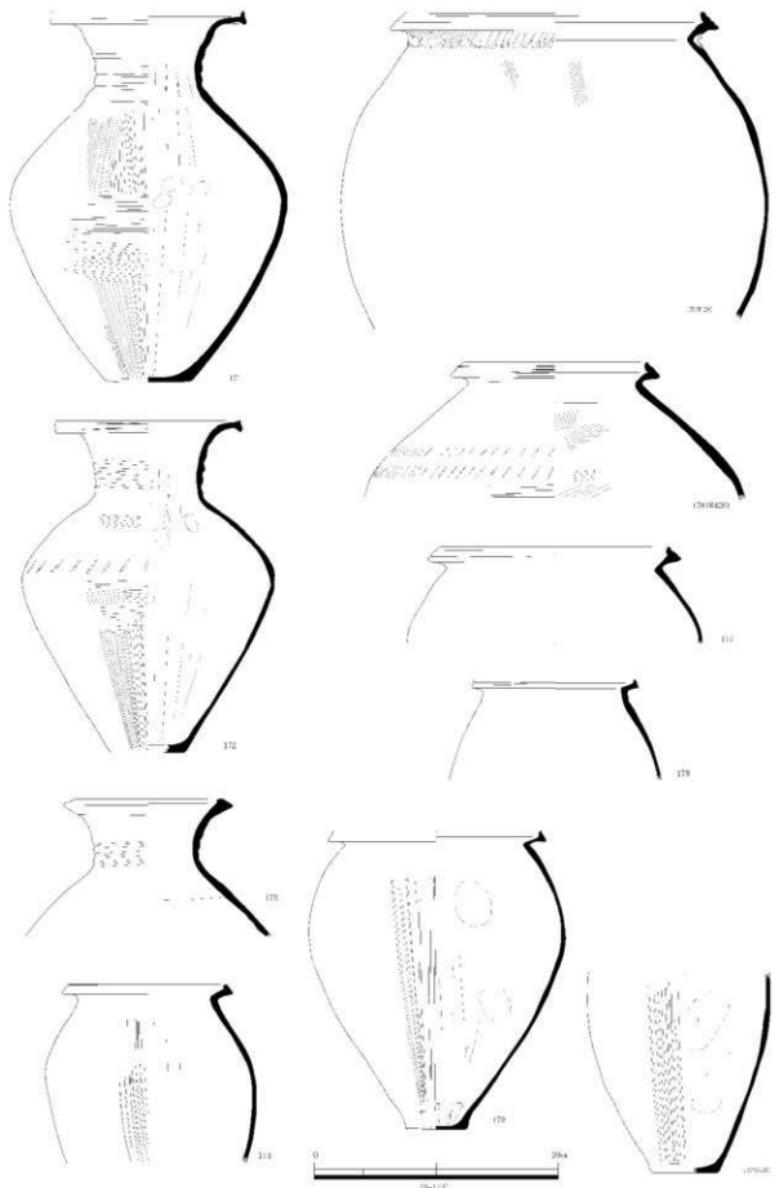
第232図 SK203 平面図・断面図

遺物は、完形を多く含む弥生土器が出土している。その出土状況は一部にまとまっていたものの、その多くはバラバラの破片となり、散乱した状態であった。遺物の取り上げは第221図のようにおおまかにまとめており、図化した遺物の接合結果と整合させると、破片が大きく飛び散っていることがわかる。

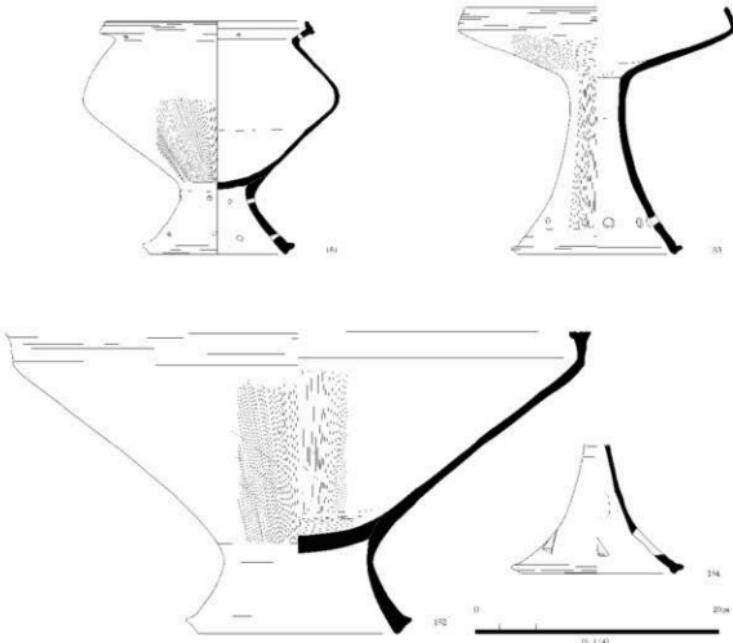
171は15・31・36・40・45、172は17・25・26・28・40、173は11・22、174は7・10、175は16・20・27・29・35～37、176は12・13・15・27・41、177は25、178は35、179は2・14・15・24、180は21、181は4、182は22・26・27・44、183は6・13、  
184は5から出土している。



第233図 SK203 土器取り上げ図



第234図 SK203の出土遺物 1



番号	器種	口径	底径	器高	形態・手法の特徴	胎土	色調	残部
171	弥生/壺	15.7	7.0	34.0	頭部に凹線文としづり痕、内面ヨコナデ/押圧/ケズリ、外側ヨコナデ/ハケ/ミガキ	砂/少	淡褐色	1/2
172	弥生/壺	15.0	6.0	27.2	頭部にハケ刺突文、内面ヨコナデ/ナデ/ケズリ。外面ヨコナデ/ハケ/ミガキ	砂/多	淡褐色	
173	弥生/壺	11.5			内面ヨコナデ/ナデ、外側ヨコナデ/ケズリ	砂/多	淡褐色	完存
174	弥生/甕	12.9			内面ヨコナデ/ケズリ、外側ヨコナデ/ハケ	砂/多	赤褐色	完存
175	弥生/甕	15.0			頭部に刺突文、内面ヨコナデ、外側ヨコナデ/ハケ	砂/多	淡褐色	1/6
176	弥生/甕							
177	弥生/甕	18.8			内面ヨコナデ/ケズリ、外側ヨコナデ/ナデ?	砂/多	淡褐色	1/3
178	弥生/甕	13.2			内面ヨコナデ/ケズリ?、外側ヨコナデ/ハケ?	砂/多	赤褐色	1/4
179	弥生/甕	15.8	5.1	24.5				1/3
180	弥生/甕		5.3					
181	弥生/台付壺	16.5	11.2	19.1				
182	弥生/台付鉢	47.9	16.4	24.7				
183	弥生/高杯	21.2	12.8	20.2	内面ヨコナデ/ケズリ。外側ヨコナデ/ミガキ	砂/多	赤褐色	2/3
184	弥生/高杯		12.5		内面ケズリ/ヨコナデ、外側ナデ/ヨコナデ	砂/少	淡褐色	1/4

第235図 SK203の出土遺物2

### SK227・310 (第230・236図)

調査区の北部で検出した。

SK227は、SH 4に切り込まれている土坑で、平面形は卵形である。規模は、 $1.44\text{m} \times 1.82\text{m}$ 、深さ30cm (6.13m) を測る。

SK310は、東端で検出され、その

1/5程度が調査区外となっている。

規模は、 $2.32\text{m} \times \text{推定}3.3\text{m}$  の卵形で、深さ10cm (6.30m) と浅い。北よりの土坑底でピットを検出したが、土坑にともなうものは不明。

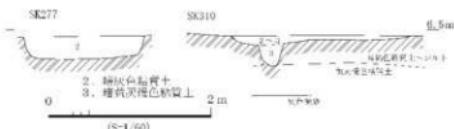
遺物は出土していない。

### SK287 (第230・237図)

調査区の中央部で検出した。SK288、SD220・282に切り込んでいる。

規模は、長さ $3\text{m} \times 0.9\text{m}$  と長細い。深さは25cmで、底面の高さは6.27mとなる。

遺物は製塙土器のほか、土器師が少量出土している。



第236図 SK227・310 土層断面図



第237図 SK287の出土遺物

## 5 井戸

1基のみが検出された。

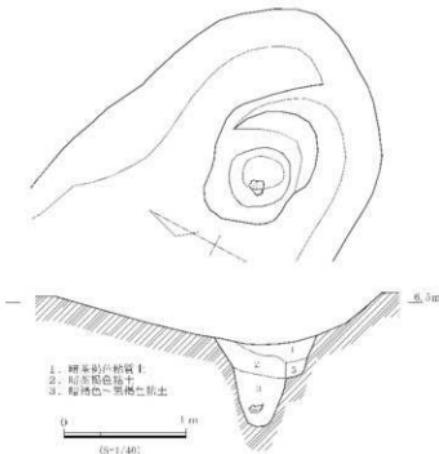
### SE222 (第230・239・240図、第238図版)

調査区の南にあるSD210の東端、その溝底で検出された。平面椭円形の素掘り井戸である。

その規模は、直径 $0.81\text{m} \times 1.05\text{m}$  の椭円形で、深さは溝底から0.67m、遺構面から1.10mを測る。井戸底は $27\text{cm} \times 34\text{cm}$ で、底の高さは5.49mとなる。

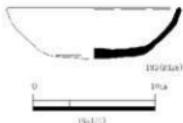


第238図版 SE222 検出状況



第239図 SE222 平面図・断面図

埋土は3層に分層され、上層が粘質土で、下層は粘土となる。  
遺物は、3層中から出土したが、土師器・須恵器・鉄滓が各1点  
にすぎない。



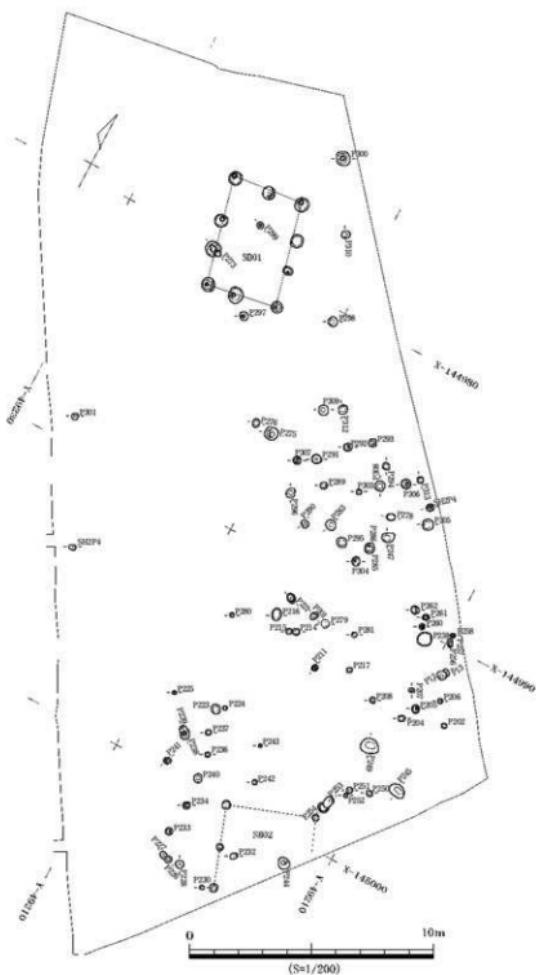
番号	器種	口径	底径	高さ	形態・手法の特徴	胎土	色調	残部
183	須恵器/杯	14.0	7.8	4.2	底部静止の糸切り。内・外面ヨコナデ	砂/少	暗青灰色	2/3

第240図 SE222の出土遺物

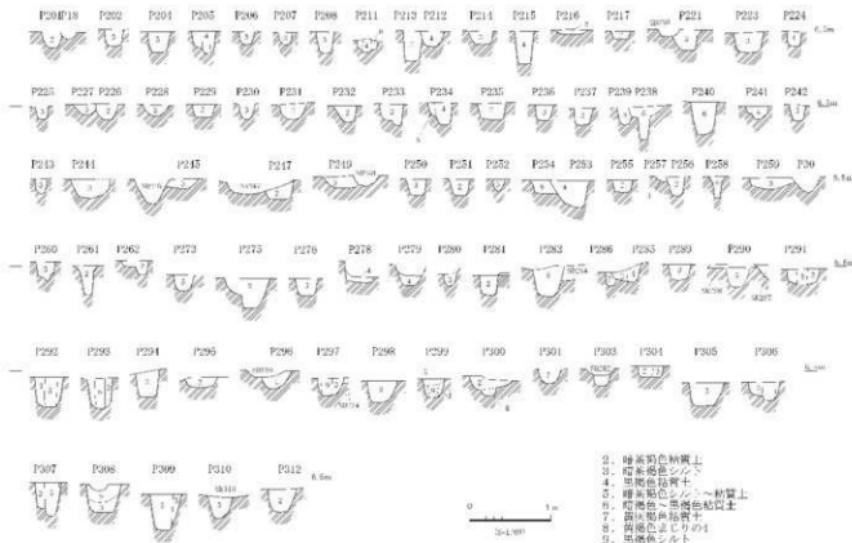
#### 6 ピット (第241・242図)

ピット群は、上層と同様に南東隅を中心と分布している。掘立柱建物の柱穴を含めても、基と、それほど多い数ではなかった。

直径50cmを超える土坑と理解していいようなピットもあるが、その多くは20cm～30cmである。深さも20cm～30cmのものが多い。



第241図 ピット群 平面図



第242図 ピット群 土層断面図

### 3) C地区のまとめ

C地区では、上層と下層の遺構はほぼ同一の面で検出されている。その区別は埋土の違いであり、上面は灰色～黄灰色系の砂質土～砂、下層は暗茶褐色系シルト～粘質土である。また基盤層は黄褐色粘質土である。

上層では、溝・土坑・ピットが調査区の南部に集中して検出された。

まず、い草の染め壺に利用したと考えられる土坑群を検出した。

つづいて大溝の東岸を検出した。大溝は岸から深さ30cm～40cmと水平で、溝の中心にいたって一段深くなる2段の溝になることがわかった。上段の底面には細溝Cが検出され、可耕地として利用された時期も確認できた。

この大溝には東西溝が取り付いている。これにより北と南に区画され、それぞれ方向を同じくする細溝Aが検出され、耕作にともなう溝と判断した。

また、東西溝に切られている細溝Bが検出された。南北に区画される以前にも可耕地であったことが判明した。

ピットは、調査区の南部東側に集中しており、建物の復元はできなかったが、建物域として利用したことが確認できた。

下層では、竪穴住居、掘立柱建物、溝、土坑、井戸、ピットが検出された。

竪穴住居は、円形のものが1棟、方形のものが3棟の、計4棟が検出された。円形の建物が弥生時代、方形のうちカマドをもつものが古墳時代である。

掘立柱建物は、調査区の北部で2間×3間の側柱建物を検出したほかに、南端でも建物の可能性のある柱穴配列を確認した。

土坑には、大量に廃棄された弥生土器の出土したものが確認できた。

溝には、幅の狭いものと幅の広いものがある。幅の狭い溝は、調査区の南東部に集中している。浅い溝であり、他の部分ではすでに削平を受けていたか、あるいはバックホーによる表土掘削で消滅したためか、検出されていない。しかし、ピットなどを削平するほどに地下げされたとは考えられないことから、調査区の北部などではもともと遺構の散布がなかった範囲と推測された。

そこで調査区の北部にサブトレーンチを設定し、遺構面以下の土層の堆積を確認することとした。トレーンチの場所は、SH 2の西側から北に向かってSD310までの12m間で、深さおよそ1mまで掘り下げた。

断面図によると黄褐色の遺構面が北に向かって下降しており、北に向かうほどグライ化して暗灰褐色となっていた。さらにその下には砂層による凹凸が



第243図 深掘りトレーンチ 土層断面図

ピンボールの感触で認められた。この下降部分に堆積した土層からはわずかの土器片や炭の散布も認められたが、遺構の検出はできなかつたので斜面堆積によるものと判断した。また、幅広の溝も、北部に向かって下降し、この基盤層の状況に合わせているように思われる。

この北部の斜面堆積は、その土層1から出土した遺物が弥生時代前期の土器であり、このころからこの微高地上で人々の生活がはじまつたものと推測される。

しかし遺構として検出できたのは、SK203で、弥生時代中期末からである。円形の竪穴住居も同時期と推測される。

古墳時代には、カマド付の建物と掘立柱建物、井戸が確認できた。

これ以後、居住城となる建物は検出されず、SD209などの溝が掘削された。出土した土器から奈良時代の溝である。

中世には、大溝や溝群が検出され、耕作域へと変わる。

耕作地とされた風景は、近世においても引き継がれ、谷状地形の埋没とともに水田へと開墾され、現在にいたつっているものと考えられる。

## 第5章　まとめ

岡山総社IC流通センター敷地造成事業地内には、これまで周知されていた遺跡はなかった。

周辺の調査状況等からみて、遺跡が存在する可能性があると判断したため、事業の開始にともなって試掘調査を実施した。

その結果、事業地内には3ヶ所の遺跡が新たに確認された。長良小田中遺跡、長良八ノ坪遺跡、長良平才遺跡である。

このうちの遺構が濃厚に存在していると推測された長良小田中遺跡の範囲となる防災調整池と施設建設範囲に対して記録保存のための発掘調査を実施した。

調査の結果、2面の遺構面が存在しており、下面が弥生時代～古代、上面が中世から近世となり、それぞれの時期の遺構を検出している

### 弥生時代～古代の長良小田中遺跡

下面の遺構は、竪穴住居、掘立柱建物、土坑（貯蔵穴を含む）、溝、井戸などを検出している。

竪穴住居は10軒で、弥生時代の円形住居が1軒、古墳時代前期の中央炉をもつ方形住居が1軒、古墳時代後期のカマドをもつ方形住居が5軒である。残る3軒も、方形住居であり、カマドをもつ住居に破壊されているものもあることから、いざれも古墳時代の住居である可能性が高い。

掘立柱建物は8棟で、B地区での竪穴住居と掘立柱建物とに重複がないことから、住居にともなって存在していたものと考えられる。

井戸は、A地区で5基が南北に並んだ状態で検出されて、B・C地区でもそれぞれ1基ずつが検出されている。いざれも素掘りの井戸である。A・B地区の井戸が古墳時代前期で、C地区の井戸が奈良時代である。

貯蔵穴はA地区に集中して検出されているが、直径1mを少し超える程度の小型のものである。時期的には弥生時代後期はじめを中心としている。

溝は、古墳時代、奈良時代で、井戸や竪穴住居にともなうと区画溝と推測される。

下面の遺構には、竪穴住居をはじめ、井戸など生活に関わる遺構が検出されている。弥生時代から古墳時代においては、集落域としての土地利用がなされていたものであった。A地区とB・C地区は約120mの距離があり、その間は緑地帯として現状保存となっている。この保存地区にこの時期の集落の中心があったものと推測される。

古墳時代以降については、溝と井戸から奈良時代の土師器・須恵器がわずかであるが出土しており、また古代の遺物も土坑などから散見される。しかし、住居等の遺構が検出されていないことから集落としての遺跡形成であったかは断定しにくい。

### 中世～近世の長良小田中遺跡

上面の遺構は、掘立柱建物、溝、土坑、水田畦畔などを検出している。

掘立柱建物は3棟で、いざれもA地区に位置している。A地区ではほかに土坑やビットなどもまとまって検出されており、B・C地区の耕作地の溝を主体とするものとは大きな差が認められ、おそらく土地利用の使い分けがあったものと考えられる。とくにB地区では小溝群以外の遺構はほとんど検

出されていない。

A地区においても水田畦畔と水田層の堆積層は、おそらく掘立柱建物の廃絶後に形成されたものと推測され、中世後期以降には遺跡全城が耕作地へと変化したものと思われる。

しかもB地区で検出された溝群は、現在の地形と同じ方向の区画となっていることから、これ以降は生産用地としてのみの土地利用に限定され、近世初頭には現在にみるような水田地帯の景観になつたものと考えられる。

#### 長良小田中遺跡と服部郷図

長良小田中遺跡とその周辺は、今も条里的景観が色濃く残されている地区である。しかも、永仁6年（1298年）に書改められ転写されてきた「備中国賀陽郡服部郷図」が描いている範囲に含まれている地区でもある。

この服部郷図は、縦横に区切られたマス目に里名や田畠面積、所有者などの情報が記されており、これまでにもさまざまな研究がなされてきている。

今回の開発地は、この服部郷図の東端にある。図に描かれている砂川や前川、長良山丘陵の位置関係からみて、河面六条の四丁・五・六丁と貴夜里一条の四丁・五・六丁～六条の四・五・六丁に該当するものと判断できるようである。

ちなみに『地理情報システムを用いた歴史的地域景観復元のための技術検討』およびその付表の該当部分の抜粋をすると、

番号	里名	坪付	総計	内 容	備考
16	河面	六条四丁	1反(丁)40	田H8反(施力2反40代/忠慶1反15代/高仁1反45代) 畠3反40代(合1反30代/延久2反10代)	田の合算に2反の不足
17	河面	六条五丁	定丁30	田H5反15代(御服所2反20代/光延20代18歩/相朝2反20代18歩) 畠5反半(重石2反40代/足時半/福吉1反10代/延久1反)	半を25代とすると 統計が15代多い
18	河面	(六条)六丁	無図		
19	貴夜里	一条四丁	定丁	田H9反45代(京3反10代/成元6反35代) 畠5代(延久)	
20	貴夜里	一条五丁	定丁	田H9反45代(高仁2反15代/光延2反/吉行4反/高仁1反10代/延久20代) 畠5代(延久)	
21	貴夜里	一条六丁	定丁10	田H8反10代(吉久5代/高12反/御伊出・光延2反15代/近守2反) 畠(春安15代/延久1反/吉久半)	田の合算に1反の不足
22	貴夜里	二条四丁	定丁	田(御用所)1反10代/高12反/得2反/利成2反/成元20代18歩/八女田1反 /寺2反5代18歩)	田の合算に10代の不足
23	貴夜里	二条五丁	定丁	田(奥緑6反/吉久反/延久2反)	
24	貴夜里	二条六丁	定丁15代18歩	田(高13反/能引2反/御衣・光延2反/福万30代/得力1反35代/寺30代) 畠(寺2反18歩)	
25	貴夜里	三条四丁	定丁	田(万緑2反/寺62反/延久2反)	
26	貴夜里	三条五丁	定丁	田(高17段/能引3段)	
27	貴夜里	三条六丁	定9反30代18歩	田(高12反10代18歩/光延・御衣35反20代/井守2反/常不15代18歩)	
28	貴夜里	四条四丁	定丁	田(延久2反/光延・長瀬2反/高12反/辛穂2反/利成2反)	
29	貴夜里	四条五丁	定丁	田(寛13反10代/貞重5反5代/麦草1反35代)	
30	貴夜里	四条六丁	定丁	田(高12)	
31	貴夜里	五条四丁	定丁	田(御服所5段10代/光延3段/高忍1反30代)	田の合算に10代の不足
32	貴夜里	五条五丁	定丁	田(吉久2反20代/施力2反10代/御田2反/光延20代/忠慶2反/高仁1反)	
33	貴夜里	五条六丁	定9反20代	田(不30代/施力2反/光延2反15代/春安/延久1反30代/高仁1反/安慶 2反35代)	
34	貴夜里	六条四丁	定丁	田(高仁1反/延久40代/力都2反/舜介4反10代/相朝2反)	
35	貴夜里	六条五丁	定丁20代	田(相朝2反/国領2反/是安2反/寺1反/光延1反/長瀬2反)	
36	貴夜里	六条六丁	定丁30代	田H9反30代(高14反20代/御服所3反10代/千福1反/延久1反) 畠1反(延久)	

となる。

第20図版の空中写真と服部郷図の河面・貴夜里を重ね合せると、発掘調査した長良小田中遺跡の範囲は、A地区がマス目16の河面六条四丁、B地区がマス目20の貴夜里一条五丁、C地区がマス目19の貴夜里一条四条となる。

この表からマス目16・19・20は、17・21・24・36とともに畠が存在していることがわかる。しかも、16・17は畠の比率が高く、田と畠が半々近くにもなっている。けれども21・36はかなり低くなり、19・20・24ではごくわずかとなっている。

今回の調査でも上面遺構で水田畦畔や水田層、耕作溝、水路が検出されている。報告ではB・C地区の耕作溝も水田にともなうものとしたが、A地区で検出した水田畦畔は検出できずに耕作溝と区画溝であり、長良小田中遺跡の立地する地形を考えると畠作にともなう可能性も否定できないうえ、「服部郷図」を援用すると畠作地と判断できるのではないか。

服部郷図の描いた景観は、13世紀末以前であり、B・C地区の上面遺構群と重なるものと考えられる。また、A地区的掘立柱建物や落ち込みなどは13世紀末～14世紀前半で、水田畦畔も掘立柱建物を考慮すると、15世紀に近い時期と推測できる。A地区では13世紀末以前の遺構群がまったく検出されていないことから、B地区のような耕作溝群は後世の耕作等により消滅あるいは削平された可能性が高い。ちなみに、B地区の耕作溝の検出面は6.53m～6.60m、A地区の田面の高さは6.50m～6.66mとなっている。

A地区は、マス目16に該当し、しかも長良小田中遺跡の中央部分がすっぽりとはまるものであることからマス目に占める畠作地の範囲は大きく、残る部分もその多くは河道が占めている。16は先にみたように畠の比率が高いことからA地区を該当させることは肯定ができる。

B地区は、マス目20に該当し、B地区が微高地の範囲であることから、マス目の1/15を占めていることになる。1/15が先にみた畠の比率のごくわずかに当たるのかはやや疑問が残る。

C地区は、マス目19に該当し、長良小田中遺跡の立地する微高地がマス目の1/6を占めている。B地区同様に1/6がごくわずかに当たるかは疑問が残る。

さらにマス目17は、田と畠の比率がほぼ半々である。A地区をマス目16に当てると、その西隣が17であり、現況では砂川がマス目の中央部を流れ、その北東になる用水路が旧砂川としても、マス目の多くが河道となる。17が定丁30で、内訳の田5反15代・畠5反半が存在しそうかどうか大いに疑問が残る。

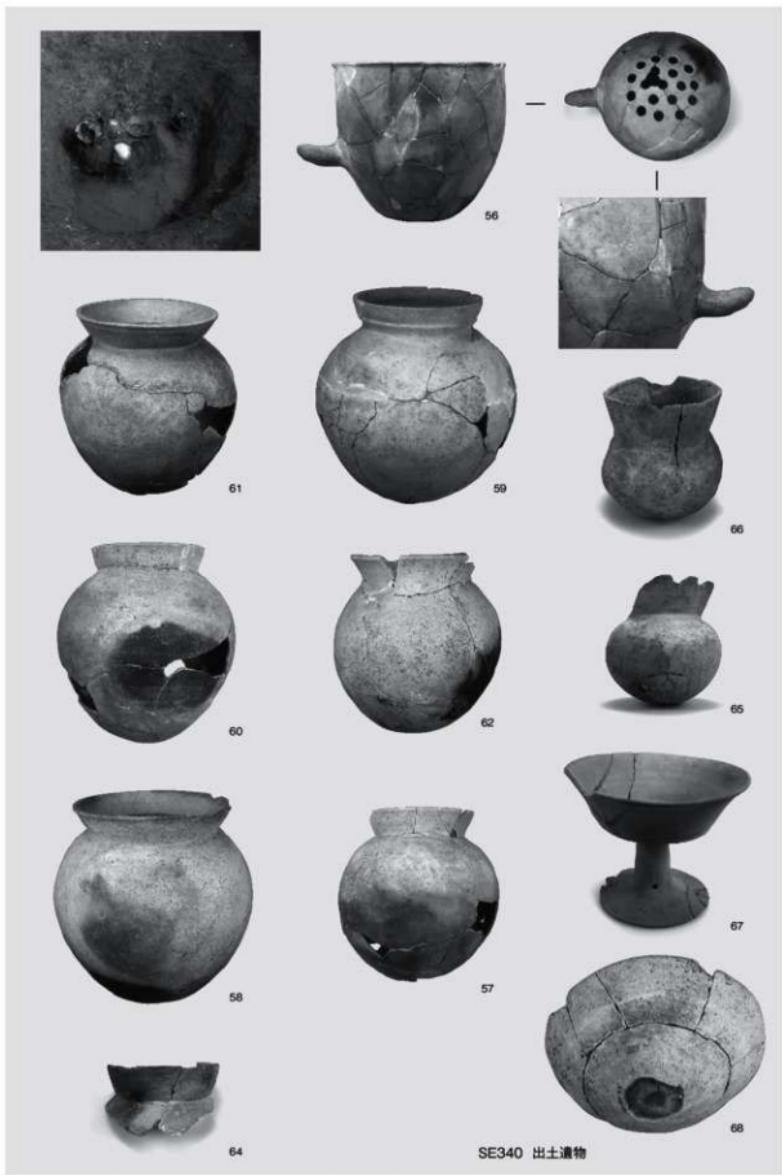
これらの解決方法として考えられるのは、砂川の旧河道が移動していないか推定される用水路の位置ではなくて、もっとほかの位置を流れていたと考えるか、マス目の該当地区が違っているかである。河道を大きく東あるいは西に振ることには無理がある。仮に西に移動させるとしてもマス目146・147・152・153・158・159は定丁にいずれも近いことから、河道を当てることはできない。東へも同様である。

河道を移動することが無理であることから、マス目の該当位置を変えるとすれば、東への移動が考えられる。マス目17を田と畠の比率にするには長良小田中遺跡の立地する微高地に該当させる必要がある。長良小田中遺跡は北西から南東にのびていることからマス目16が東に移動しても問題はない。問題は移動をどの程度すべきかである。簡単には一マス東へ移動することが現在の地割との整合性が良い。しかし、砂川がそのマス目に当たれている123・129・135がいずれも定8反前後と、河道分を除いており、これを一マス東へ移動すると河道が該当しなくなる可能性が生じる。現河道と旧河道の検証が必要であるが、現時点では半マスを移動することが妥当と考えている。

今後は、試掘調査時のデータや発掘調査で検出した大溝などの詳細な検討を行う必要があり、今後の立会調査とした長良八ノ坪遺跡・長良平才遺跡についても問題解決への対応を検討していきたい。

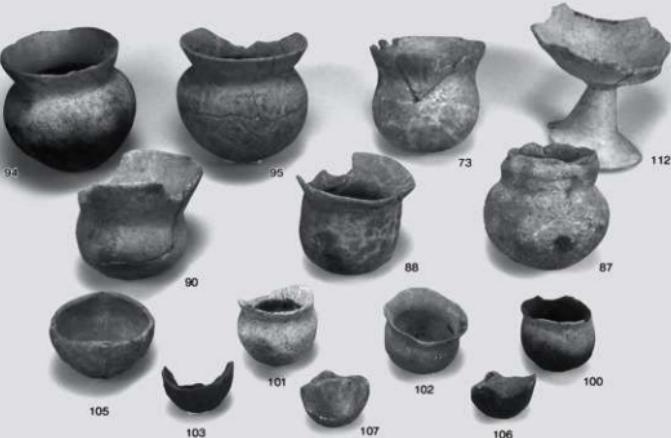


第244図版 A地区 出土遺物 1



SE340 出土遺物

第245圖版 A 地區 出土遺物 2



SE345 出土遺物



SE342 出土遺物



SK3312 出土遺物



SK343 出土遺物



SK3316 出土遺物



SK323 出土遺物



136



135



142

SH01 出土遺物

SH03 出土遺物



147



159

SE01 出土遺物

SD248 出土遺物



157



158



164



165



166

163



167

SD209 出土遺物



171



182



181



183

SK203 出土遺物

第247図版 B・C地区 出土遺物

## 報告書抄録

総社市埋蔵文化財発掘調査報告22

長良小田中遺跡

(岡山總社IC流通センター敷地造成  
事業にともなう発掘調査報告書)

平成23（2011）年3月30日 印刷

平成23（2011）年3月30日 発行

編集発行 岡山県總社市教育委員会  
岡山県總社市中央一丁目1番1号

印 刷 サンコー印刷株式会社  
岡山県總社市真壁871-2